鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IX

（伊集院IC～市来IC）

下永迫（しもながさこ）A遺跡

（日置郡伊集院町）

2004年2月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

赤色土器・黒色土器

序　文

この報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ）建設に伴い，平成10年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した下永迫Ａ遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって，縄文時代，古墳時代，古代～中世の遺構・遺物が数多く発見されました。

なかでも，多数の赤色の土師器やさまざまな文字が墨書された墨書土器などの出土は，当地方の古代における歴史の一端を明らかにする上で貴重な資料を提供することになりました。

本報告書が，地域の歴史研究や文化財の啓発・普及の一助として多くの方々に活用していただければ幸いです。

終わりに，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所や地元の皆様に，多大な御協力と文化財に対する深い御理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成16年２月

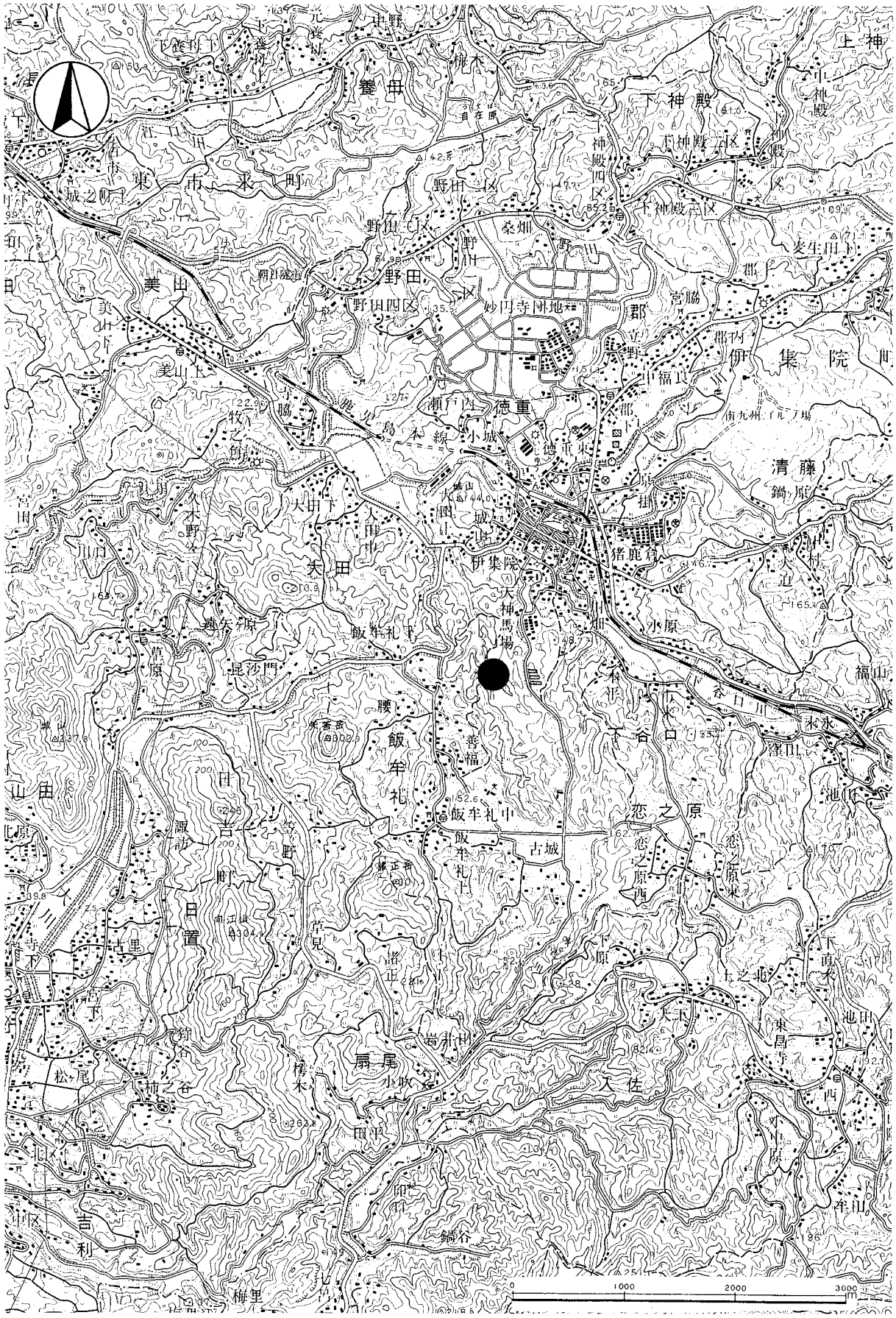
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　木　原　俊　孝

報　告　書　抄　録

ふりがな	しもながさこえーいせき
書名	下永迫A遺跡
副書名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅸ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	72
編著者名	石丸　良輔
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4461　鹿児島県国分市上之段1175番地１　℡0995－48－5811
発行年月日	西暦2004年　２月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査起因
しもながさこえーいせき 下永迫A遺跡	かごしまけん 鹿児島県 ひおきぐんいじゅういんちょう 日置郡伊集院町 しもたにぐちあざしもながさこ 下谷口字下永迫	463639	30－67	31° 36′ 51″	130° 23′ 43″	確認調査 19971007 ～ 19971014 本調査 19980506 ～ 19980703	76㎡ 2,600㎡	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下永迫A遺跡	包含地	縄文時代後期 縄文時代晩期 古墳時代 古代 中世	 集石１基 土坑１基	指宿式土器 石鏃・磨石 スクレイパー 黒色研磨土器 成川式土器 土師器・須恵器 黒色土器・赤色土器・墨書土器・砥石 青磁・白磁	



第１図　下永迫Ａ遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ）建設に伴う下永迫Ａ遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県日置郡伊集院町下谷口字下永迫に所在する。
3　発掘調査は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。
4　発掘調査事業は平成10年５月６日から平成10年７月３日にかけて実施し，報告書作成事業は平成15年度に実施した。
5　遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致する。
6　挿図の縮尺は，各図面に示した。
7　本書で用いたレベル数値は，建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所（現　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所）が提示した工事計画図面に基づく。
8　発掘調査及び現場における図面の作成・写真の撮影は，調査担当者が行った。
9　遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター鶴田靜彦と西園勝彦が担当した。
10　赤色土器の顔料分析については，鹿児島県立埋蔵文化財センター永濵功治が行い，その分析結果を付編に掲載した。
11　本書の執筆・編集は石丸が行い，付編については，永濵功治が分析執筆した。
12　本書の作成にあたり，墨書土器の判読について，永山修一氏（ラ・サール学園），柴田博子氏（宮崎産業経営大学），平川南氏（国立歴史民俗博物館）の各氏に御指導，御教示いただいた。
13　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。

凡　　例

1　土師器におけるスクリントーンの貼付は，以下の通りである。

煤付着部分

黒色土器煤吸着部分

赤色土器顔料塗布部分

2　遺物観察表における法量（口径・器高・底径・脚高・高台高）の単位は㎝である。
3　遺物観察表における法量の（　）の数値は，残存高を表す。

目　　次

序　　文
報告書抄録
例言・凡例
目　　次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　遺跡の概要 …… 1
第２章　　調査の経過 …… 6
　第１節　調査に至るまでの経緯と経過 …… 6
　第２節　調査の組織 …… 6
　第３節　調査の経過（日誌抄） …… 7
第３章　遺跡の位置及び環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 9
第４章　調査の概要 …… 13
　第１節　調査の方法 …… 13
　第２節　地形及び層位 …… 16
　　１　地形 …… 16
　　２　層位 …… 16
　第３節　縄文時代の調査 …… 20
　　１　土器 …… 20
　　２　石器 …… 24
　第４節　古墳時代の調査 …… 27
　第５節　古代の調査 …… 33
　　１　検出遺構 …… 33
　　２　出土遺物 …… 33
　第６節　中世の調査 …… 71
第５章　まとめ（成果と課題） …… 75

付　　編 …… 83
写 真 図 版 …… 85

挿　図　目　次

第１図　下永迫Ａ遺跡位置図
第２図　西回り自動車道調査遺跡位置図 …… 5
第３図　周辺遺跡位置図 …… 11
第４図　下永迫Ａ遺跡調査範囲図 …… 14
第５図　下永迫Ａ遺跡グリッド図 …… 15
第６図　土層柱状図 …… 16
第７図　Ⅲａ層上面コンター図 …… 17
第８図　土層断面図Ⅰ …… 18
第９図　土層断面図Ⅱ …… 19
第10図　縄文時代の土器Ⅰ …… 20
第11図　遺物出土状況（縄文土器・石器） …… 21
第12図　縄文時代の土器Ⅱ …… 22
第13図　縄文時代の土器Ⅲ …… 23
第14図　縄文時代の石器Ⅰ …… 25
第15図　縄文時代の石器Ⅱ …… 26
第16図　古墳時代の土器Ⅰ …… 28
第17図　古墳時代の土器Ⅱ …… 30
第18図　古墳時代の土器Ⅲ …… 31
第19図　遺構位置図 …… 34
第20図　土坑・集石 …… 35
第21図　遺物出土状況（古代）Ⅰ …… 36
第22図　遺物出土状況（古代）Ⅱ …… 37
第23図　土師器（坏Ⅰ） …… 39
第24図　土師器（坏Ⅱ） …… 41
第25図　土師器（埦） …… 43
第26図　土師器（坏・埦の口縁部） …… 45
第27図　土師器（皿・鉢） …… 47
第28図　土師器（甕Ⅰ） …… 48
第29図　土師器（甕Ⅱ） …… 50
第30図　土師器（甕Ⅲ） …… 51
第31図　遺物出土状況（黒色・赤色・墨書土器） …… 54
第32図　黒色土器 …… 56

第33図　赤色土器Ⅰ …… 58
第34図　赤色土器Ⅱ …… 61
第35図　墨書土器 …… 63
第36図　須恵器Ⅰ …… 66
第37図　須恵器Ⅱ …… 67
第38図　須恵器Ⅲ，砥石 …… 68
第39図　中世の遺物Ⅰ …… 72
第40図　中世の遺物Ⅱ …… 73
第41図　赤色土器出土遺跡位置図 …… 78
第42図　下永迫Ａ遺跡残存範囲図 …… 82

表　目　次

第１表　南九州西回り自動車道発掘調査遺跡一覧表 …… 4
第２表　周辺遺跡一覧表 …… 12
第３表　縄文土器観察表 …… 26
第４表　縄文石器観察表 …… 26
第５表　古墳時代土器観察表 …… 32
第６表　古代遺物（土師器）観察表Ⅰ …… 51
第７表　古代遺物（土師器）観察表Ⅱ …… 52
第８表　古代遺物（土師器）観察表Ⅲ …… 53
第９表　墨書土器一覧表 …… 62
第10表　古代遺物（土師器）観察表Ⅳ …… 69
第11表　古代遺物（土師器）観察表Ⅴ …… 70
第12表　古代遺物（須恵器）観察表Ⅵ …… 70
第13表　古代遺物（砥石）観察表Ⅶ …… 70
第14表　中世遺物観察表Ⅰ …… 74
第15表　中世遺物観察表Ⅱ …… 74
第16表　出土区ごとの土師器（坏・埦・Ⅲ）出土量（総重量） …… 76
第17表　出土区ごとの出土量（総重量） …… 76
第18表　赤色・黒色・墨書土器の割合 …… 76
第19表　赤色土器出土遺跡一覧表 …… 79

図　版　目　次

図版１　下永迫Ａ遺跡近景，発掘作業風景 …… 85
図版２　東西土層断面状況，南北土層断面状況 …… 86
図版３　土坑・集石 …… 87
図版４　遺物出土状況 …… 88
図版５　縄文時代の遺物⑴（土器） …… 89
図版６　縄文時代の遺物⑵（土器・石器） …… 90
図版７　古墳時代の遺物 …… 91
図版８　古代の遺物⑴（土師器：鉢・甕） …… 92
図版９　古代の遺物⑵（土師器：坏・埦） …… 93
図版10　古代の遺物⑶（土師器：埦・皿，黒色・赤色土器） …… 94
図版11　古代の遺物⑷（土師器：赤色土器・墨書土器） …… 95
図版12　古代の遺物⑸（墨書土器） …… 96
図版13　古代の遺物⑹（須恵器・砥石） …… 97
図版14　中世の遺物（土師器・青磁・染付・陶器） …… 98

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に伊集院ＩＣと市来ＩＣ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて，平成８年度から平成12年度にかけて，毎年度，計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

事業区間内の遺跡の概要については，以下の通りである。なお，確認調査等によって遺跡でないと判明した11か所は除いてある。

第２節　遺跡の概要

１　一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高約90m～95mの丘陵端部に位置し，調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが，青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。

２　永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の２か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し，縄文時代早期前半の前平式期には９軒の住居跡を始め，３基の連穴土坑と９基の集石，多数の土坑を検出。その他，古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。

３　下永迫Ａ……伊集院町下谷口下永迫の標高約85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で，縄文時代後期の指宿式土器と石鏃，古墳時代の成川式土器，古代～中世の土坑・集石が検出され，青磁・白磁が出土した。　（本報告書）

４　柳原……伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間，傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石４基や後期の石匙，石鏃，古代の土坑，焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。

５　上山路山……伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり，平坦面から続く緩やかな斜面と，谷頭を含んだかなり急な斜面とか

らなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期），弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは縄文時代早期で，遺構は道跡や集石，遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

6　大田城跡……伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが，山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化，細石文化の遺物と縄文時代早期の集石，土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。

7　堂平窯跡……東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で，窯，作業場，物原が発見された。窯の長さ約30m，幅1.2m，傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・擂鉢・動物形土製品），瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。

8　池之頭……東市来町美山字池之頭にあり，美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し，調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃・縄文時代早期の集石８基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器，晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また，古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。

9　雪山……東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石２基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石，古墳時代の成川式土器が出土したが，主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で，炉跡・物原？・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・擂鉢・瓶・碗），染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。

10　猿引……東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群１基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曽畑式土器・黒曜石片が出土した。

11　犬ヶ原……東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は2,000㎡で，旧石器時代の細石刃核・細石刃，縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧石皿・石鏃・石匙，古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが，主になるのは平安時代で，掘立柱建物跡（４間×４間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞴羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。

12　向栫城跡……東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ，縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また，古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され中世山城としての遺構が確認された。

13　堂園平……東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり，標高約50mの平坦地に立

地する。調査面積は2,000㎡で，旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群９基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃，縄文時代の集石４基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また，古代の土師器・須恵器等も出土している。

14　今里……東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で，旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群，剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し，縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙など石器，古墳時代の成川式土器が発見された。

15　市ノ原……市来町大里字上ノ原前から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50mの台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第１地点から第５地点まであり，旧石器時代ナイフ形石器文化，細石刃文化，縄文時代（早期～晩期），弥生時代の住居跡・埋壺，古墳時代の住居跡，古代～中世，近世の街道跡など多時期に亘り，多種多様な遺構・遺物が発見された。

16　上ノ原……市来町大里の東シナ海を望む標高約40mの台地上に立地し，三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石３基，土坑が検出され，塞ノ神式・轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴住居跡１基と土坑・成川式土器が，古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

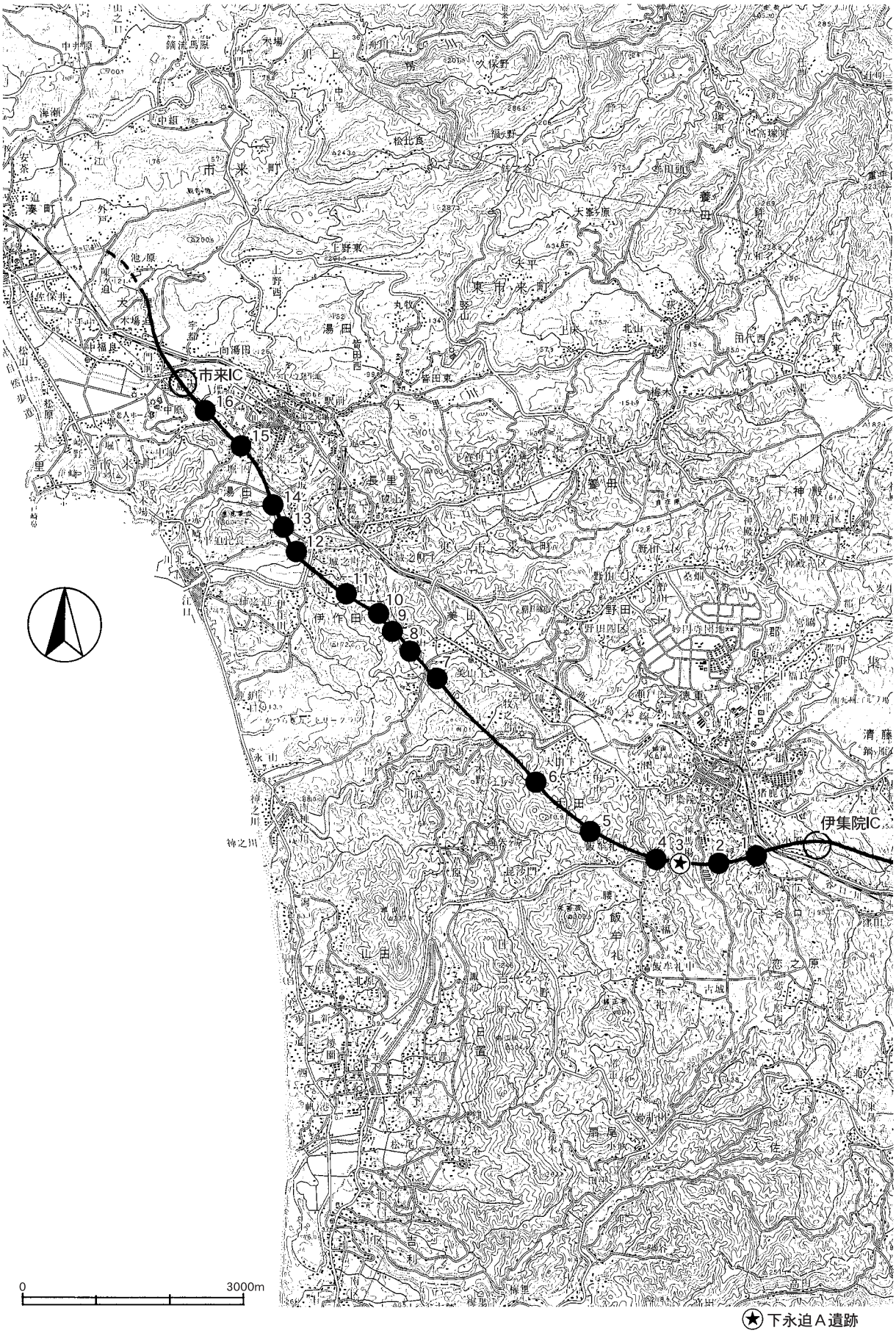
※　刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書㉛	2001
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書㉜	2002
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書㉝	2002
「市ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書㊾	2003
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書㊿	2003
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53)	2003
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(62)	2003

第１表　南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

○印　報告書刊行済

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	備考
①	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認H8.10 全面H8.10～11	1,250㎡	三垣・桑波田	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 県埋文センター報告書31　2001刊行
2	永迫平	伊集院町下谷口	確認H8.10～12 全面H8.12～H10.7	14,000㎡	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原 桑波田・川口・大窪	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・後・晩） 古代～近世	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑・前平式土器 土師器・青磁
③	下永迫Ａ	伊集院町下谷口	確認H9.10 全面H10.5～７	2,600㎡	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代 中世	土坑・集石・土師器・須恵器 青磁・白磁 県埋文センター報告書72　2004刊行　本報告書
4	柳原	伊集院町下谷口	確認H9.11 全面H10.7～10	6,000㎡	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピット・溝状遺構
5	上山路山	伊集院町大田	確認H9.2 全面H9.5～H10.3	6,000㎡	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文（早・後） 弥生～古墳	剥片・砕片 道跡・集石・岩本式・前平式・吉田式 成川式
6	大田城跡	伊集院町大田	確認H8.12～H9.1 全面H9.12～H10.3	4,000㎡	三垣・桑波田 湯之前・橋口	旧石器 縄文（早）	三稜尖頭器 集石・土坑・前平式・石鏃・磨石
7	堂平窯跡	東市来町美山	確認H10.2 全面H10.8～12	3,500㎡	池畑 池畑・繁昌・宮田洋一・ 森田・元田・川口・大窪	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具
⑧	池之頭	東市来町美山	確認H9.8 全面H10.8～11 H12.7～８	7,500㎡	湯之前・橋口 宮田洋一・寺原 宮田洋一・三垣	旧石器（細石刃） 縄文（早・後・晩）	細石刃核・細石刃 集石・前平式・吉田式・石坂式 成川式土器 県埋文センター報告書32　2002刊行
⑨	雪山	東市来町美山	確認H12.6 全面H12.6～８	2,700㎡	宮田洋一・三垣	縄文（早） 近世～近代	集石・前平式 陶磁器類・窯道具 県埋文センター報告書53　2003刊行
⑩	猿引	東市来町長里	確認H12.5 全面H12.5～６	800㎡	宮田洋一・三垣	旧石器 縄文（前）	礫群・ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・剥片 曽畑式 県埋文センター報告書53　2003刊行
⑪	犬ヶ原	東市来町伊作田	確認H9.2，H10.6 全面H11.12～H12.2	2,000㎡	池畑・三垣 牛ノ瀬・橋口・大窪	旧石器・縄文（晩） 古代	細石刃核・細石刃・黒川式 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・硫黄・滑石 県埋文センター報告書50　2003刊行
12	向栫城跡	東市来町伊作田	確認H8.11～12 全面H9.4～H10.3 H10.7～８	14,000㎡	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文（草創・早・後） 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃・隆帯文・前平式・市来式 竪穴住居・成川式 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・竪穴状遺構 掘立柱建物跡・炉跡・土坑・青磁・備前焼
13	堂園平	東市来町伊作田	確認H8.11～12 全面H10.5～11	2,000㎡	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・前・後） 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石 礫群・細石刃核・細石刃 集石・吉田式・塞ノ神式・轟式 土坑・土師器・須恵器
⑭	今里	東市来町伊作田	確認H8.11 全面H9.4～11	14,000㎡	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・前・後・晩） 古墳	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・ブランク・調整剥片 集石・前平式・深浦式・出水式・黒川式・石匙 成川式 県埋文センター報告書33　2002刊行
⑮	市ノ原	東市来町湯田 市来町大里	確認H8.10～12 全面H8.12～H11.7	62,000㎡	繁昌・西園・宮田茂樹 池畑・繁昌・西園・寺師 ・前野・森田・宮田洋一 ・八木澤・中原・藤野・ 三垣・元田・西村・寺原 ・宮田茂樹・松村・松崎	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早～晩） 弥生 古墳 古代～中世 近世	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 細石刃核・細石刃 集石・土器・石器 竪穴住居跡・壺棺 竪穴住居跡・土坑・成川式 竪穴住居跡・焼土・溝状遺構・土師器・須恵器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉 県埋文センター報告書49　2003刊行
⑯	上ノ原	市来町大里	確認H8.11 全面H10.7～９	2,000㎡	繁昌・宮田茂樹 上之園・栗林	縄文（早） 古墳 古代～中世	集石・土坑・塞ノ神式 竪穴住居跡・土坑・成川式・貝殻土坑 土師器・須恵器・青磁 県埋文センター報告書62　2003刊行



第２図　西回り自動車道調査遺跡位置図

第２章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯と経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年１月より国土交通省九州地方整備局に改称）は，鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成８年度４月より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い，文化課が平成３年６月に伊集院インターチェンジと市来インターチェンジ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，建設省鹿児島国道工事事務所と文化課との協議に基づき，鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の確認調査と，その後の緊急発掘調査（以下本調査）を鹿児島県立埋蔵文化財センターですることになった。

下永迫Ａ遺跡については，平成９年10月に確認調査を行い，遺跡の範囲や性格等を把握した。これを受けて平成10年５月６日から平成10年７月３日まで同遺跡の本調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図った。調査対象面積は2,600㎡である。なお，発掘調査終了後整理作業及び報告書作成を平成15年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第２節　調査の組織

平成10年度（発掘調査）

起因事業主体	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永　和人
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	尾﨑　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑　耕一
調査担当	〃	文化財主事	上之園健二
	〃	文化財研究員	栗林　文夫
調査事務担当	〃	主査	政倉　孝弘
	〃	主事	溜池　佳子

平成15年度（整理作業・報告書作成）

起因事業主体	国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所		
整理作業主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
整理作業責任	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	木原　俊孝

整理作業企画担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	総務係長	平野　浩二
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
整理作業担当	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
	〃	文化財研究員	石丸　良輔
	〃	文化財主事	吉岡　康弘
	〃	〃	繁昌　正幸
整理作業事務担当	〃	主査	脇田　清幸
報告書作成検討委員会	平成15年11月11日	所長ほか　10名	
報告書作成指導委員会	平成15年11月４日	調査課長ほか　４名	
企画担当者		繁昌正幸・中村和美	

発掘作業員（五十音順・敬称略）

有村なるみ・石田万里子・岩切ひとみ・柿内弘巳・金里美恵子・川口貞子・川畑けい子・木佐貫栄治・岸上正子・楠原操・隈元加代子・小林喜代江・白石時則・杉村しのぶ・中島蓉子・梛木紀子・西文江・東一夫・福岡優子・福留美喜子・福森隼人・藤嵜ルリ・二俣幸子・前野かをる・前村国夫・松下弘美・松元チヅ子・南シヅ子・南ノブ子・嶺井やよい・森園カツヨ・森田トキ子・柳田和孝・四元幸子

整理作業員

竹添つるえ・坂口裕子・福満喜久子

第３節　調査の経過（日誌抄）

確認調査は，平成９年10月７日から10月14日にかけて計５日間実施した。緊急発掘調査（本調査）は平成10年５月６日から平成10年７月３日までの間，計33日間実施した。調査の経過を日誌抄により週毎に略述する。

確認調査

平成９年10月７日（火）～10月14日（火）

確認トレンチ１（37m×２m）・２（２m×１m）を設定し，人力による掘り下げ開始。古代～中世の遺物出土。Ⅱ・Ⅲ層出土遺物取り上げ。断面実測，写真撮影。埋め戻しを行い，確認調査終了。

緊急発掘調査（本調査）

平成10年５月６日（水）～５月８日（金）

発掘現場及びその周辺の枯木・雑草等を除去し，Ｇ～Ｉ－20～25区の表土を重機により剥ぎ取る。Ⅱ層の掘り下げを開始する。

平成10年５月11日（月）～５月15日（金）

Ⅱ・Ⅲ層の掘り下げを行い，Ⅱ・Ⅲ層出土遺物を平板実測，取り上げ。先行トレンチ１を設定し，掘り下げを開始。トレンチ１，Ⅷ層（シラス）まで掘り下げ。縄文・旧石器時代の遺物・遺構なし。

トレンチ１調査終了。

平成10年５月18日（月）～５月22日（金）

トレンチ２を設定し，掘り下げを開始。Ｇ～Ｉ区－21～25区のⅡ・Ⅲ層遺物包含層の掘り下げ。出土遺物を平板実測，取り上げ。Ｋ～Ｍ－20～24区の表土を重機により剥ぎ取る。トレンチ２，Ⅷ層（シラス）まで掘り下げ。縄文・旧石器時代の遺物・遺構なし。トレンチ２調査終了。Ｇ～Ｉ－21～25区土層状況写真撮影，土層断面図実測。

平成10年５月25日（月）～５月28日（木）

土層断面図実測終了。Ｋ～Ｍ－20～24区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。土師器埦出土，写真撮影。出土遺物を平板実測，取り上げ。トレンチ３を設定し，掘り下げを開始。

平成10年６月１日（月）～６月５日（金）

Ｋ～Ｍ－20～24区Ⅲ層掘り下げ。遺物出土状況写真撮影。平板実測後，遺物取り上げ。Ⅲ層精査。遺構（土坑１・２）検出。土坑１・２写真撮影，平板による実測。トレンチ３土層断面写真撮影，土層断面図実測。Ⅲ層上面コンター図作成。南日本新聞社文化部園田記者来跡（１日）

平成10年６月８日（月）～６月12日（金）

トレンチ３調査終了。Ｉ～Ｋ－21～25区の表土を重機と人力により剥ぎ取る。Ⅱ層掘り下げ。出土遺物を平板実測，取り上げ。

平成10年６月15日（月）～６月19日（金）

トレンチ４設定，掘り下げ。Ｉ～Ｋ－21～25区Ⅱ層掘り下げ。出土遺物平板実測後，取り上げ。Ⅲ層上面で精査，遺構（集石・土坑）検出。Ⅲ層上面コンター図作成。

平成10年６月22日（月）～６月26日（金）

Ｉ～Ｋ－21～25区Ⅲ層掘り下げ。出土遺物平板実測後，取り上げ。トレンチ４掘り下げ。土坑を半截し，断面を写真撮影。断面の実測後，完掘する。完掘状況の写真撮影，実測。集石の平面図実測。

平成10年７月１日（水）～７月３日（木）

Ｉ～Ｋ－21～25区Ⅲ層掘り下げ。出土遺物を平板実測し，取り上げた後，再度精査する。遺構は検出されず。集石断面図実測。先行トレンチ４，Ⅷ層（シラス）まで掘り下げ。縄文・旧石器時代の遺物・遺構なし。土層断面写真撮影。トレンチ４の調査終了。Ｉ～Ｋ－21～25区完掘状況写真撮影。３日全ての調査を終了する。

整理作業

整理作業は，平成15年４月～12月にかけて，国分市上之段の県立埋蔵文化財センターで行った。大まかな整理作業及び報告書作成作業の経過は下記のとおりである。なお，平成10年度の本調査後，調査担当者の栗林文夫が概略的な整理を行った。

平成15年４月～５月；実測図点検。遺物接合，遺物選別，遺物実測。

平成15年６月～７月；遺物トレース，拓本，仮レイアウト。遺構図作成，トレース，仮レイアウト。
調査範囲図及び周辺地形図等作成。

平成15年８月～９月；ドット図作成。遺構及び遺物レイアウト。遺物復元作業

平成15年10月～12月；観察表作成。遺物写真撮影。文章作成。

第３章　遺跡の位置及び環境

第１節　地理的環境

下永迫Ａ遺跡は鹿児島県日置郡伊集院町下谷口字下永迫に所在する。

遺跡の所在する伊集院町は，薩摩半島のほぼ中央部に位置しており，北は郡山町・東市来町，東は鹿児島市，南は松元町・日吉町，西は日吉町・東市来町に接し，その地理的位置から古来より日置郡の中心地として発達してきた。伊集院町の北部には，重平山（523.1m）があり，東市来町及び郡山町との境をなしている。南西部には矢筈岳（302.9m）や諸正岳（301.4m）がある。これらの山地を除くと大部分は，海抜150m前後の火山灰台地，いわゆるシラス台地となっている。河川は神之川とその支流である永松川・下谷口川・野田川が流れ，これらの川の開析によって小規模な谷底平地が形成されている。台地と谷底平地との境は崖地になっているところが多く，小規模な盆地状地形となっている。河川の流域には集落が点在し，平地部の東側は現在伊集院町の行政・商業の中心となっている。下永迫Ａ遺跡は，南西部の台地縁辺部から傾斜して北側に広がる平地部にあたり，南北に延びる小規模な２つの尾根に挟まれた標高約110m前後の谷地に位置する。

第２節　歴史的環境

伊集院町の考古学的調査の歴史は比較的新しく，近年の大型の公共事業に伴う発掘調査が行われる以前は，下谷口の川畑で縄文土器が採集されたり，寺脇の楠牟礼神社などで弥生土器が採集されるというような状況であったが，南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院ＩＣ～市来ＩＣ間）の建設に伴う調査や，九州新幹線鹿児島ルート（新八代～西鹿児島間）の建設に伴う調査が行われたこと等により多数の遺跡が確認され，調査の結果，各時代の遺構・遺物の発見が相次いだ。そこで，周辺遺跡の紹介と併せて主な遺跡を若干紹介したい。

旧石器時代

永迫平遺跡は，標高約150mの台地上に位置し，ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器やナイフ形石器，台形石器などが出土している。また，細石刃文化期の細石刃なども出土している。伊集院町に隣接する鹿児島市や松元町でも近年の公共事業に伴って，旧石器時代の遺跡が多数確認されている。これらの遺跡と同じ台地上に所在する横井竹之山遺跡や瀬戸頭遺跡ではナイフ形石器や台形石器などの遺物や落とし穴などの遺構が見つかっており，旧石器時代の研究に貴重な資料を追加することになった。

縄文時代

稲荷原遺跡は，標高約160mの台地の縁辺部に位置している。早期が中心で，遺物には石鏃・磨製石斧・磨石・石皿などの石器や土器では岩本式土器などが出土しており，なかでも赤色顔料が塗彩された岩本式土器片は注目される。上山路山遺跡は，標高約130mの舌状台地の縁辺部に位置している。遺跡の主体は早期で，遺構では集石遺構が３基検出されている。遺物では岩本式・前平式・吉田式土器などが出土している。永迫平遺跡でも早期を中心とする遺構・遺物が発見されている。遺構では，竪穴住居９基・集石遺構12基・連穴土坑３基・方形土坑95基・道跡３条などが検出

されている。遺物としては，前平式・塞ノ神式土器のほかに，石鏃・打製石斧・磨石・敲石・石皿など多数の遺物が出土している。これらの遺構・遺物の発見は，当該期の集落の様相を解明する上で貴重な資料を提供している。

弥生～古墳時代

これまでの調査対象地域は台地や丘陵地が多いせいか，弥生時代の遺跡は少ない。伊集院町周辺の弥生時代の遺跡としては，東市来町から市来町にかけて位置する市ノ原遺跡がある。遺構では，前期から中期にかけての竪穴住居跡が５基，貝溜まり土坑が１基検出されている。遺物としては入来式・黒髪式・須玖式土器などの土器や，石皿・磨石・磨製石鏃・打製石斧などの石器も数多く出土している。

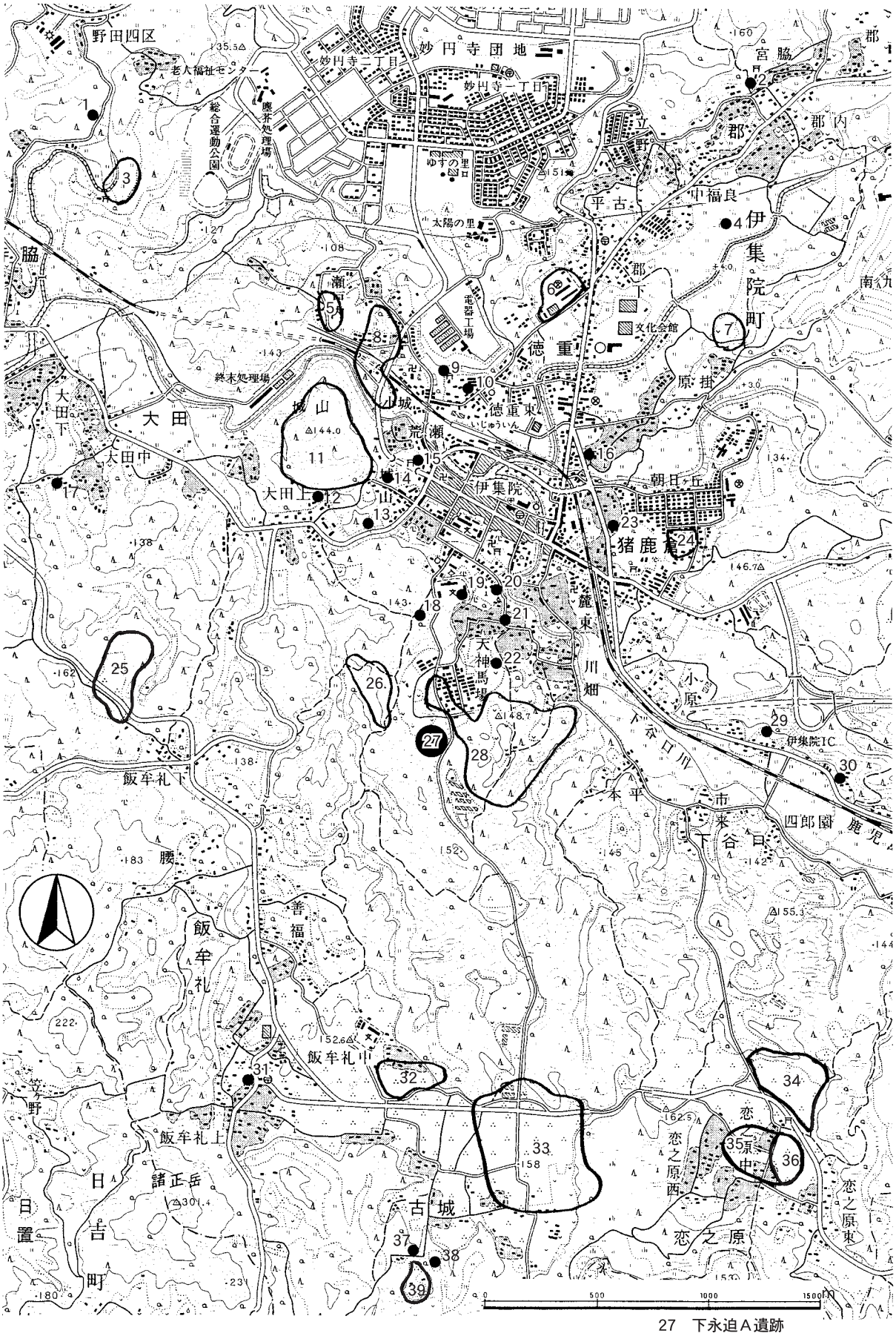
古墳時代を主体とする遺跡も少ない。これまでの発掘調査によって古墳時代の土器である成川式土器が出土する遺跡は数多くあるものの，遺構の検出例は少ない。その中で，伊集院町郡字石坂に所在する石坂遺跡では，竪穴住居跡が検出され，その中央部からほぼ完形に近い成川式土器が出土しており，当該期の様相を解明する上で貴重な資料となっている。

古代～中世

律令体制下の伊集院町は，薩摩国日置郡に属していたと考えられている。郡には地方の有力者から郡司が任命され，地方政治にあたっていた。現在，地名に「郡」という名がつく地は郡衙があったとする説があり，伊集院町でも「郡」という地名が残っており，日置郡衙の候補地になっている。この郡衙は行政の単位であるとともに徴税の単位でもあった。当時の税の一つに「租」があったが，その租を納める施設を郡倉といった。郡倉は重要な施設であったため，豪壮な施設があったと考えられている。そのため倉院，略して院と呼ばれた。伊集院町にもこの倉院が置かれたとされ，地名の由来となっている。古代の遺跡として，伊集院町郡に所在する西原遺跡では，「原」と墨書した土師器埦や「吉」と墨書した内赤土師器埦などが出土している。また，伊集院町郡の山ノ脇遺跡では，土師器埦や黒色土器，須恵器といった遺物が多数出土している。これらの遺跡は，いずれも郡に所在し，伊集院町の古代の様相を解明する上で貴重な資料となっている。

中世の頃になると，この地域は大隅正八幡領と大前氏（12世紀初頭～後半），紀姓伊集院氏（12世紀後半～14世紀半ば），島津荘島津氏，地頭（伊集院）島津氏などが各々土地を所有し，また，所有権をめぐって幾度かの抗争を繰り広げていたようである。その後，15世紀半ばに伊集院島津氏が滅亡すると，以後伊集院は守護職島津氏が支配することとなった。15世紀末になると，守護職島津氏の分家などが各地で勢力を拡大し，守護職島津氏の存在が危ぶまれる状況になっていた。このような状況の中，守護職島津勝久は，伊作家島津忠良の嫡男貴久を養子とし，貴久に守護職を譲り渡した。ここに戦国島津氏が誕生することになる。

島津貴久は，守護職となる前に伊集院城（一宇治城）を居城としている。この伊集院城（一宇治城）は，島津貴久がザビエルと会見した城として有名で，標高約70mのシラス台地の先端部に位置し，周囲約2.3㎞，面積約30万㎡の広大な山城である。当城は，大きく４つの郭群からなり，その下に多くの曲輪が造られ，曲輪間には多数の空堀が掘られていた。中世になると各地で多数の山城が造られるようになったが，伊集院でも伊集院城（一宇治城）のほかにも内城・大内山城・神殿城などの山城が造られ，現在でもわずかながらではあるが城跡の痕跡を残している。


野田四区
老人福祉センター
総合運動公園
廃棄処理場
妙円寺団地
妙円寺二丁目
妙円寺一丁目
宮脇
郡
郡内
立野
ゆすの里口
太陽の里
平古
中福良
4 伊集院町
脇
瀬戸
電器工場
郡下
文化会館
徳重
7
8
9
10
終末処理場
大田下
大田
坂山
△144.0
小城
荒瀬
徳重東
原掛
11
15
16
大田中
17
大田上
12
14
伊集院
朝日ヶ丘
13
23
猪鹿倉
24
146.7△
19
20
18
21
麓東
天神馬場
22
川畑
小原
25
26
27
28
29
伊集院IC
30
飯牟礼下
本平
市来
下谷口
四郎園
鹿児
腰
善福
飯牟礼
飯牟礼中
152.6△
31
32
34
立野
飯牟礼上
諸正岳
△301.4
日置
吉
古城
33
158
恋
35
原中
36
恋之原西
恋之原東
恋之原
37
38
39
町
0
500
1000
1500m
27 下永迫A遺跡

第３図　周辺遺跡位置図

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	円福寺墓地群	伊集院町寺脇甫ノ内	小丘	中世	伊集院忠邦夫婦の墓	
2	九玉神社	伊集院町郡	平地	中・近世	五輪塔	
3	寺脇	伊集院町寺脇楠牟礼	台地（海岸段丘）		貝殻条痕文・弥生土器	
4	後宮田	伊集院町麦生田字後宮田	台地	奈良～平安	土師器片	昭和63年分布調査
5	大内山城跡	伊集院町小城	山地	中世		別称「小城」
6	郡	伊集院町郡	沖積地		石器・壷型土器・坏	
7	黒木田	伊集院町黒木田	台地	奈良～平安	土師器片	Ｈ１発掘調査
8	小城跡	伊集院町徳重字小城	台地	中世	中世城館跡	
9	妙円寺墓地	伊集院町徳重	山地	中・近世	五輪塔・宝塔外	
10	石谷高久の墓	伊集院町徳重	平地	中世		(町)昭和40.10.12
11	一宇治城跡	伊集院町大田	丘陵	鎌倉初期		伊集院郡司紀四朗時清がここに館を構えたのが始まり
12	大知跡	伊集院町大田上	台地	中・近世	五輪塔・無縫塔	
13	雪窓院跡	伊集院町城山	山腹		五輪塔・無縫塔	
14	本田兄弟の墓	伊集院町荒瀬	平地	近世		(町)昭和46.7.21
15	円通墓地	伊集院町城山	平地	中・近世	五輪塔・宝塔外	
16	荘厳寺墓地	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・石地蔵	
17	報恩寺跡	伊集院町大田中	平地	中・近世	五輪塔・宝塔外	
18	未穏寺跡	伊集院町天神馬場	山腹	中・近世	無縫塔	
19	竜泉寺跡	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	五輪塔・宝塔外	
20	有馬新七の墓	伊集院町天神馬場	平地	近世		(町)昭和40.10.1
21	下谷口	伊集院町下谷口	平地	中・近世	五輪塔	
22	長寺庵跡	伊集院町天神馬場	平地	中・近世	五輪塔外	
23	薬師堂跡	伊集院町猪鹿倉	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
24	猪鹿倉	伊集院町猪鹿倉	平地		磨製石斧（大・小石斧）	昭和58年５月発掘調査
25	上山路山	伊集院町大田	台地	縄文早期		Ｈ９発掘調査
26	柳原	伊集院町下谷口柳原	傾斜地	古代～近代	土坑・溝・土師器・須恵器	西回り自動車道分布調査
27	下永迫Ａ	伊集院町下谷口下永迫	谷地	古代～中世	土師器	Ｈ10発掘調査・本報告
28	永迫平	伊集院町下谷口永迫平	台地	縄文早期	住居跡，石器，土器片	Ｈ８～10発掘調査
29	破鞋墓地	伊集院町向江	平地	中・近世	五輪塔・宝塔外	
30	梅岳寺墓地	伊集院町四朗園	台地	中・近世	五輪塔・宝塔外	
31	熊野神社境内	伊集院町飯牟礼	平地	中・近世	五輪塔・宝塔	
32	中島堀	伊集院町飯牟礼	台地		土器片・土師器	
33	七反畠	伊集院町古城	台地	古墳		Ｈ10分布調査
34	上稲荷原	伊集院町恋之原上稲荷原	台地	古墳，古代		Ｈ７分布調査
35	稲荷原	伊集院町恋之原稲荷原	台地	縄文早期	石器・土器片	Ｈ８発掘調査
36	恋之原	伊集院町恋之原	台地		壷形土器	
37	大山神社境内	伊集院町古城	台地		五輪塔	
38	松尾城の麓	伊集院町古城	台地	中・近世	五輪塔・相輪	
39	内城跡	伊集院町古城	山地	弘安年間		別称「平城」

第４章　調査の概要

第１節　調査の方法

〈平成９年度〉確認調査

平成９年10月７日（火）から平成９年10月14日（火）にかけて，発掘対象区域内のほぼ中央部の東西方向に長さ37m×幅２mの第１トレンチと，東側に長さ２m×幅１mの第２トレンチを設定し，確認調査を行った。その結果，Ⅱ層及びⅢａ層から古代から中世にかけての遺物が出土したほか，第１トレンチ・第２トレンチともに遺物包含層の残存状況が比較的良好であったため，本調査を実施することとなった。なお，表土の厚さが２m程度もあり，もろくて崩壊する危険性があったため，Ⅲａ層途中以下の調査については，本調査時に調査することとなった。

〈平成10年度〉本調査

平成９年度に行われた確認調査の成果より，平成10年５月６日（水）から平成10年７月３日（木）にかけて本調査を行った。下永迫Ａ遺跡は東側の台地上から傾斜地にある柳原遺跡に隣接しており，柳原遺跡で設定した区画を下永迫Ａ遺跡のある西側へ延長し，10m毎に南北方向に北側からＧ～Ｎ区，東西方向に西側から20～25区を設定し，10m毎のグリットとして区画して調査を行った。

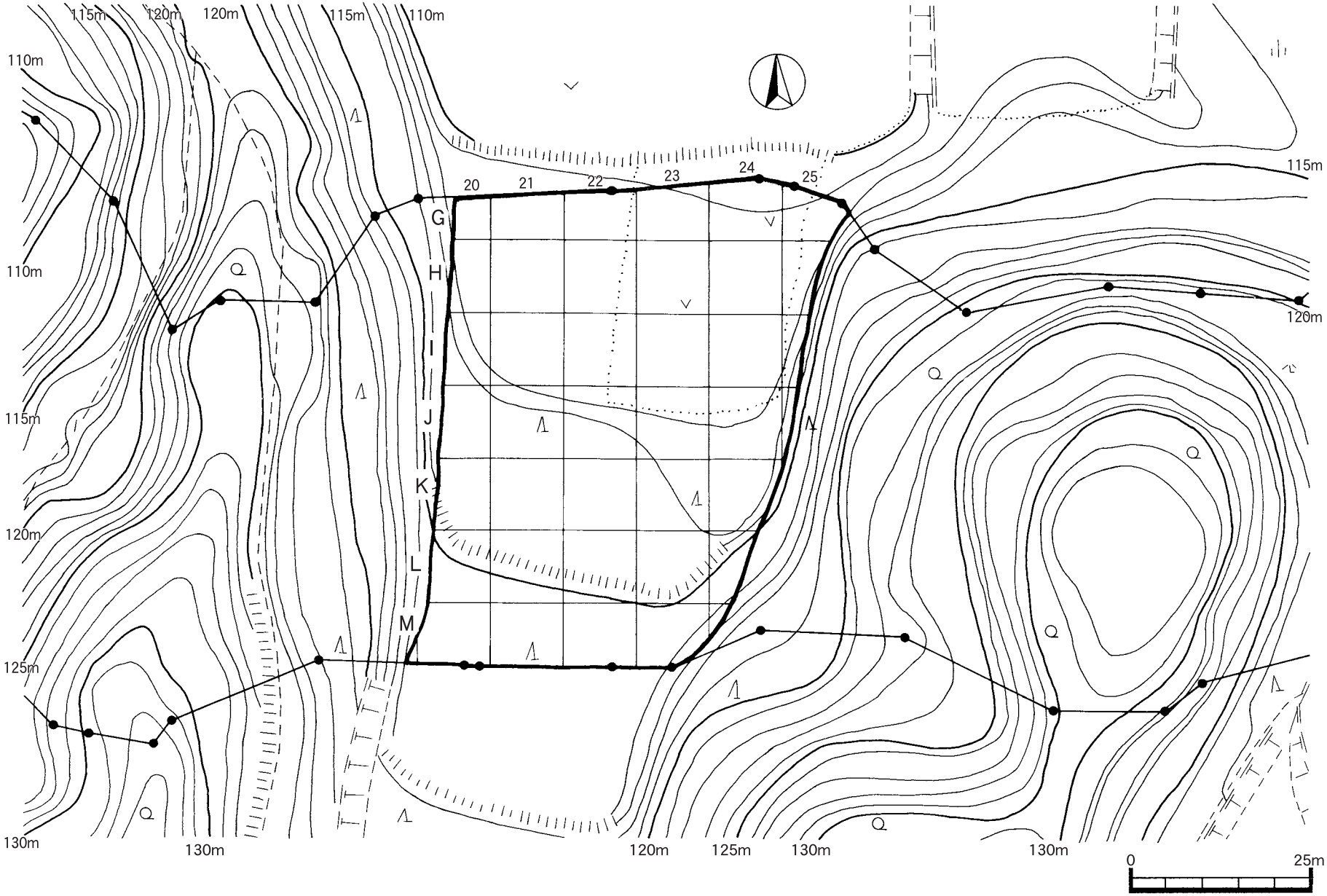
調査は，排土処理の都合上，調査区域を南北に３つに分け，Ｇ～Ｉ－20～25区・Ｋ～Ｍ－20～25区・Ｉ～Ｋ－20～25区という順序で調査を進めた。表土を重機を用いて除去した後，包含層であるⅡ層から山鍬などにより掘り下げを行った。Ⅲａ層上面で精査を行い，遺構の有無を確認した。その結果，集石や土坑が確認されたため，集石については平面及び見通し断面の実測を行い，一つ一つの石について火熱の状況や石材についての観察を行い記録した。土坑については，埋土の色調などを確かめながら掘り下げを行い，平面及び断面の実測を行った。その後，遺物の包含層であるⅢａ層の掘り下げを行いつつ，平成９年度の確認調査時にⅢａ層途中以下から下層が未調査であったため，合計４本の下層確認トレンチを設定し，掘り下げを行った。

Ｇ～Ｊ－20区については，表土を除去したところすぐにⅧ層（シラス）となっており，遺物や遺構も検出されなかったため，この区については調査終了となった。

Ⅱ層及びⅢａ層から出土した遺物については，平板により実測を行うとともに，レベルを記録して取り上げを行った。

下層確認トレンチでは，Ⅲａ層の下位より縄文時代後期の遺物が若干出土したものの，そのほかの遺物や遺構は検出されなかった。また，Ⅲａ層よりさらに下層についても掘り下げを行い調査を進めたが，遺構・遺物ともに見つからなかったため，調査終了となった。

第４図　下永迫Ａ遺跡調査範囲図



第５図　下永迫Ａ遺跡グリッド図

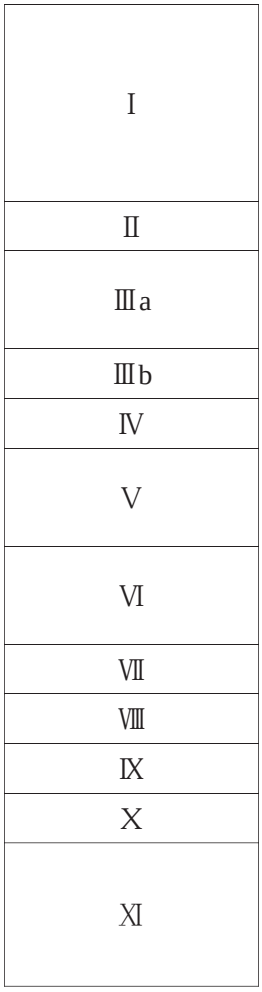
第２節　地形及び層位

１　地形（第７図）

下永迫Ａ遺跡の地形は，南西に延びる台地から北側に広がる平地との境に当たり，南北方向に延びる小規模な２つの尾根に挟まれた谷地である。そのため，遺跡のある部分はほぼ平らではあるが，全体的に北側に緩やかに傾斜している。本遺跡の中央部東西方向に段差があり，南側が高く，北側が一段低くなっている。過去に造成がなされ，耕作地として利用されていた可能性が考えられるが，現状は南側は林，北側は荒れ地となっている。地形についてさらに詳しく見ると，第７図はⅢa層上面での10㎝間隔のコンター図であるが，南側の台地及び東西の尾根部に近いほど傾斜が激しく，北側の平地に向かうに従い傾斜が緩やかになっている。つまり，本遺跡がある谷地に向かって三方向から傾斜し，北側の平地に向かって次第に下っていくという地形である。

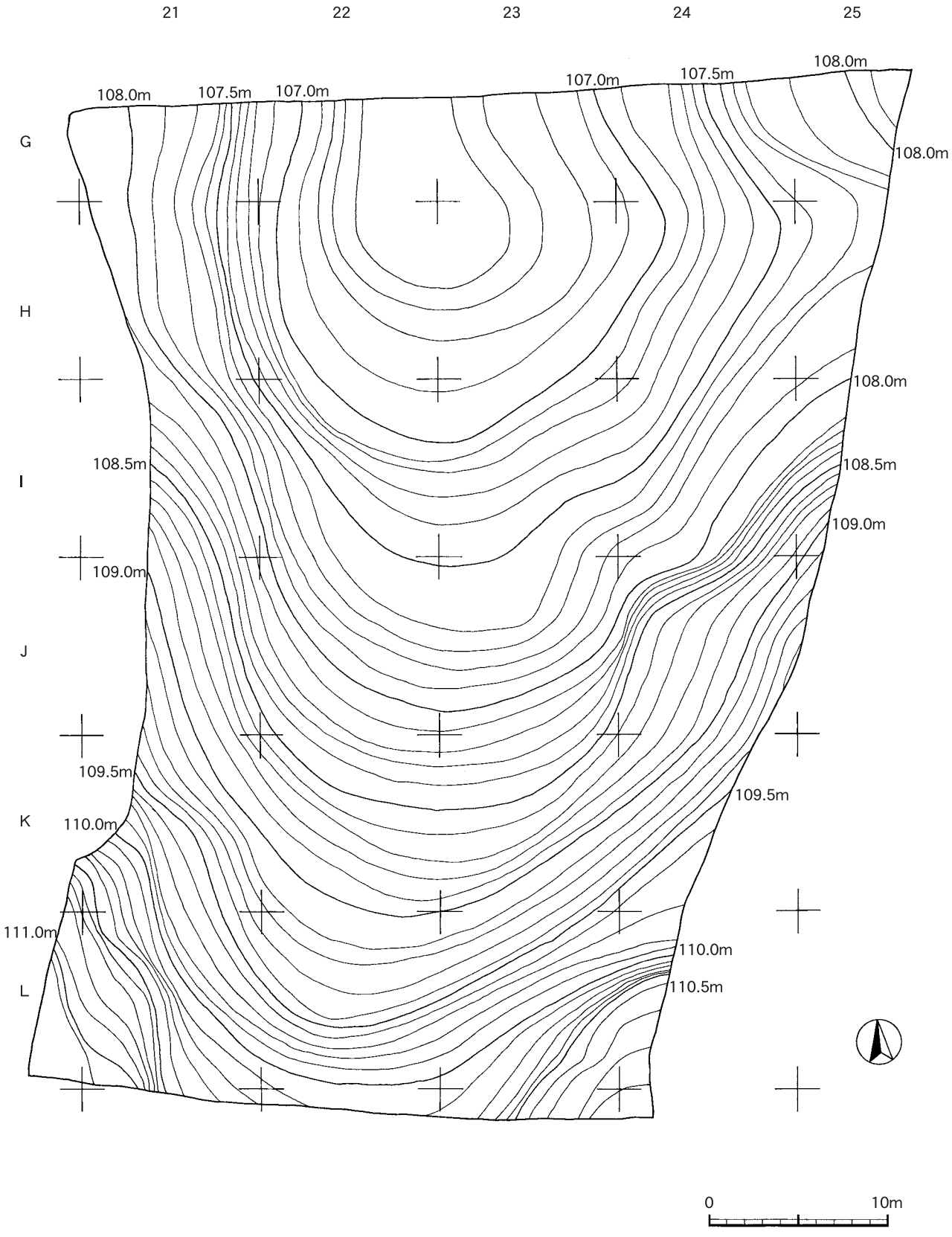
２　層位（第６・８・９図）

下永迫Ａ遺跡の層序は，概ね以下の通りである。Ⅰ層からⅪ層までに分層できる。各層とも中央部及び北側へ行くほど残存状況が良いが，東西の尾根部に向かうに従い薄くなるか，または層によってはほとんど残存していない状況である。これは，東西及び南の三方向から流れ込みによってこのような堆積状況になったものと考えられる。

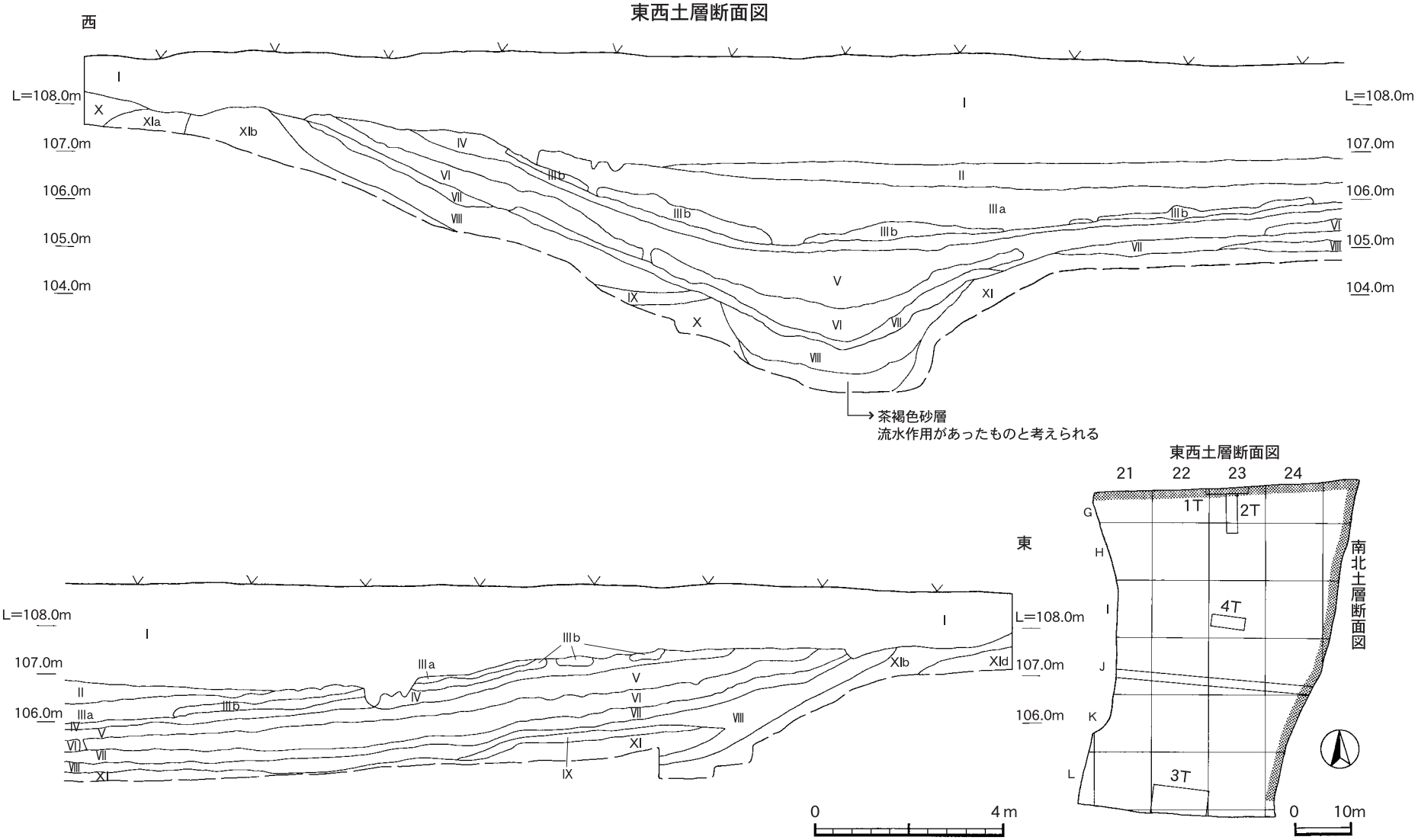


Ⅰ　層	茶褐色土	表土・耕作土。白い軽石を含む。中央部では２mほどの厚さにもなる。
Ⅱ　層	黒色土	古代～中世の包含層
Ⅲa 層	黄褐色土	黄橙色火山灰（アカホヤ）が多少混入している。古墳～古代・縄文時代後期の包含層
Ⅲb 層	黄橙色火山灰土	鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰。部分的に残存している。中央部ほど残りがよい。
Ⅳ　層	暗黄褐色土	パミスを若干含む。
Ⅴ　層	黒褐色土	パミス細粒を多く含む。
Ⅵ　層	黄色火山灰土	桜島起源の薩摩火山灰
Ⅶ　層	茶褐色粘質土	いわゆるチョコ層
Ⅷ　層	明茶褐色粘質土	
Ⅸ　層	褐色弱粘質土	
Ⅹ　層	褐色土	シラス風化土。黄色パミスを含む。
Ⅺ　層	シラス	入戸火砕流起源の火山灰土 ａ：黄色軽石を含む乳白色シラス ｂ：黄色軽石を含む褐色シラス ｃ：淡褐色シラス ｄ：白色軽石を含む白色シラス

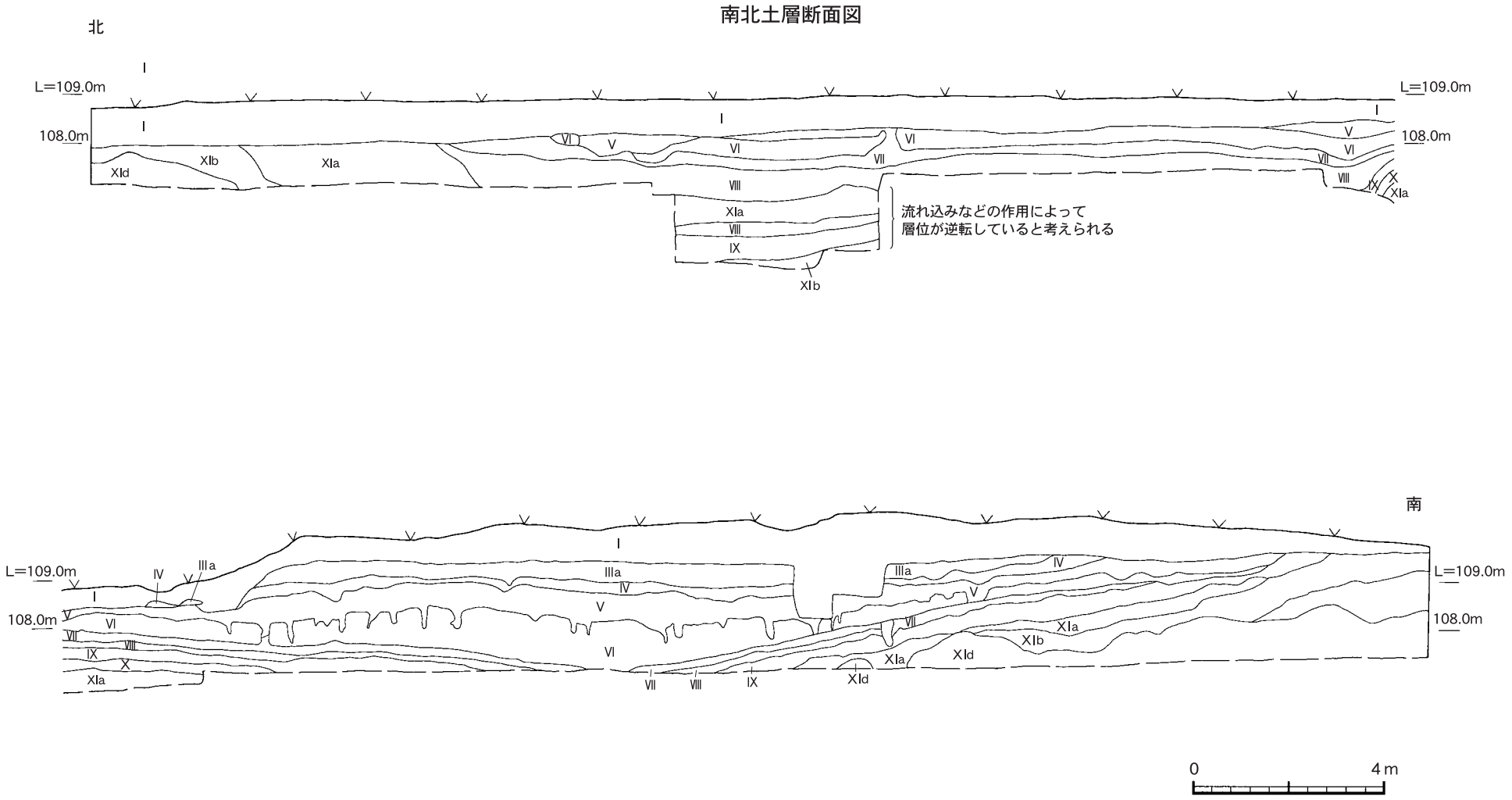
第６図　土層柱状図



第７図　Ⅲa層上面コンター図


東西土層断面図
西
東
L=108.0m
107.0m
106.0m
105.0m
104.0m
茶褐色砂層
流水作用があったものと考えられる
東西土層断面図
南北土層断面図
21
22
23
24
G
H
I
J
K
L
1T
2T
3T
4T
0
4m
0
10m

第８図　土層断面図Ⅰ


南北土層断面図
北
L=109.0m
108.0m
I
V
VI
VII
VIII
IX
X
XIa
XIb
XId
流れ込みなどの作用によって
層位が逆転していると考えられる
南
IIIa
IV
0
4 m

第９図　土層断面図Ⅱ

第３節　縄文時代の調査

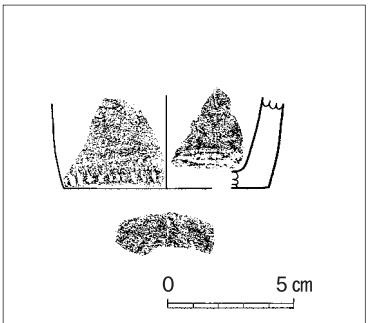
下永迫Ａ遺跡からは，縄文時代の遺構は検出されなかったが，縄文時代早期及び後期～晩期にかけての遺物が出土した。量的に最も多かったのは後期の遺物である。これらの遺物は南側中央部に集中し，Ⅱ層からⅢa層にかけて出土したものであるが，層位的あるいはレベル的にもばらつきがあり，周辺の台地からの流れ込みも考えられる。そのため，当遺跡以外にも周辺に縄文時代の遺跡が存在することが推定される。

１　土器（第10・12・13図）

縄文時代の土器は，Ⅱ層・Ⅲa層から出土した。縄文時代早期・後期・晩期の土器とみられ，土器の特徴により21点図示した。

⑴　早期の土器（１）

早期の土器は１点のみであった。１は平底の底部付近である。内外面ともナデ調整を施し，底部端部にはヘラ状施文具で縦位に刻み目を施している。底部は丁寧なナデが施され，光沢を帯びている。これらの特徴から吉田式土器の底部と考えられる。



第10図　縄文時代の土器Ⅰ

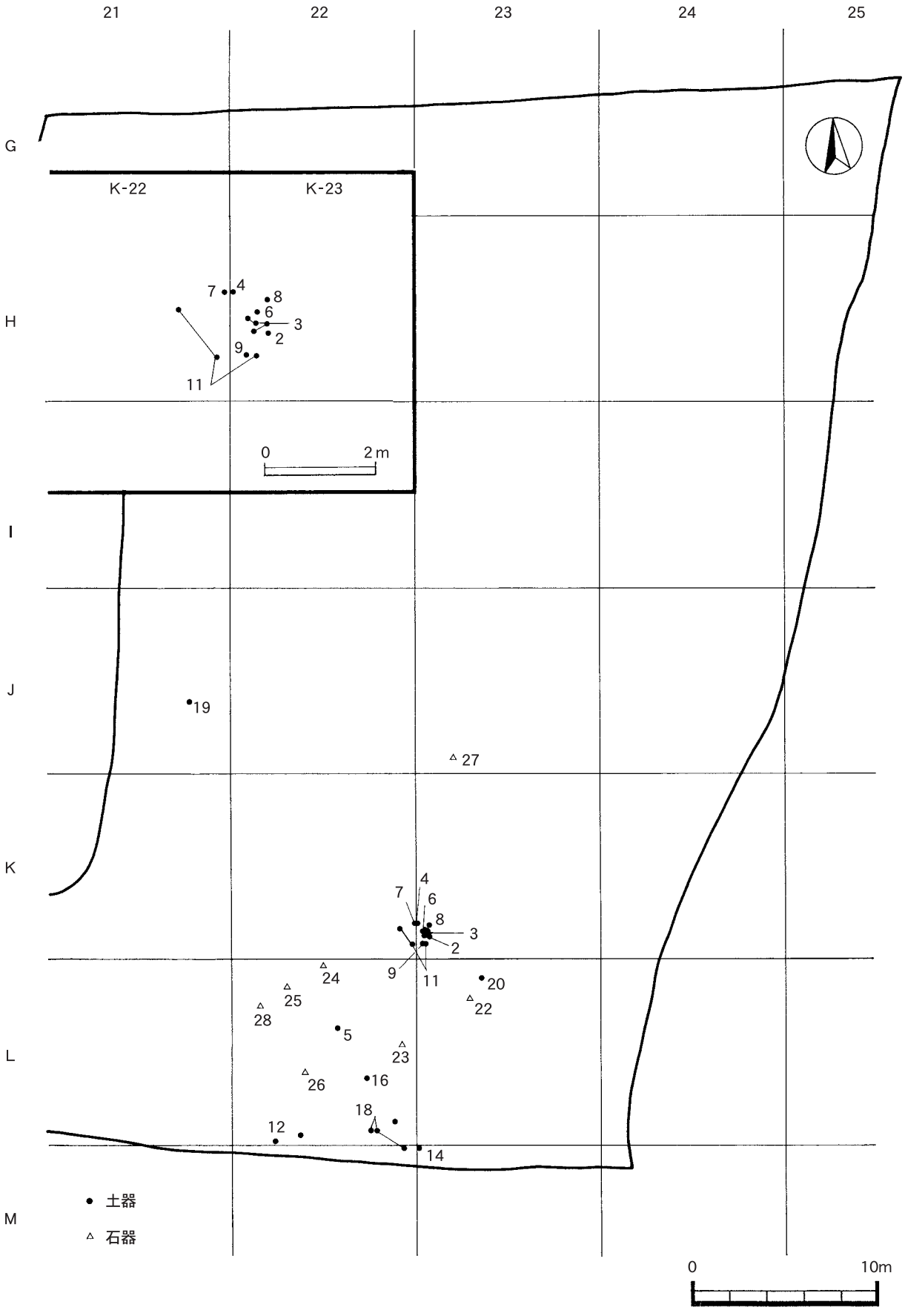
⑵　後期の土器（２～20）

２～11は指宿式土器と推定されるものである。２は胴部が膨らみ，口縁部が内湾する深鉢形の土器で，横位に１本の沈線を口縁部に巡らし，その下に２本の波状の沈線を巡らしている。３は口縁部が外反する深鉢形の土器で，内外面とも荒い条痕による調整を行っている。横位に１本の沈線を口縁部に巡らし，その下に２本平行で階段状の沈線を巡らしている。４は２本平行の沈線を巡らした口縁部である。５～８は胴部が膨らみ口縁部が内湾する深鉢形の土器の口縁部及び胴部である。いずれの土器も内外面ともナデ調整を施し，靴形状の沈線を施している。９は口縁部が外反する深鉢形の土器である。口唇部外面に巻貝の腹部による押圧文が施されている。頸部から胴部にかけては，４本の横走する沈線を巡らし，その間に縦位に沈線を結んでいくものであり，10も同形式のものと推定される。11は胴部が膨らみ，口縁部にかけて直行する深鉢形の土器である。口唇部に突起状の粘土紐が施され，山形口縁を呈している。外面はヘラ状工具でナデ調整が施された後，丁寧にミガキがかけられており，内面は丁寧なナデによる調整が施されている。

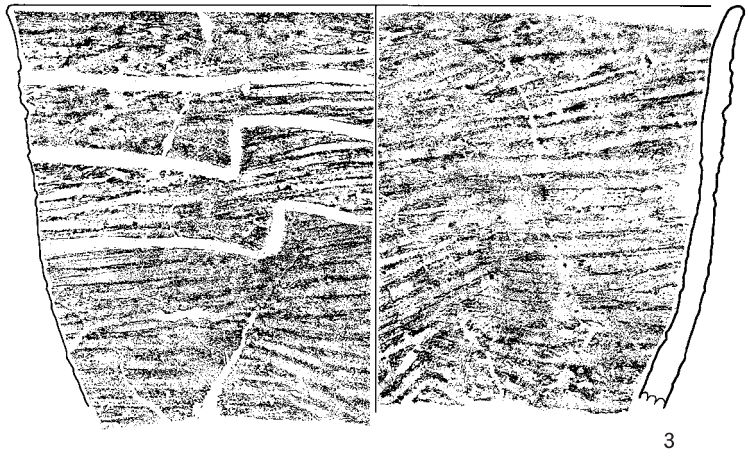
12はバケツ状の深鉢形土器と推定される。口唇部及び口縁部の内面に沈線を施している。

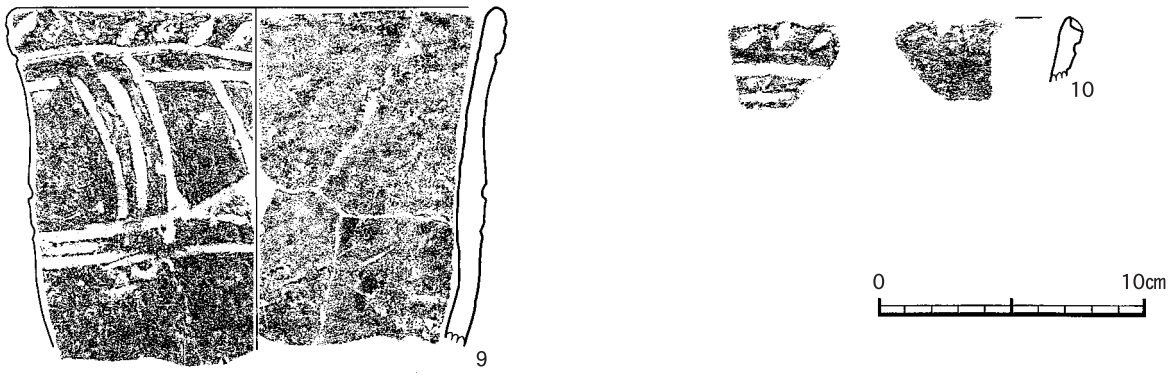
13～17は口縁部が大きく外反し，口縁部の先端に若干平坦面を作り，そこを文様帯としている土器である。13は松山式土器と推定されるものである。口縁部に２本の沈線を施し，その間に貝殻腹縁部による刺突文を施している。14・15は市来式土器と推定されるものである。口縁部内外面とも貝殻条痕による調整を施している。15は口縁部に縦位及び横位の爪形文を施している。16は草野式土器と推定されるものである。口縁部に斜位の爪形文を施している。17は西平式土器と推定されるものである。口唇部に１本の沈線を巡らしている。

18は深鉢形土器の胴部と推定される。外面は荒い条痕により調整を行った後，指ナデにより条痕を消している。内面はヘラ状工具によるナデ調整が施されている。

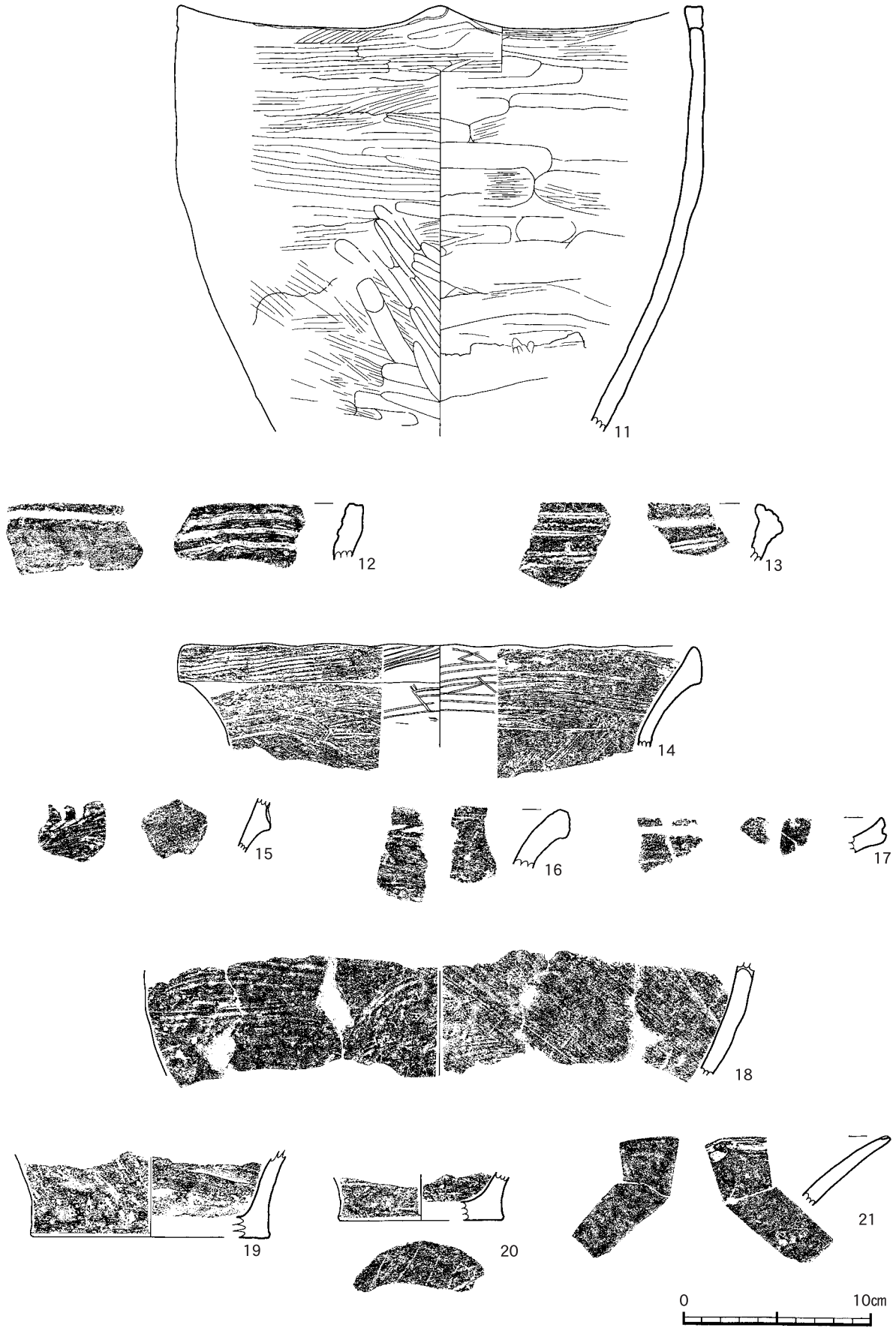


第11図　遺物出土状況（縄文土器・石器）





第12図　縄文時代の土器Ⅱ



第13図　縄文時代の土器Ⅲ

19・20は平底の底部である。19は内外面ともヘラ状工具によるナデ調整が施されている。底部は無文である。20は内外面ともナデ調整が施されている。底部外面には葉脈状の圧痕が見られ，木の葉底と考えられる。

⑶　晩期の土器（21）

晩期の土器は１点のみであった。21は精製浅鉢の胴部である。内外面とも丁寧に研磨されており，外面は黒く光沢を帯びている。

２　石器（第14・15図）

石器は，Ⅲa層から石鏃・スクレイパー・磨石が出土した。石材については，黒曜石，頁岩，玉髄，安山岩などがみられた。これらの石器は土器と同じく遺跡の南側に集中しており，Ｌ－22区に最も集中している。

⑴　石鏃（22～29）

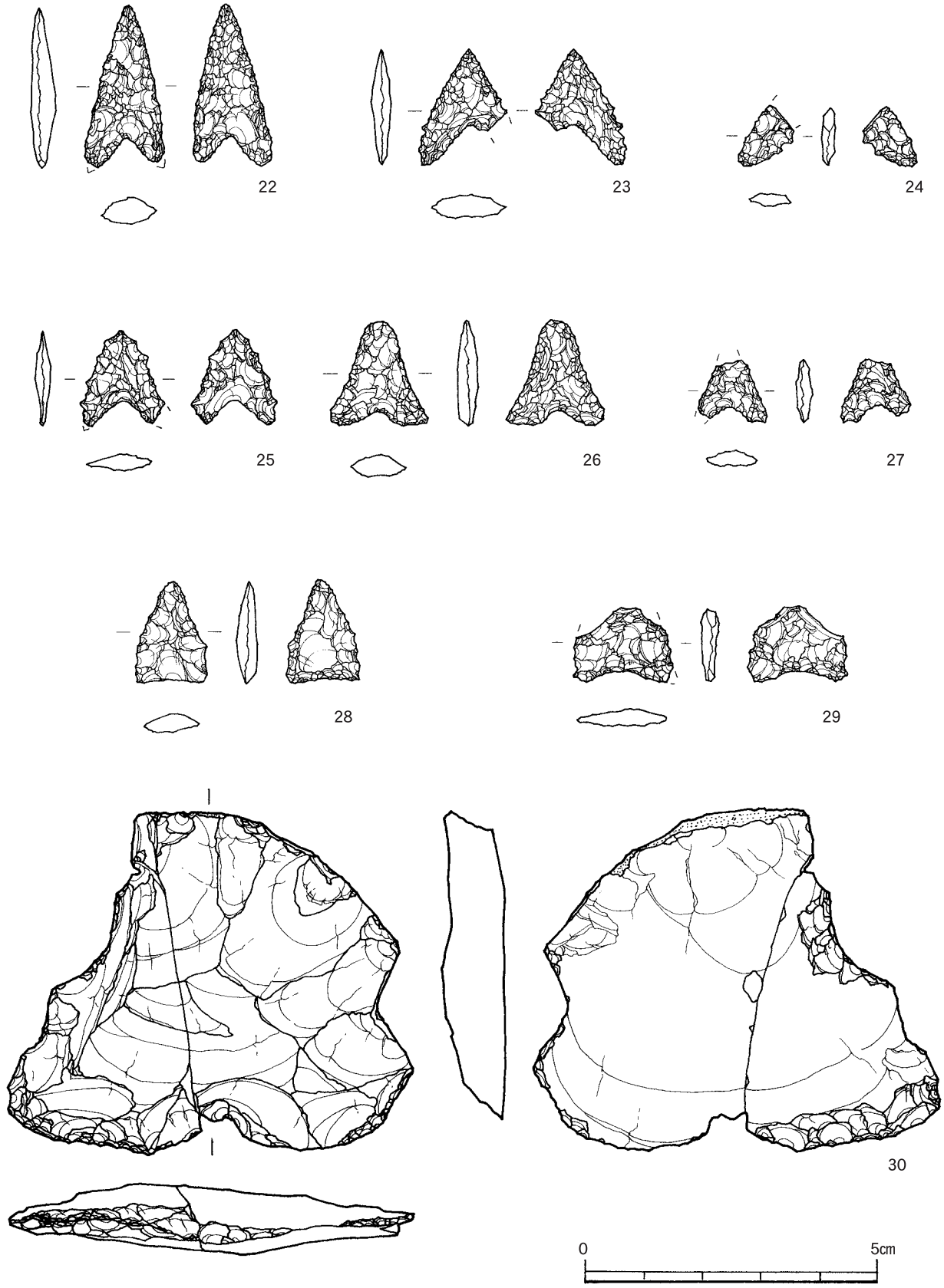
22～29は石鏃である。22～25は基部の抉りが深く，脚部が長いものである。22は大型の二等辺三角形鏃である。石材は長崎県針尾島産の黒曜石に類似する。23は三角形鏃である。片脚部は欠損している。先端部が鋭く，側辺部は鋸歯状を呈する。石材はハリ質安山岩である。24は石鏃の脚部と推定される。石材は不透明で艶がなく，不純物をほとんど含まない黒曜石である。25は側辺部が若干外湾し，鋸歯状を呈するものである。脚部先端は欠損しており，その形態は不明である。石材はハリ質安山岩である。26・27は基部の抉りが浅く，脚部が短いものである。26は先端部が円く，側辺部が内湾するものである。脚部の形態は左右で異なる。石材は玉髄に類似する。27は小型の三角形鏃と推定される。先端部や片脚の先端が欠損している。石材は上牛鼻産の黒曜石に類似する。28は基部が平基式のもので，五角形鏃である。先端部は鈍く，側辺部には鋸歯が若干みられる。石材は頁岩である。29は基部の抉りが浅い五角形鏃と推定されるものであるが，欠損している部分が多く，別の器種の可能性もある。石材は佐賀県腰岳産の黒曜石に類似する。

⑵　スクレイパー（30）

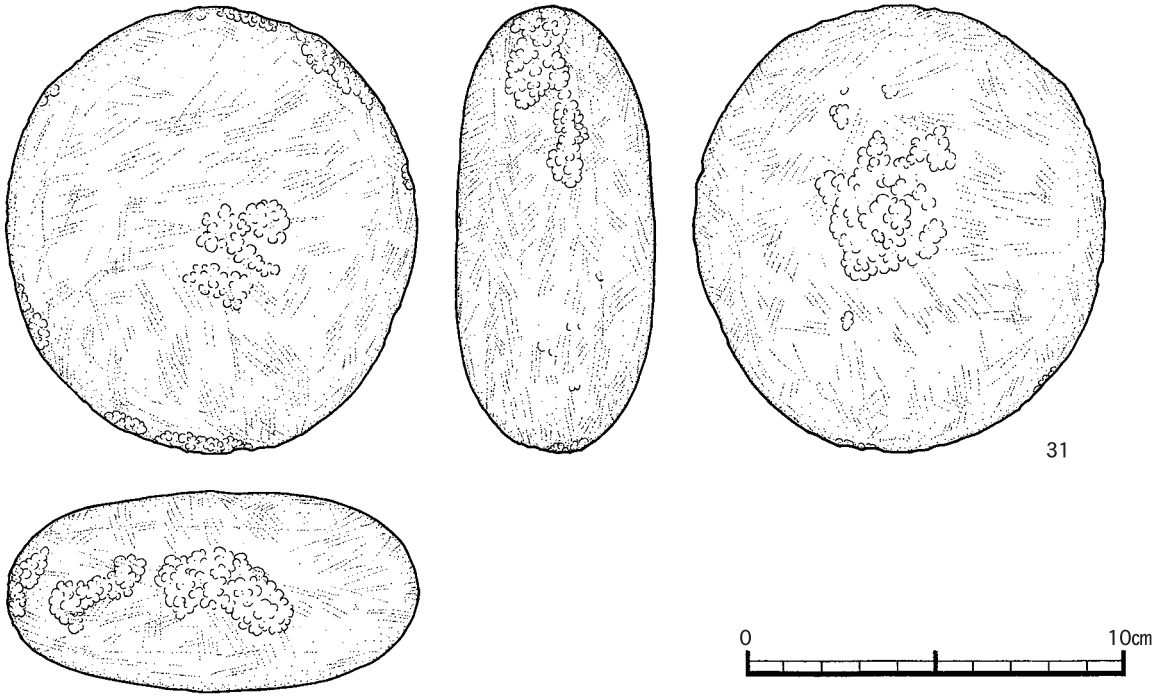
スクレイパーは30の１点のみであった。30は自然の剥片を利用し，下部に刃部を作り出したものである。石材は頁岩である。

⑶　磨石（31）

磨石は31の１点のみであった。円礫の広い面を磨石として使用している。また側面及び広い面のほぼ中央部に敲打痕があることから，敲石または凹石としても使用されたものと考えられる。石材は輝石を多く含んだ輝石安山岩である。



第14図　縄文時代の石器Ⅰ



第15図　縄文時代の石器Ⅱ

第３表　縄文土器観察表

番号	区	層	標高(m)	注記番号	部　位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎　　土	備考	挿図
1	—	Ⅱ	—	—	底部	良好	黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	角閃石・石英	吉田式	11
2	K23	Ⅲa	108.720	245	口縁部	良好	黄褐色	赤褐色	沈線	ナデ	角閃石・石英	指宿式	12
3	K23	Ⅲa	108.685	246他	口縁部～胴部	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	沈線	条痕	石英・長石	指宿式	12
4	K23	Ⅲa	108.480	255	口縁部	良好	暗赤褐色	黒褐色	沈線・ナデ	ナデ	角閃石・石英	指宿式	12
5	L22	Ⅱ	109.170	99	口縁部	良好	淡赤褐色	淡褐色	沈線・ナデ	ナデ	長石・石英・角閃石	指宿式	12
6	K23	Ⅲa	108.560	264	胴部	良好	灰黄褐色	暗灰黄色	条痕・ナデ	ナデ	角閃石・石英	指宿式	12
7	K23	Ⅲa	108.700	225	胴部	良好	橙色	暗灰黄色	沈線・ナデ	ナデ	長石	指宿式	12
8	K23	Ⅲa	108.745	254	胴部	良好	橙色	黄橙色	沈線・ナデ	ナデ	輝石・石英	指宿式	12
9	K23	Ⅲa	108.720	243	口縁部～胴部	良好	赤褐色	明褐色	押圧・沈線	ナデ	角閃石・長石	指宿式	12
10	L22	Ⅲa	—	—	口縁部	普通	暗褐色	灰黄褐色	押圧・沈線	ナデ	角閃石・石英	指宿式	12
11	K22	Ⅲa	108.615	256他	口縁部～胴部	良好	明褐色	明褐色	ナデ・ミガキ	ナデ	角閃石・石英	指宿式	13
12	L22	Ⅲa	109.755	118	口縁部	良好	明黄褐色	橙色	沈線・ナデ	ナデ	石英		13
13	K22	Ⅲa	—	—	口縁部	良好	淡橙色	橙色	沈線・貝刺突	貝条痕	長石	松山式	13
14	M23	Ⅲa	109.875	277	口縁部	良好	淡橙色	淡褐色	貝条痕	貝条痕	角閃石・石英	市来式	13
15	I22	Ⅲa	—	—	口縁部	良好	明褐色	明赤褐色	爪形・ナデ	ナデ	角閃石・石英	市来式	13
16	L22	Ⅱ	109.647	141	口縁部	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	爪形・ナデ	ナデ	角閃石・石英	草野式	13
17	K22	Ⅲa	—	—	口縁部	普通	赤褐色	黒褐色	沈線・ナデ	ナデ	石英・輝石	西平式	13
18	L22	Ⅲa	109.625	158他	胴部	良好	明赤褐色	明赤褐色	条痕・ナデ	ナデ	石英・長石		13
19	J21	Ⅲa	108.460	482	底部	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	角閃石・石英		13
20	L23	Ⅲa	109.255	275	底部	良好	橙色	橙色	ナデ	ナデ	角閃石・長石		13
21	J22	Ⅲa	—	—	胴部	良好	黒褐色	黄橙色	ミガキ	ミガキ	長石		13

第４表　縄文石器観察表

番号	区	層	標高(m)	注記番号	器　種	石　　材	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考	挿図
22	L23	Ⅲa	109.375	276	石鏃	黒曜石（針尾？）	2.60	1.35	0.45	1.06		14
23	L22	Ⅲa	109.280	241	石鏃	ハリ質安山岩	2.00	1.50	0.35	0.60	鋸歯	14
24	L22	Ⅲa	108.872	260	石鏃	黒曜石	1.00	0.90	0.25	0.16	脚部	14
25	L22	Ⅲa	109.100	235	石鏃	ハリ質安山岩	1.60	1.45	0.30	0.41	鋸歯	14
26	L22	Ⅱ	109.905	89	石鏃	玉髄	1.80	1.70	0.35	0.80		14
27	J23	Ⅱ	108.332	314	石鏃	黒曜石（上牛鼻？）	1.10	1.20	0.30	0.26	先端部欠損	14
28	L22	Ⅱ	109.420	101	石鏃	頁岩	1.75	1.25	0.35	0.74		14
29	—	Ⅱ	—	—	石鏃	黒曜石（腰岳？）	1.25	1.70	0.30	0.54		14
30	I･L22	Ⅲa	—	—	スクレイパー	頁岩	5.90	6.90	1.15	39.88		14
31	H22	Ⅲa	—	—	磨石	安山岩	11.85	10.90	5.25	1090.00		15

第４節　古墳時代の調査

遺構は検出されなかったが，多数の土器が出土した。器種は甕形土器・壺形土器・高坏形土器がある。いずれも在地性の強い成川式土器であるとみられる。以下，出土した土器について概略を述べていきたい。

１　甕形土器（第16・17図）

甕形土器は完全に復元できたものがないため，各部位ごとに分類した。

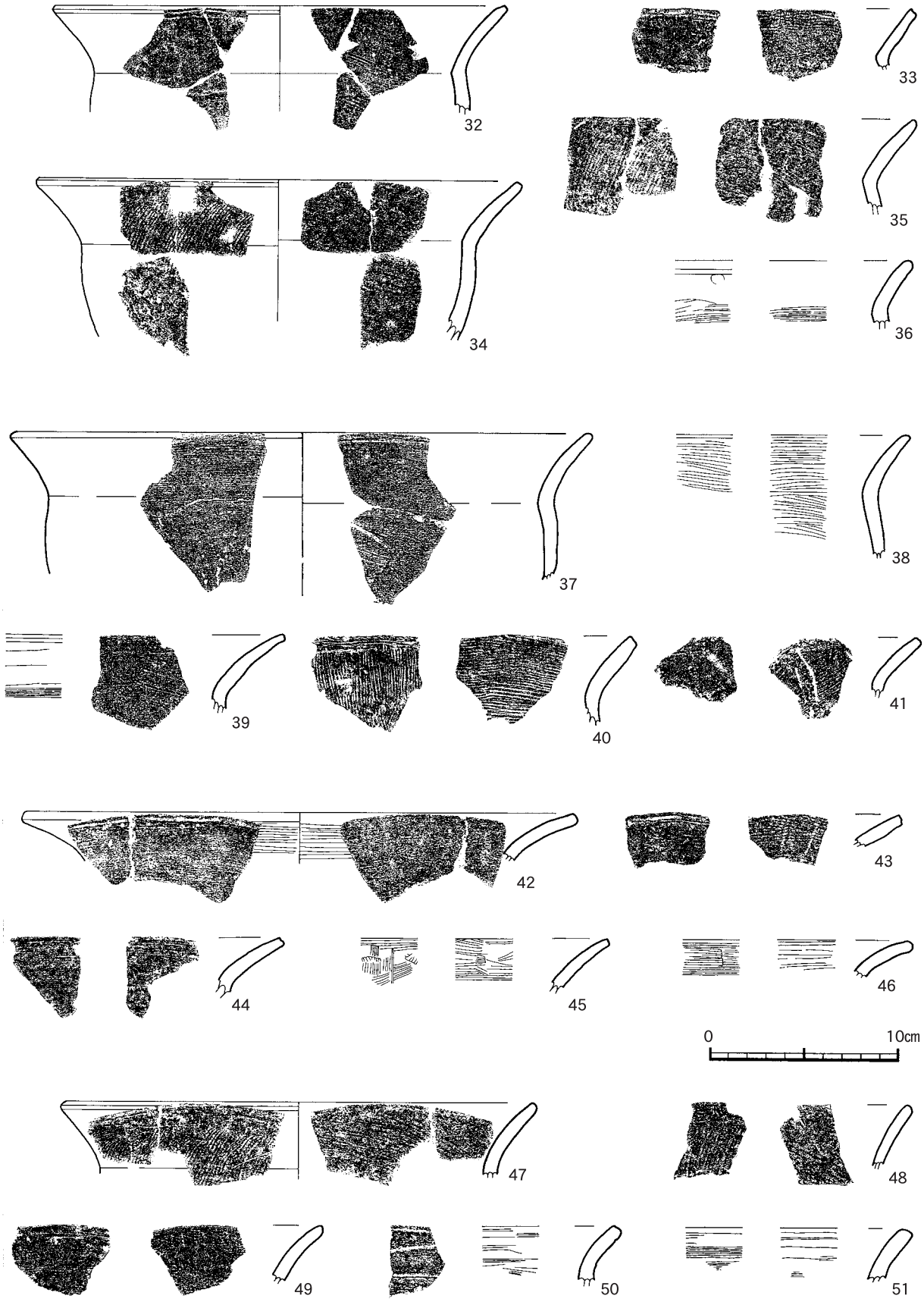
⑴　口縁部（32～51）

口縁部は，開き方や頸部・胴部にかけての形態により４種類に分けることができる。

32～36は口縁部が外反し，頸部にかけてしっかりと屈曲し，頸部内面にはっきりとした稜線がみられ，胴部の上部で膨らむものである。32は口縁部から頸部にかけて内外面とも横位のナデ調整が施され，頸部から胴部にかけては外面は縦位のハケ目，内面は横位のハケ目が残る。33は外面は横位のナデ調整が施され，内面は横位のハケ目が残る。口唇端部は工具により凹面を作り出している。34～36は口唇端部が丸まっているものである。34は頸部から胴部の上部にかけて若干膨らむものの，底部にかけて大きくすぼまっていくものと推定される。そのため深さが浅いものと推定される。外面は頸部から口縁部にかけて縦位のハケ目の掻き上げがみられ，胴部は幅約１㎝程度のヘラ状工具で縦位にケズリが施されている。内面は横位のハケ目が残る。35も同様に外面は縦位のハケ目，内面は横位のハケ目による調整が施されている。36は摩滅が激しく調整痕がほとんど残っておらず，頸部のナデ調整が僅かに残るのみである。

37～41は口縁部は外反するものの，頸部での屈曲は緩やかで内面の稜線もはっきりとしないものである。37・38は口唇端部が丸みを帯びているものである。ともに頸部から胴部の上部にかけて膨らみをもつものである。37は口縁部から頸部にかけて横位のナデ調整が施され，胴部はヘラ状工具により縦位にケズリが施された後，ナデ調整が施されている。内面は口縁部から頸部にかけて横位のナデ調整が施され，胴部はハケ目が残る。38は内外面ともにナデ調整が施されている。39～41は口唇端部が平らになっているものである。39は内外面とも横位のナデ調整が施されている。40は他のものと比較して器壁が厚く，焼成も良好である。また，口唇端部も工具により丁寧に平坦面を作り出している。調整は内外面ともハケ目が残るが，外面は縦位，内面は横位の調整である。41は摩滅が激しく，外面の調整痕はほとんど残っていないが，内面はハケ目が確認できる。他のものと比較して，口縁部の長さが若干短い。

42～46は口縁部が大きく外反するものである。口縁部しか残っていないため，頸部・胴部の形態は不明である。口縁部の形態より，上記のものより若干時代が古くなるものと推定される。42～45は口唇端部が平らになっているものである。42と44は内外面とも横位のナデ調整が施されており，焼成がとても良好である。43は口唇端部に工具で凹面を作り出している部分がみられる。外面はナデ調整，内面は横位のハケ目が残る。45・46はともに摩滅が激しく，ほとんど調整痕が残っていなかったが，ハケで調整した後，ナデ調整による仕上げを施しているようである。46の口唇端部は丸みを帯びている。



第16図　古墳時代の土器Ⅰ

47～51は口縁部が僅かに外反するものである。47～49は口唇端部が丸まっているものである。47と48は同じ調整が施されている。外面は縦位のハケ目の掻き上げがみられ，内面は横位のハケ目が残る。48は他のものと比較して外反が最も弱く，口縁部は直立気味となる。49は内外面とも横位のナデ調整が施されている。50・51は口唇端部が平らになるもので，他のものと比較して器壁が厚く，口縁部が短いものである。内外面とも横位のナデ調整が施されている。

⑵　胴部（52～65）

胴部は，頸部から胴部にかけての形態や突帯などの文様により，３種類に分けることができる。

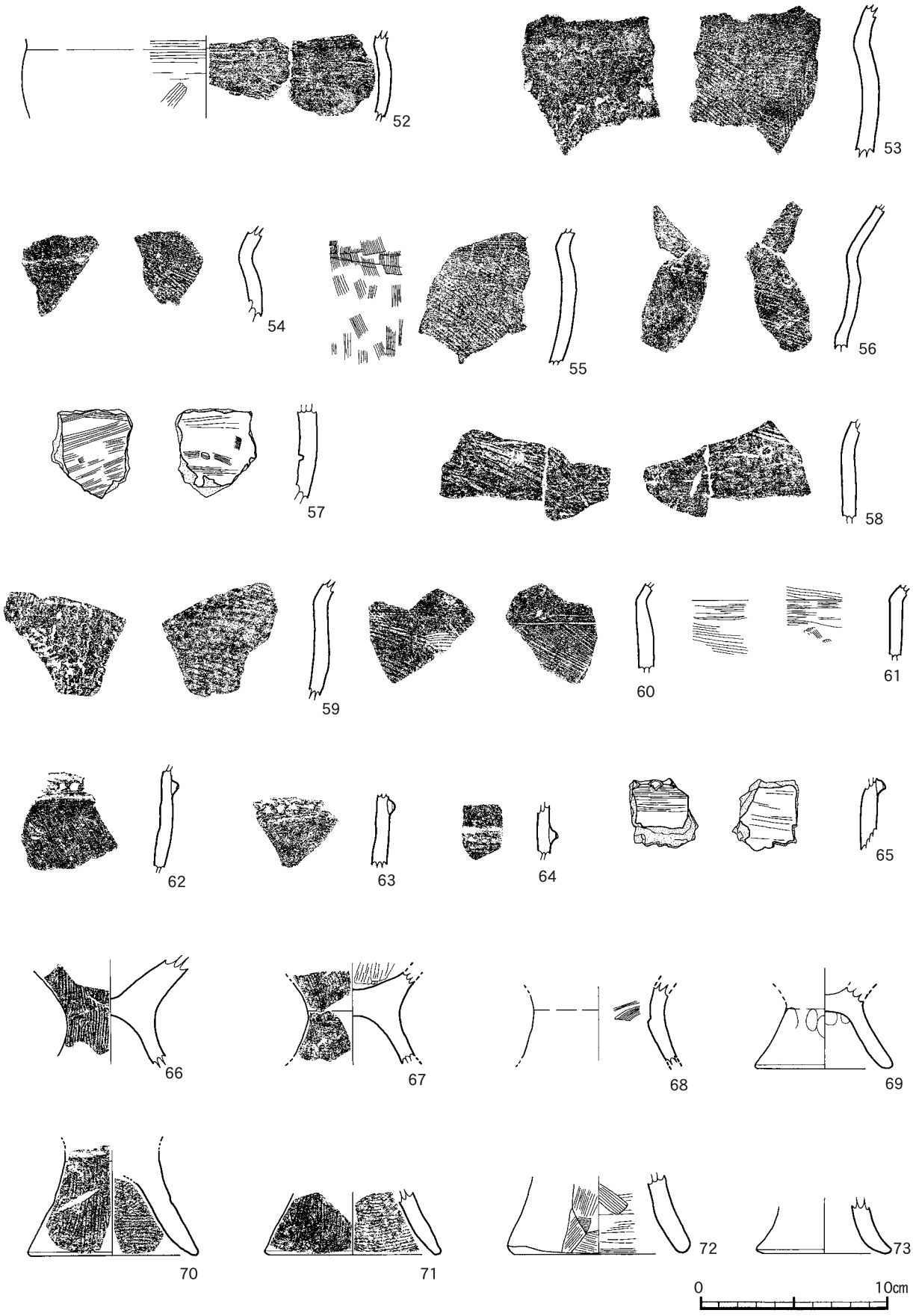
52～57は頸部がしっかり屈曲し，頸部から胴部の上部にかけて膨らみ，底部にかけてすぼまっていくものである。52は内外面ともナデ調整が施され，黒褐色を呈し，焼成も良好である。53・54は，外面はナデ調整が施されている。内面は頸部の稜線がはっきりとしており，稜線から上部は目の細かいハケによる調整，稜線から下部は叙位・横位・縦位と目の大きいハケで調整されており，稜線を境に調整方法が上下で異なっている。55・56は，外面は縦位に目の細かなハケによる調整が施され，内面には頸部は横位に目の細かなハケによる調整を，胴部は斜位に目の大きいハケによる調整が施されている。57は胴部しか残っていないため，頸部の形態は不明であり，下記のグループに属する可能性も考えられるが，胴部の湾曲状態からこのグループに属するものとした。内外面とも丁寧にナデ調整が施されており，内面には長径約４㎜ほどの窪みがある。窪みの中には細い線が無数に走っており，その中の１本は器壁の中へさらに伸びている。大きさや無数の線の痕から籾痕と推定される。

58～61は頸部から胴部にかけて膨らまず，真っ直ぐ伸びていくものである。58は，頸部の屈曲が緩やかなものである。外面はハケ目，内面はハケ目及びナデによる調整が施されている。内外面ともに粗雑な調整である。59～61は，頸部の屈曲が58と比較して強く，内面の稜線がはっきりしているものである。59は，外面については胴部に幅約１㎝程度のヘラ状工具で縦位にケズリが施され，頸部には縦位にハケ目が残る。内面は横位にハケ目による調整が施されている。60・61は内外面ともにハケ目による調整が施されている。

62～65は胴部に突帯が付くものである。いずれも突帯の上下をナデて接合させており，刻み目の付くものである。62・63は突帯の高さや幅，刻み目の間隔がほぼ同じものである。64は刻み目の間隔は62や63とほぼ同じものの，刻みは浅くはっきりとしないものである。65は他の３つと比較して刻み目の間隔は広いが，刻みは浅いものである。４つとも摩滅が激しく，特に62～64は内面が欠損している。

⑶　底部～脚台（66～73）

66～69は底部から脚台にかけてである。底部と脚台の接合部は，貼り付けの後，緩やかなカーブを描くように丁寧に仕上げてある。66・67の調整は，外面が縦位のハケ目，内面が66はナデ調整，67は縦位のハケ目による調整である。68は脚台の接合部が剥がれ落ちたものである。内面に接合する前に調整したと思われるハケ目が残る。69は底部と脚台の接合を指頭で行っている。70～73は脚台である。70・71は脚台端部が細くなるものである。調整は，外面が縦位のハケ目，内面が横位のハケ目による調整である。72は脚台端部が厚みがあるものである。調整は外面が縦位



第17図　古墳時代の土器Ⅱ

及び横位のハケ目，内面は端部付近はナデ調整で底部に近づくにつれハケ目による調整である。73は脚部端部が外反するものである。

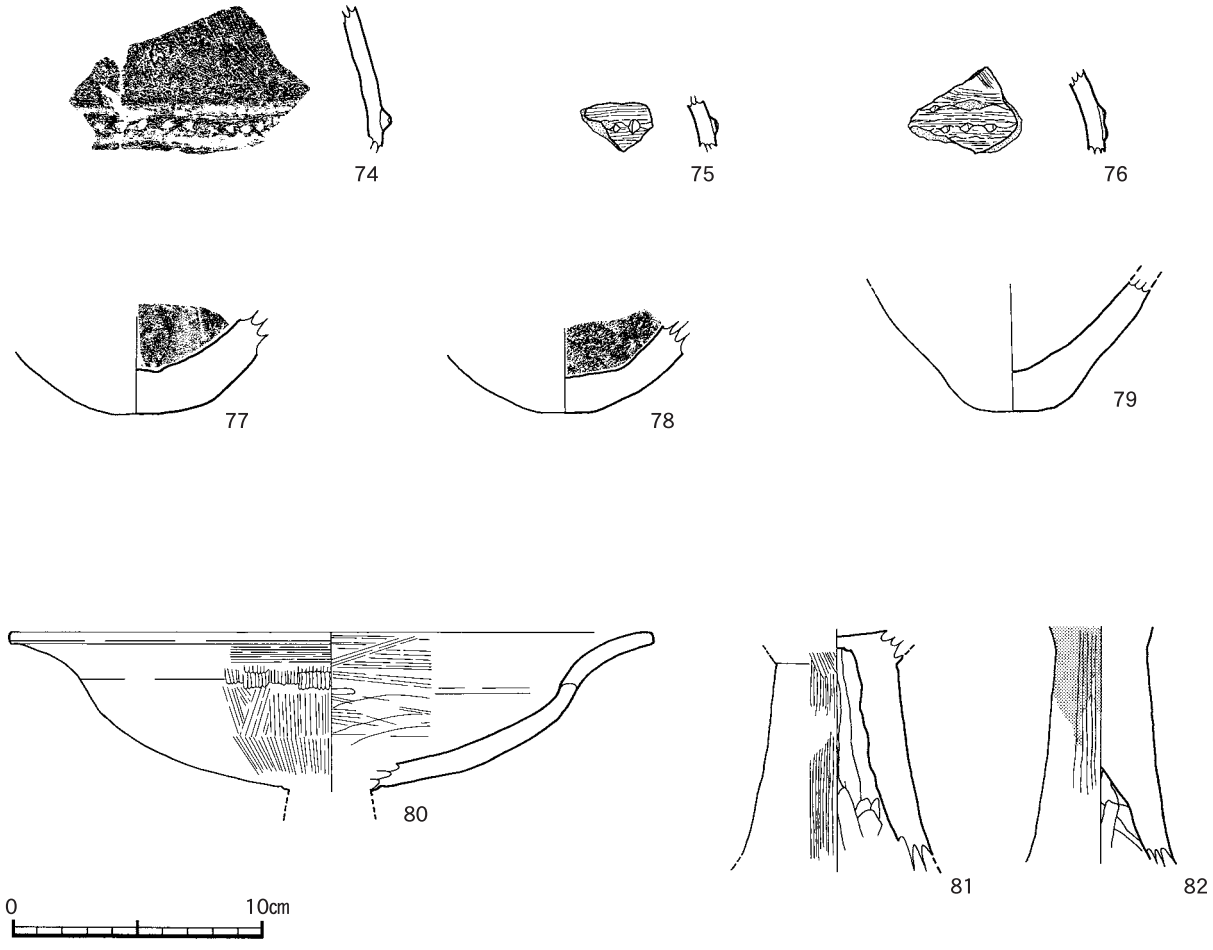
2　壺形土器（第18図）

74～76は胴部に刻み目の付く突帯が付くものである。74・75は一本の突帯が付くもので，その上下をナデて接着させている。76は二本の突帯が付くものである。いずれも摩滅が激しく，内面は欠損している。

77～79は壺形土器の底部である。77・78は若干の平坦面をもつ，安定した丸底である。79は乳房状の底部である。

3　高坏形土器（第18図）

80は，高坏形土器の坏部である。脚台は欠損している。調整は外面が底部から頸部にかけて縦位のハケ目，口縁部は横位のナデ調整を施している。内面は横位及び斜位のハケ目による調整が施されている。内外面とも丁寧に仕上げられており，焼成も良好である。81・82は高坏形土器の脚台である。81は外面がハケ目，内面がケズリによる調整である。82は精選された粘土を用いており，焼成も極めて良好である。外面はミガキがみられ，赤色の顔料が塗布されている。



第18図　古墳時代の土器Ⅲ

第５表　古墳時代土器観察表

番号	区	層	標高(m)	注記番号	器種	部位	色調	外面調整	内面調整	胎　土	口径	器高	底径	脚高	備考	挿図
32	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	明褐色	ハケ・ナデ	ハケ	石英・輝石	24.0	(5.6)	—	—		16
33	I24	Ⅲa	107.932	322	甕	口縁部	暗褐色	ナデ	ハケ	石英	—	(3.0)	—	—		16
34	I23	Ⅲa	107.365	620	甕	口縁部	赤褐色	ハケ・ケズリ	ハケ	長石・石英・輝石	25.6	(8.4)	—	—		16
35	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	明褐色	ハケ	ハケ	茶粒	—	(4.7)	—	—		16
36	I24	Ⅱ	107.767	337	甕	口縁部	明褐色	ナデ	ナデ	砂粒・角閃石	—	(3.4)	—	—		16
37	J24	Ⅱ	108.212	318	甕	口縁部	暗褐色	ナデ・ケズリ	ハケ・ナデ	長石	30.2	(7.8)	—	—		16
38	H23	Ⅲa	106.750	74	甕	口縁部	暗褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(6.2)	—	—		16
39	I24	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	黒褐色	ナデ	ハケ	長石・砂粒	—	(4.5)	—	—		16
40	—	表	—	—	甕	口縁部	黄褐色	ナデ	ハケ	長石・輝石	—	(2.8)	—	—		16
41	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	黒褐色	ナデ	ハケ	長石・砂粒	—	(4.5)	—	—		16
42	I24	Ⅲa	107.895	621	甕	口縁部	暗褐色	ナデ	ナデ	長石・角閃石	29.2	(2.5)	—	—		16
43	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	黒褐色	ナデ	ハケ	茶粒	—	(1.6)	—	—		16
44	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	暗褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	—	(2.8)	—	—		16
45	L22	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	明褐色	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	長石・輝石	—	(2.5)	—	—		16
46	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	黄褐色	ナデ	ナデ	長石・輝石	—	(1.9)	—	—		16
47	I24	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	黄褐色	ハケ	ハケ	石英・長石	25.0	(3.8)	—	—		16
48	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	黄褐色	ハケ	ハケ	石英・角閃石	—	(3.8)	—	—		16
49	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	褐色	ナデ	ハケ・ナデ	茶粒	—	(2.9)	—	—		16
50	—	Ⅱ	—	—	甕	口縁部	明褐色	ナデ	ナデ	石英・長石	—	(2.9)	—	—		16
51	I23	Ⅲa	—	—	甕	口縁部	赤褐色	ナデ	ナデ	石英・輝石	—	(3.3)	—	—		16
52	I24	Ⅱ	107.817	333	甕	胴部	暗褐色	ハケ	ハケ・ナデ	石英・長石	—	(4.2)	—	—		17
53	L22	Ⅲa	109.395	240	甕	胴部	黄褐色	ナデ	ハケ・ナデ	石英・輝石・茶粒	—	(7.8)	—	—		17
54	K22	Ⅲa	—	—	甕	胴部	黄褐色	ナデ	ハケ・ナデ	石英・輝石・角閃石	—	(4.6)	—	—		17
55	L23	Ⅲa	110.165	217	甕	胴部	明褐色	ハケ	ナデ	石英・長石	—	(6.9)	—	—		17
56	I22	Ⅲa	—	—	甕	胴部	黒褐色	ハケ	ハケ・ナデ	石英・輝石	—	(7.7)	—	—		17
57	I24	Ⅲa	107.715	66	甕	胴部	黒褐色	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	石英・長石	—	(4.6)	—	—	籾殻痕	17
58	L22	Ⅲa	109.630	183他	甕	胴部	暗褐色	ハケ	ハケ・ナデ	長石・輝石・砂粒	—	(5.1)	—	—		17
59	I23	Ⅲa	—	—	甕	胴部	黄褐色	ハケ	ハケ	石英・長石	—	(6.0)	—	—		17
60	I23	Ⅲa	—	—	甕	胴部	黄褐色	ハケ	ハケ・ナデ	石英・輝石	—	(4.7)	—	—		17
61	I23	Ⅲa	—	—	甕	胴部	明褐色	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	長石・輝石	—	(3.8)	—	—		17
62	H23	Ⅲa	—	—	甕	胴部	黄褐色	ハケ・ナデ	—	角閃石・長石	—	(5.0)	—	—	刻目突帯文	17
63	I23	Ⅲa	—	—	甕	胴部	赤褐色	ナデ	—	石英・輝石	—	(3.7)	—	—	刻目突帯文	17
64	I23	Ⅲa	—	—	甕	胴部	明褐色	ハケ・ナデ	ナデ	石英・角閃石・輝石	—	(2.6)	—	—	刻目突帯文	17
65	—	—	—	—	甕	胴部	明褐色	ナデ	ナデ	石英・輝石	—	(3.8)	—	—	刻目突帯文	17
66	I24	Ⅲa	—	—	甕	脚台	明褐色	ハケ	ナデ	石英・輝石	—	(5.6)	—	—		17
67	I23	Ⅲa	—	—	甕	脚台	赤褐色	ハケ	ハケ	石英・角閃石・輝石	—	(4.9)	—	—		17
68	I23	Ⅲa	—	—	甕	脚台	明褐色	ナデ	ナデ	長石	—	(3.4)	—	—		17
69	I23	Ⅲa	107.140	617	甕	脚台	橙褐色	ナデ	ナデ	石英・角閃石・輝石	—	(4.3)	7.4	3.2		17
70	I24	Ⅲa	107.962	328	甕	脚台	黄褐色	ハケ	ハケ	石英・角閃石・輝石	—	(5.7)	9.0	5.2		17
71	J24	Ⅲa	—	—	甕	脚台	黄褐色	ハケ	ハケ	石英・長石	—	(3.3)	9.2	—		17
72	I23	Ⅲa	—	—	甕	脚台	暗褐色	ハケ	ハケ・ナデ	砂粒	—	(4.2)	9.8	—		17
73	—	表	—	—	甕	脚台	明褐色	ナデ	ナデ	長石・輝石	—	(2.5)	7.2	—		17
74	I23	Ⅲa	—	—	壺	胴部	褐色	ハケ・ナデ	—	茶粒	—	(4.4)	—	—	刻目突帯文	18
75	I23	Ⅲa	—	—	壺	胴部	赤褐色	ナデ	—	輝石	—	(1.8)	—	—	刻目突帯文	18
76	I23	Ⅲa	—	—	壺	胴部	赤褐色	ナデ	—	石英・輝石	—	(3.3)	—	—	刻目突帯文	18
77	I23	Ⅱ	—	—	壺	底部	黄褐色	ハケ	ナデ	石英・長石	—	(3.8)	1.8	—		18
78	I23	Ⅲa	—	—	壺	底部	黄褐色	ハケ	ナデ	長石・輝石	—	(3.4)	2.0	—		18
79	—	表	—	—	壺	底部	赤褐色	ナデ	ナデ	長石・輝石	—	(5.1)	2.0	—		18
80	J23	Ⅲa	107.780	623他	高坏	坏部	赤褐色	ハケ	ハケ・ナデ	石英	25.6	(6.3)	—	—		18
81	L23	Ⅱ	109.260	112	高坏	脚台	明褐色	ハケ	ケズリ	長石	—	(9.0)	—	—		18
82	J23	Ⅲa	—	—	高坏	脚台	赤褐色	ナデ・ミガキ	ケズリ	石英・輝石	—	(9.4)	—	—	赤色顔料塗布	18

第５節　古代の調査

本遺跡の主体をなす時代である。遺構として土坑１基，集石１基を検出している。遺物は，Ⅱ・Ⅲa層より土師器，須恵器，砥石等が出土している。特に土師器は出土数も多く，坏，埦，皿などの食膳具や甕，鉢などの煮炊具など器種も豊富である。また，赤色土器や墨書土器の出土数の多さなども本遺跡の特徴である。

１　検出遺構（第19・20図）

検出された遺構は，土坑１基，集石１基であった。検出された遺構の数も少なく，ピットや建物跡なども検出されなかったため，人々の生活根拠地であった可能性は低いと考えられる。

⑴　土坑（第20図）

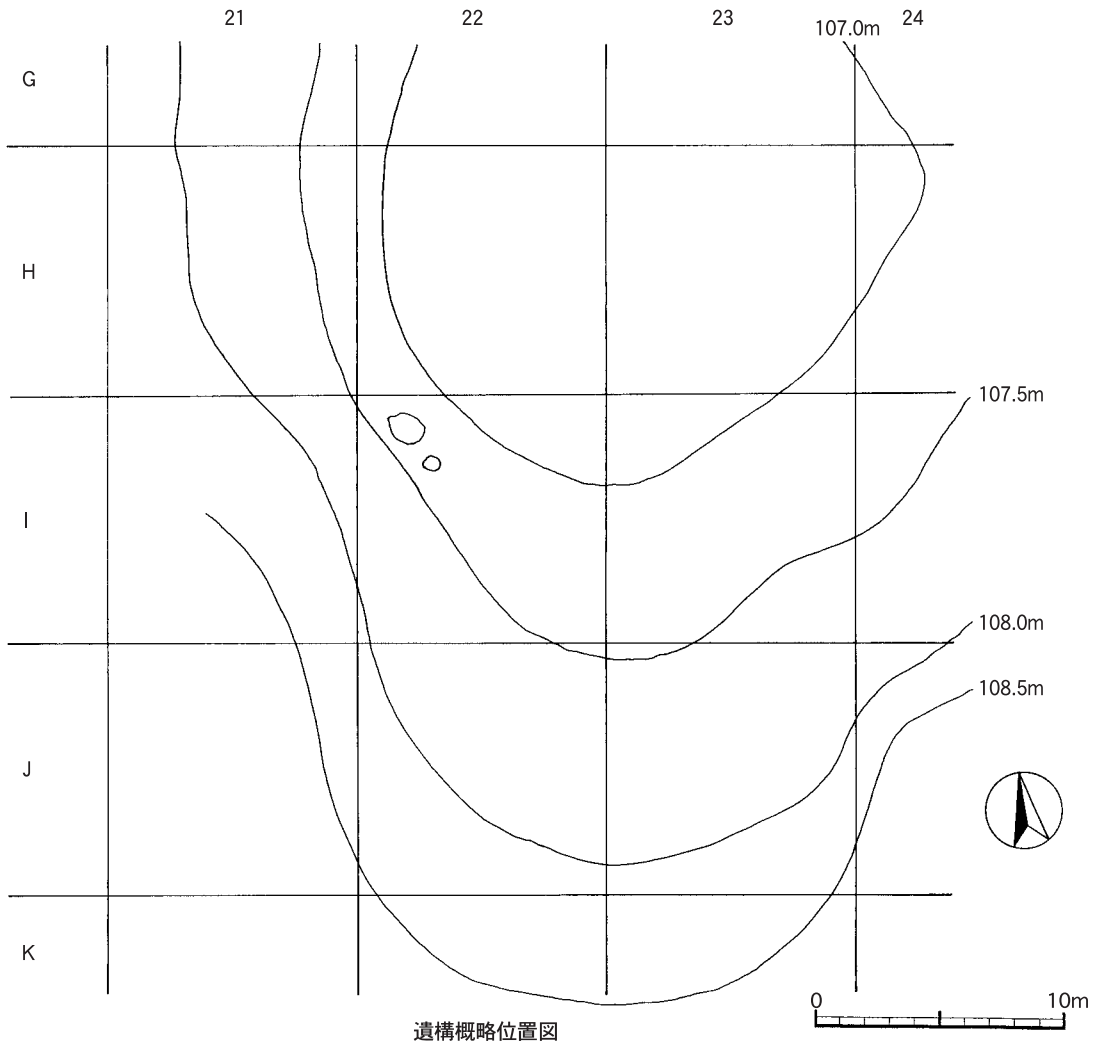
Ⅰ－22区から土坑が１基検出された。検出面はⅢa層上面である。長径は144㎝，短径は108㎝，深さは21㎝であり，平面形は楕円形である。下面にはさらに長径24㎝，短径19㎝のピットが見られる。埋土は２層に分層でき，上層は暗茶褐色砂質土，下層は暗黄褐色砂質土である。また，この２層の埋土を南北に分断するように，土坑のほぼ中央部に黒色土と黄褐色土の混土が縦方向に入っている。これは樹痕によるものと推定される。下層の埋土中より，土師器の破片が１点出土している。炭化物や焼土などは検出されなかった。

⑵　集石（第20図）

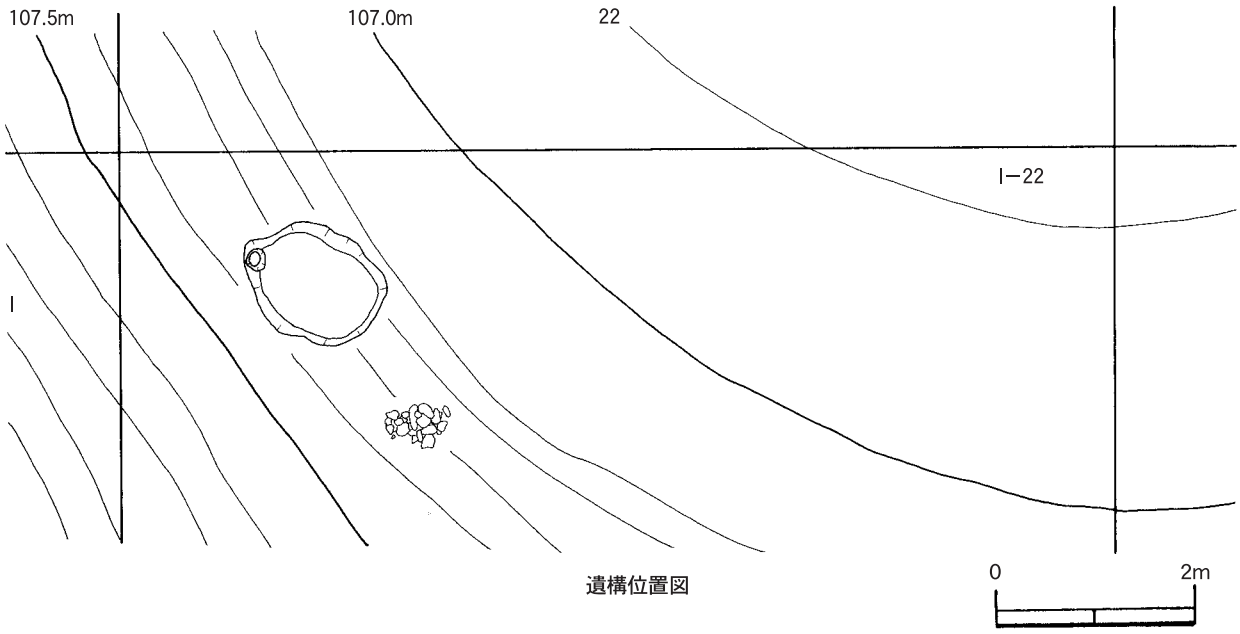
集石はⅠ－22区のⅢa層で検出された。軽石が38個，安山岩が６個，砂岩が１個の計45個で構成されており，掘り込みは捉えられなかった。１個あたりの重量は，軽石が平均261ｇ，安山岩が平均265ｇ，砂岩が205ｇであったが，大きさにばらつきがあり，軽石では最大で1354ｇ，安山岩では1569ｇであった。全体的に熱を受けたものと思われ，軽石では表面が赤く変色しているものが26個，表面が黒く変色しているものが３個，安山岩では表面が赤く変色しているものが４個であった。また，熱を受けた影響なのか非常に脆くなっており，軽石の中には触れるだけで崩れていくものもあった。軽石では検出された38個のうち，同一個体と考えられるものがいくつかあり，使用中あるいは破棄された後に破損した可能性が考えられるが，接合はできなかった。安山岩についても検出された６個のうち３個は同一個体のもので，実際は４個であったと考えられる。そのため検出された個数は45個であったが，実際の個数はもっと少なかったものと考えられる。焼土や炭化物などは検出されなかったため，この場所で使用されたかは不明である。また，土坑と非常に隣接しているため，何らかの関係があるものと考え，古代の集石と推定したが，検出したⅢa層は縄文時代や古墳時代の遺物も出土しており，古代より古くなる可能性も考えられる。

２　出土遺物

古代の遺物としては，Ⅱ・Ⅲa層から土師器，須恵器，砥石が出土した。出土状況はＧ～Ｌ－22区の南北方向に集中し，東西の斜面部に近づくにつれ出土数が少なくなるという傾向がみられる。この傾向は，黒色・赤色・墨書土器も同様であった。土坑や集石が検出されたⅠ－22区やＪ－22区が最も出土量が多いため，遺構との関連も考えられる。

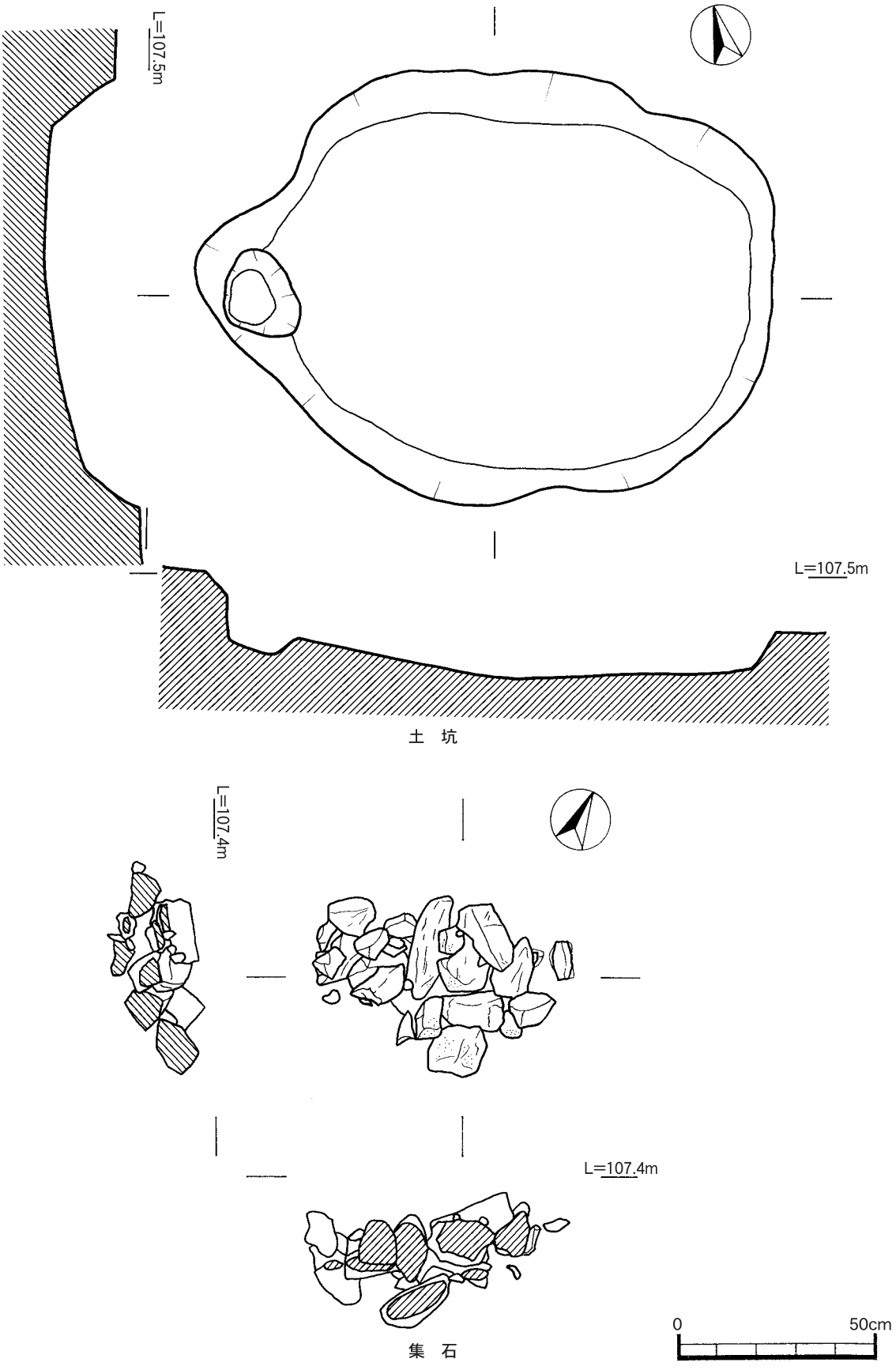


遺構概略位置図

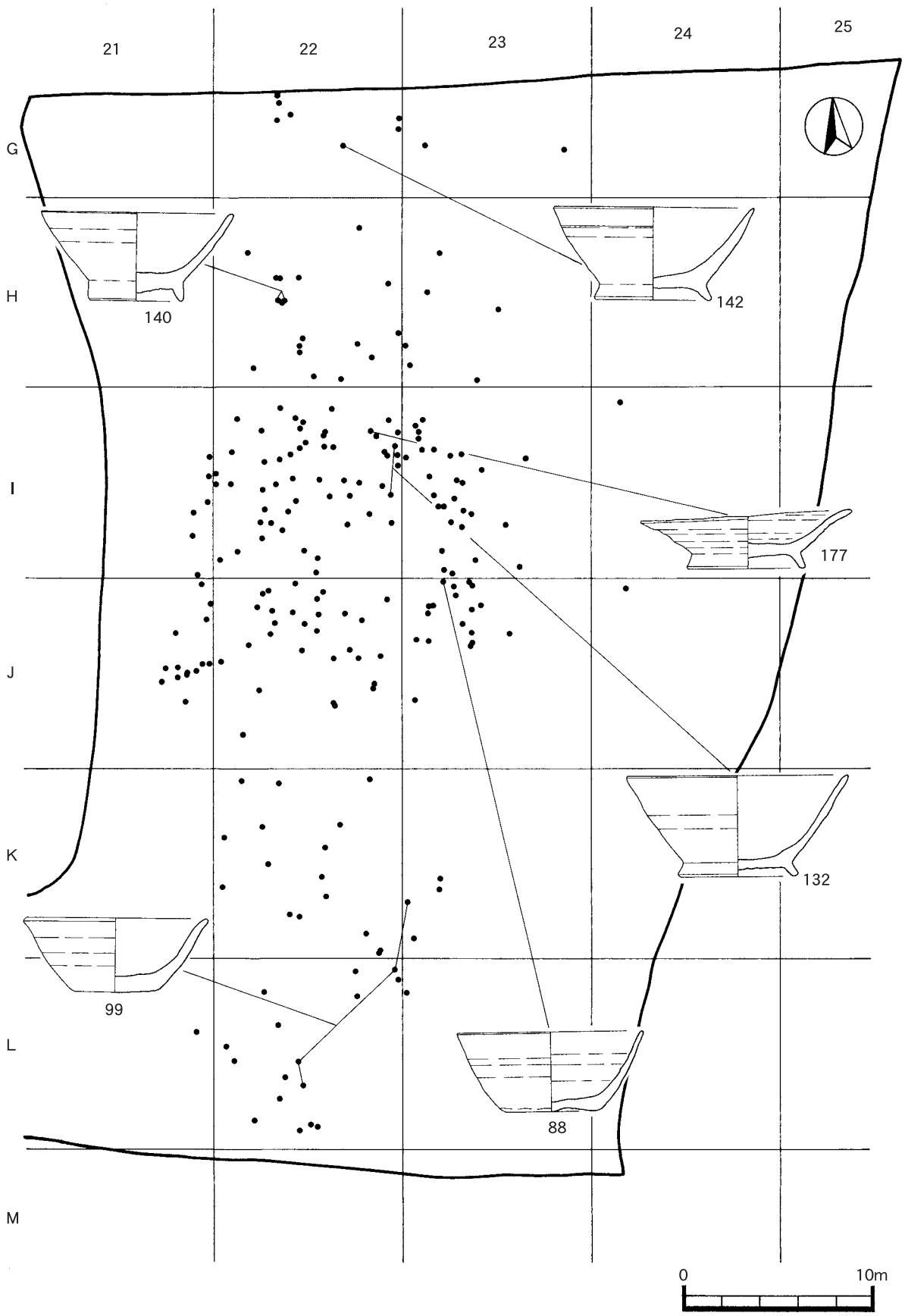


遺構位置図

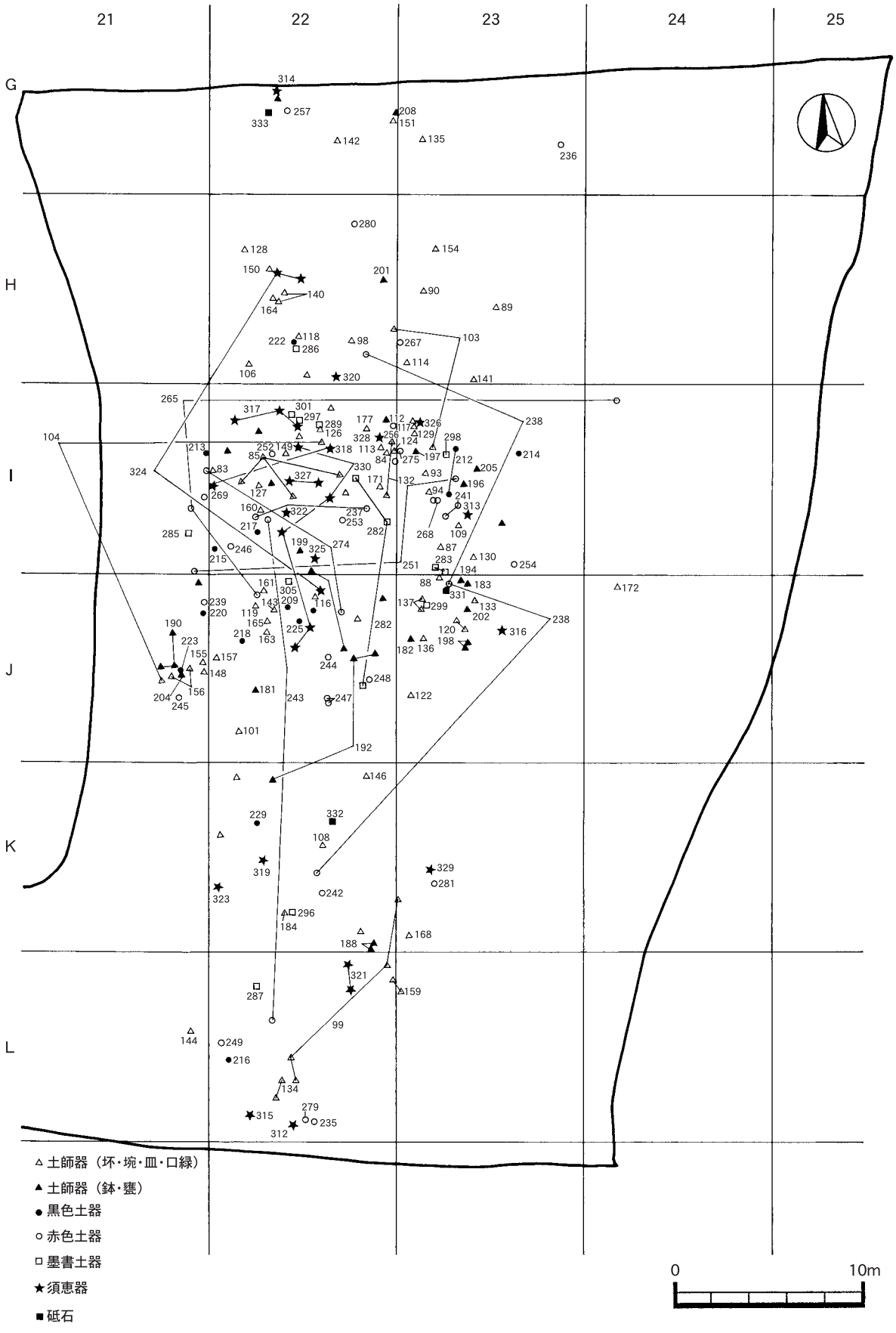
第19図　遺構位置図



第20図　土坑・集石



第21図　遺物出土状況（古代）Ⅰ



第22図　遺物出土状況（古代）Ⅱ

⑴　土師器（第23図～第35図）

土師器の坏，埦，皿，鉢，甕や黒色・赤色・墨書土器なども出土している。

①　坏（第23・24図）

高台をもたず，平底の土師器を「坏」とした。円盤状の底部をもつ土師器も坏とした。口縁部や体部まで残っているものが少なかったため，体部や底部の形態などにより４種類に分類し，底部しか残存していないものについては，底部だけで分類した。

Ⅰａ類（83～93）

平底で底部から体部にかけておおむね真っ直ぐに伸び，体部外面下端に丁寧なナデ調整やケズリが施され，底部から体部にかけての立ち上がりがなだらかになっているものである。

83～87は底径が6.5～7.0㎝のものである。83・84は体部が大きく外傾するものである。ともに口径は14.6㎝である。回転台を使った横ナデの調整痕が段々に残っている。83は体部外面下端がナデ調整によりなだらかな立ち上がりとなっている。外底は回転ヘラ切り痕が残り，器壁は底部中央ほど薄く，底部端部では厚くなっている。全体的に丁寧な調整が施されている。84は外底はヘラによる切り離し痕がそのまま残り，体部外面下端は簡単なナデ調整が施されているものの粗雑であり，全体的な調整も粗雑である。85・86も体部が大きく外傾し，口径が広くなると推定されるものである。体部外面下端はともにナデ調整が施されている。85は83と同様に器壁が底部中央部ほど薄く底部端部は厚くなっている。外面はともに横ナデの調整痕が残っているものの，85は粗雑な調整であるが，86は丁寧な調整が施され，焼成も良好である。87は体部が若干外傾するものである。外底は回転ヘラ切り痕が明瞭に残っている。

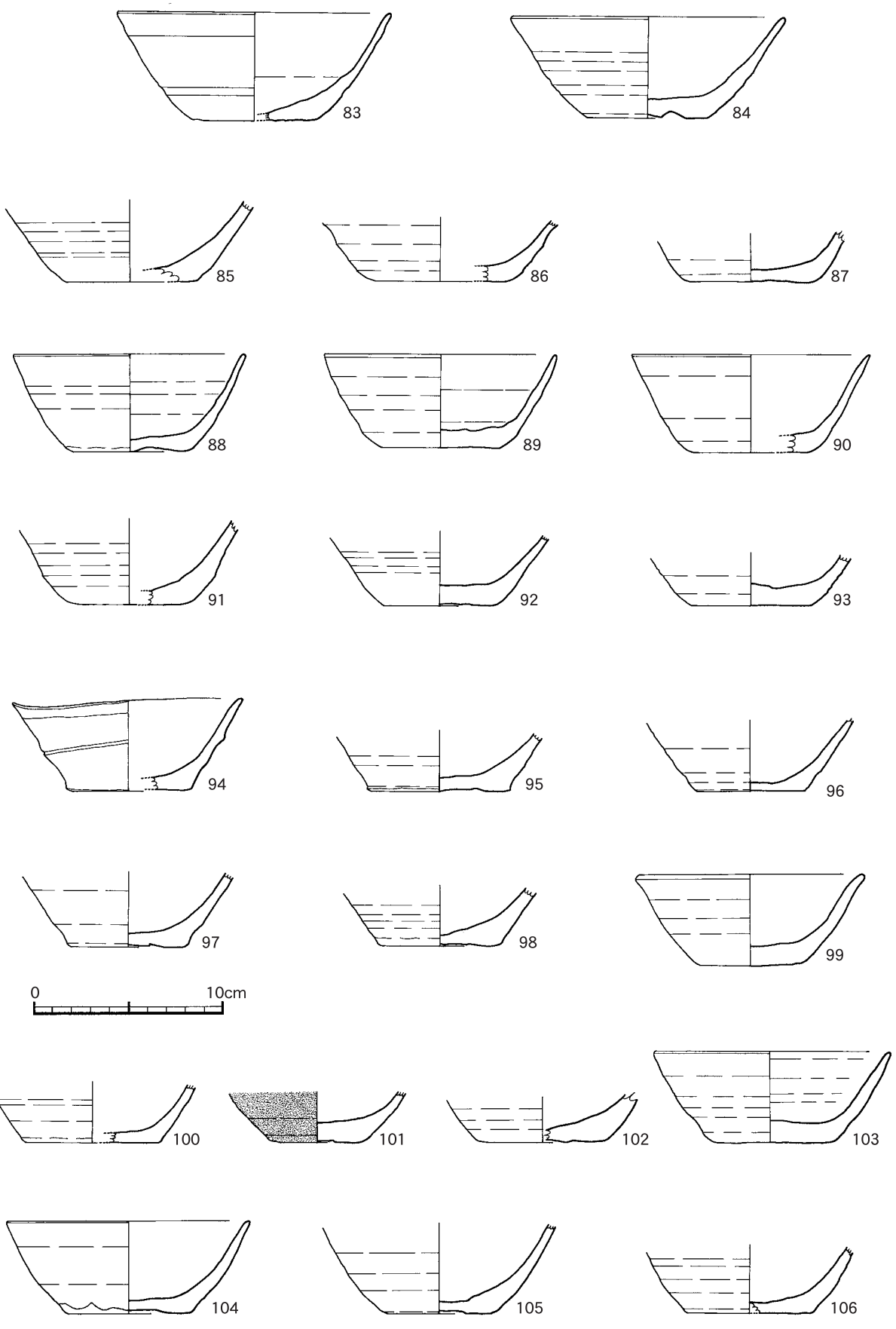
88～93は底径が5.5～6.2㎝のものである。88～91は回転ヘラ切りによるものである。体部はあまり開かず，真っ直ぐ伸びるもので，体部外面下端はいずれもナデ調整によってなだらかに仕上げられている。88は回転ヘラ切り痕が明瞭に残るが，89～91は回転ヘラ切りの後，ナデ調整によって多少整えられている。92・93は体部が若干外傾し，ヘラ切りによる切り離しのものである。92は体部外面下端にナデ調整が加えられてはいるものの，粗雑である。93は体部外面下端がヘラによるケズリの調整が施されている。

Ⅰｂ類（94～98）

平底で底部から体部にかけておおむね真っ直ぐに伸び，体部外面下端に簡単なナデ調整が施されるものの，底部から体部にかけての立ち上がりに段が付くものである。体部の開きはさほど開かず，真っ直ぐ伸びていくものである。94は体部外面の中央部に調整の際にできたと思われる１本の筋が入っている。全体的に粗雑な調整で，底部外面端部にはみ出した粘土塊がそのまま残っている部分とナデ上げている部分とある。外底はヘラによる切り離しである。95～98は外底が回転ヘラ切りによる切り離しのものである。95・96は底部外面端部にはみ出した粘土塊をヘラによって削り取っており，97・98ははみ出した粘土塊を体部へナデ上げている。

Ⅱａ類（99～102）

平底で体部が丸みをもち，体部外面下端に丁寧なナデ調整やケズリが施され，底部から体部にかけての立ち上がりがなだらかになっているものである。99～101は外底がヘラ切りによる


83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
0
10cm
100
101
102
103
104
105
106

第23図　土師器（坏Ⅰ）

ものである。体部外面下端はいずれもナデ調整によりなだらかになっている。99は体部が丸みをもち，口縁部が外反するものである。内外面とも丁寧にナデ調整が施され，焼成も良好である。100は他と比較して器壁が薄い。体部と底部の器壁の厚さがほぼ同じであり，調整も丁寧である。101は外面に煤が付着している。割口に煤が付着していないことから，破棄される以前あるいは割れる前に煤が付着したものと考えられる。102は外底に回転ヘラ切り痕が残るものである。底部の器壁が中央部になるにしたがい薄くなっている。

Ⅱb類（103～106）

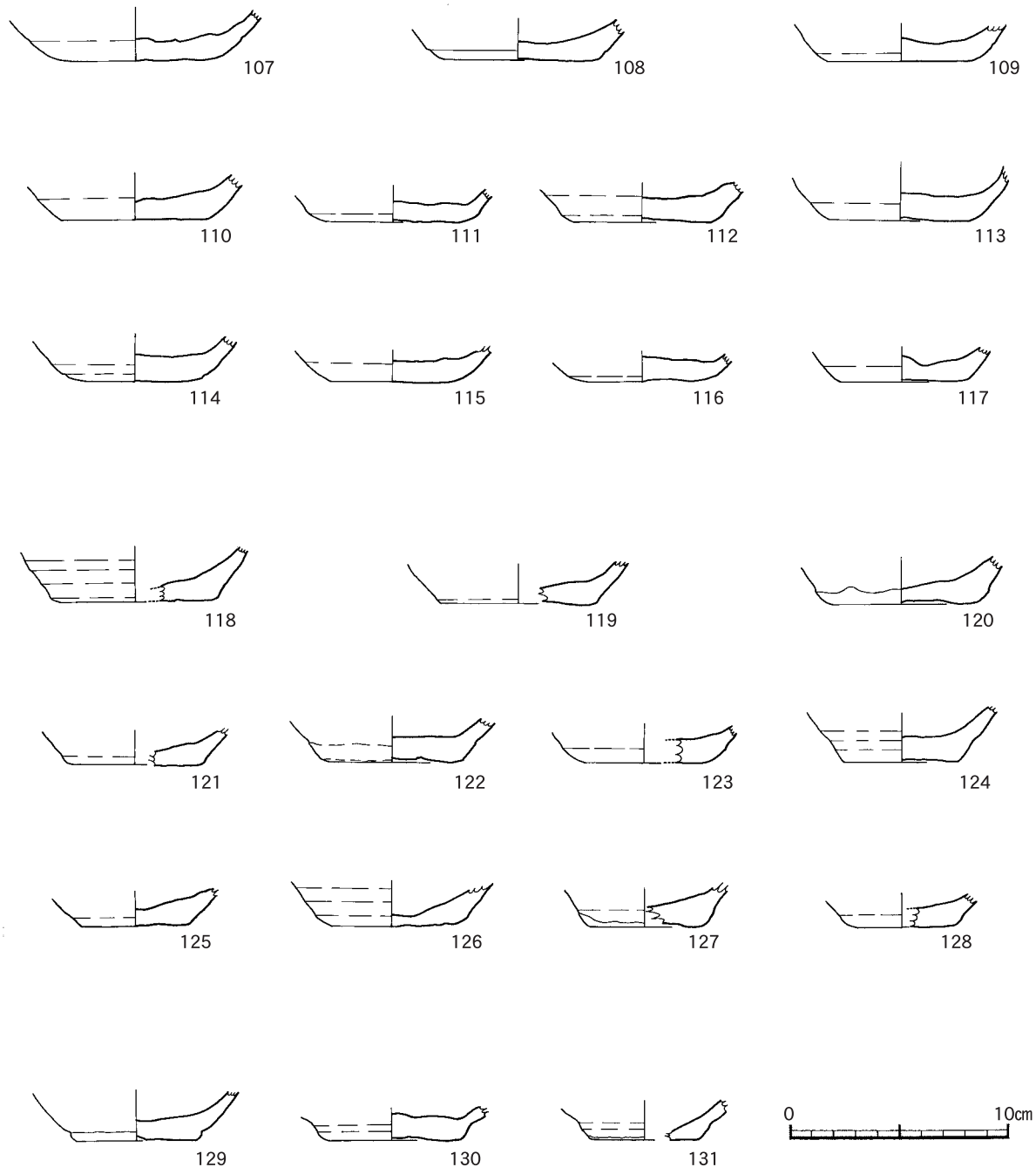
平底で体部が丸みをもち，体部外面下端に簡単なナデ調整が施されるものの，底部から体部にかけての立ち上がりに段が付くものである。103は外底をヘラによる切り離し後，ヘラによりさらに調整を施しているものである。体部の内外面には回転台を使った横ナデの調整痕が段々に残っている。104～106は回転ヘラ切りによる切り離しの後，ナデによりさらに調整を施している。はみ出した粘土塊はヘラで削り取っている。いずれも底部中央部ほど器壁が薄くなっている。

底部（第24図）

前述したⅠ・Ⅱ類の底部と推定されるが，体部が欠損しているため口縁部から体部の形態が不明なものである。底部から体部にかけての形態によって３種類に分けることができる。

107～117は体部外面下端に丁寧なナデ調整やケズリが施され，底部から体部にかけての立ち上がりがなだらかなものである。107・108は底径が7.0㎝のものである。ともに外底を回転ヘラ切りで切り離し，ナデ調整を施している。底部端部のはみ出した粘土塊は，ヘラによって削り取られている。109～114は底径が6.0㎝以上7.0㎝未満のものである。109はヘラによる切り離しである。底部内面中央部が盛り上がっている。110～112は回転ヘラ切りによる切り離しである。113・114は回転ヘラ切りの後，外底をナデによる調整を施している。115～117は底径が5.0㎝以上6.0㎝未満のものである。115・116は回転ヘラ切りによるものである。117は回転ヘラ切りの後，外底をナデによる調整を施している。底部内面中央部が盛り上がっている。

118～128は体部外面下端に簡単なナデ調整が施されるものの，底部から体部にかけての立ち上がりに段が付くものである。118・119は底径が7.0㎝のものである。ともに回転ヘラ切りによるもので底部の器壁が中央部ほど薄くなっている。120・121は底径が6.4㎝のものである。ともに回転ヘラ切りによるもので底部の器壁が中央部ほど薄くなっている。120は底部端部のはみ出した粘土塊を体部へナデ上げている。121と比較して底部から体部の器壁が厚く，焼成も良好である。121は摩滅が激しい。122～127は底径が5.0㎝以上6.0㎝未満のものである。122・123は回転ヘラ切りによるもので，底部の器壁がほぼ同じ厚みを呈しているものである。122・123は底部端部のはみ出した粘土塊をナデによる調整を施しているが，124はヘラによって削り取っている。125～127は回転ヘラ切りによるもので，底部中央部の器壁が薄くなっているものである。いずれも底部端部から体部にかけての立ち上がりを横位のナデ調整によって整えている。125は摩滅が激しい。128は底径が5.0㎝未満と推定されるものである。残存部が少なく，摩滅も激しいため，不明なことが多い。そのため，底部の形態から円盤状の底部を有す



第24図　土師器（坏Ⅱ）

るものに属する可能性も考えられる。

129～131は円盤状の底部を有するものである。いずれも回転ヘラ切りによるものである。129は体部が丸みをもつものと推定されるものである。130は底部から体部への立ち上がりが大きく外傾し，器壁も薄くなっているので皿の可能性も考えられる。131は底径も小さく器壁も薄いため，小坏の可能性も考えられる。

② **埦**（第25図）

高台がついている土師器を「埦」とした。体部や底部及び高台の形状により４種類に分類し，底部しか残存していないものについては，底部だけで分類した。

Ⅰａ類（132～138）

体部が直線的に伸びるもので，高台がハの字状に開くものである。132・133は底部の器壁が薄いものである。ともに高台の貼り付けの後，基部にナデ調整を施しており，明瞭な稜線をもつ。底部外面はヘラで平らに調整している。132は高台から体部への貼り付け部の調整が粗雑で，凸凹している。体部から口縁部にかけての調整も横位のナデ調整が施されてはいるものの粗雑で，口縁部に歪みがみられる。高台端部は平たくなっている。133は高台貼り付け後の調整が丁寧に施されている。高台端部は丸まっている。134～138は底部の器壁が厚いものである。134は高台貼り付け後のナデ調整によって体部下端に段をもつ。高台端部は平たくなっている。135～137は高台の貼り付けが丁寧で，体部にかけてなだらかに伸びているものである。いずれも高台端部は丸まっている。136・137は内外面ともに丁寧なナデ調整が施され，焼成も良好である。136の外面には煤が付着している。138は高台が薄く，先細りするものである。高台貼り付け後のナデ調整によって体部下端に段をもつ。高台端部の形状は不明である。体部は回転台使用による横位のナデ調整痕が段々に残っている。内外面とも丁寧な調整が施されている。

Ⅰｂ類（139・140）

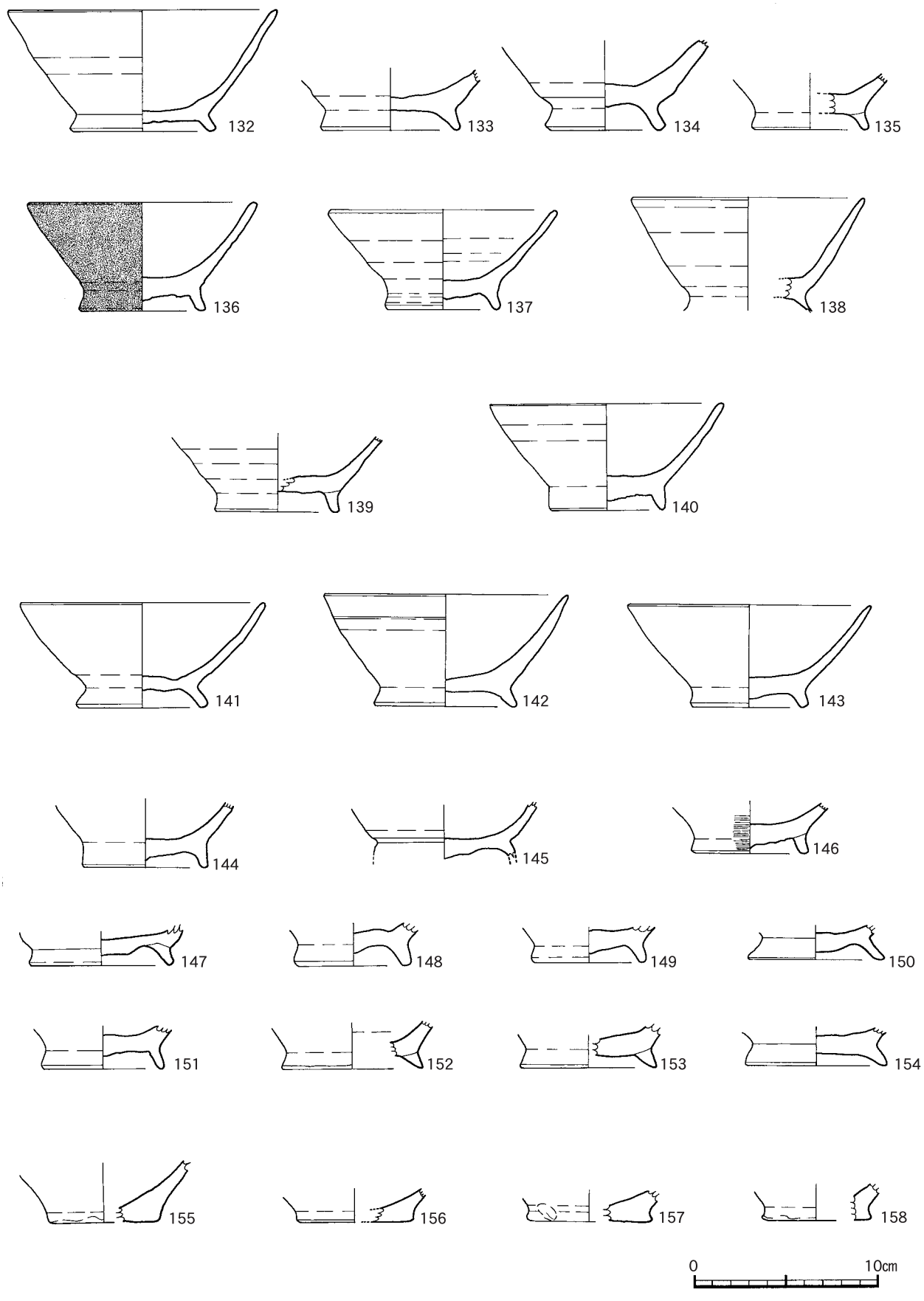
体部が直線的に伸びるもので，高台は開かず真っ直ぐ伸びるものである。139は高台端部が平たくなっているものである。高台の貼り付けは丁寧にナデ調整が施され，体部にかけてなだらかに伸びている。140は高台端部が丸まるものである。高台の貼り付け部に明瞭な稜線がみられる。体部から口縁部にかけては丁寧にナデ調整が施されているが，底部内面の調整はやや粗雑である。

Ⅱａ類（141～143）

体部が丸みをもつもので，高台がハの字に開くものである。141・142は底部の器壁が薄いものである。ともに高台の貼り付け後に丁寧なナデ調整を施しており，明瞭な稜線をもつ。高台端部は丸まっている。141は体部から口縁部にかけて内外面ともに丁寧なナデ調整が施され，体部下部から体部上部まで器壁の厚さはほぼ同じである。142は体部の器壁が厚く，口唇部では細くなり，若干外反している。底部外面はナデ調整により平たく整えている。143は底部の器壁が厚く，高台端部が平たくなっているものである。全体的に丁寧なナデ調整が施され，焼成も良好である。口唇部では細くなり，若干外反している。

Ⅱｂ類（144～146）

体部が丸みをもつもので，高台があまり開かないものである。144・145は底部の器壁が薄いものである。144は高台貼り付け後のナデ調整が丁寧で，高台から体部にかけてなだらかに伸びる。焼成も良好である。145は高台を途中から折り曲げて真っ直ぐ下に伸ばしている。高台貼り付け後の調整はナデによって施され，ヘラ状工具によってはみ出した粘土塊を削り取った痕跡がみられ，体部から高台の境にはヘラケズリによってできた細い溝が残っている。高台端


132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
0
10cm

第25図　土師器（**埦**）

部の形状は不明である。146は精選された粘土を用いており，ナデ調整によってできた細い稜線が明瞭に残る。焼成も良好である。

底部（147～158）

前述したⅠ・Ⅱ類の底部と考えられるものである。口縁部から体部にかけて欠損しているため，体部の形状は不明である。底部及び高台の形態により２種類に分けることができる。

147～154はハの字状に開く高台をもつものである。147・148は高台端部が平たくなっているものである。147は底部の器壁が薄いものである。底部外面は高台貼り付けの際に丁寧な調整が行われており，内側が窪んでいるが，中央部は調整されず，盛り上がっている。148は147より若干底部の器壁が厚いものである。高台も厚く，しっかりしている。高台の貼り付け部は丁寧にナデ調整が施されている。149～151は高台端部が丸まるものである。150は高台がハの字に大きく開き，底部外面は高台貼り付けの際にナデ調整によってできた窪みがあり，中央部は盛り上がっている。151は精選された粘土を用いており，調整及び焼成ともに良好である。152～154は高台端部が細く尖るものである。いずれも体部から高台にかけての境には明瞭な稜線が残り，底部外面はナデ調整によって平たく整えられている。

155～158は柱状の充実高台をもつものであり，底部内面中央部が窪むものである。155・156は高台から体部にかけての境がなだらかなものである。155は体部が丸みをもつものと推定される。底部外面は荒いナデ調整が施されている。156は底部外面が回転ヘラ切りの後，丁寧なナデ調整が施されている。157・158は高台から体部にかけての境が窪んでいるものである。157は高台外面に指頭痕が残る。底部外面は丁寧なナデ調整が施されている。158は底部外面をナデ調整した後，はみ出した粘土塊をナデ上げている。

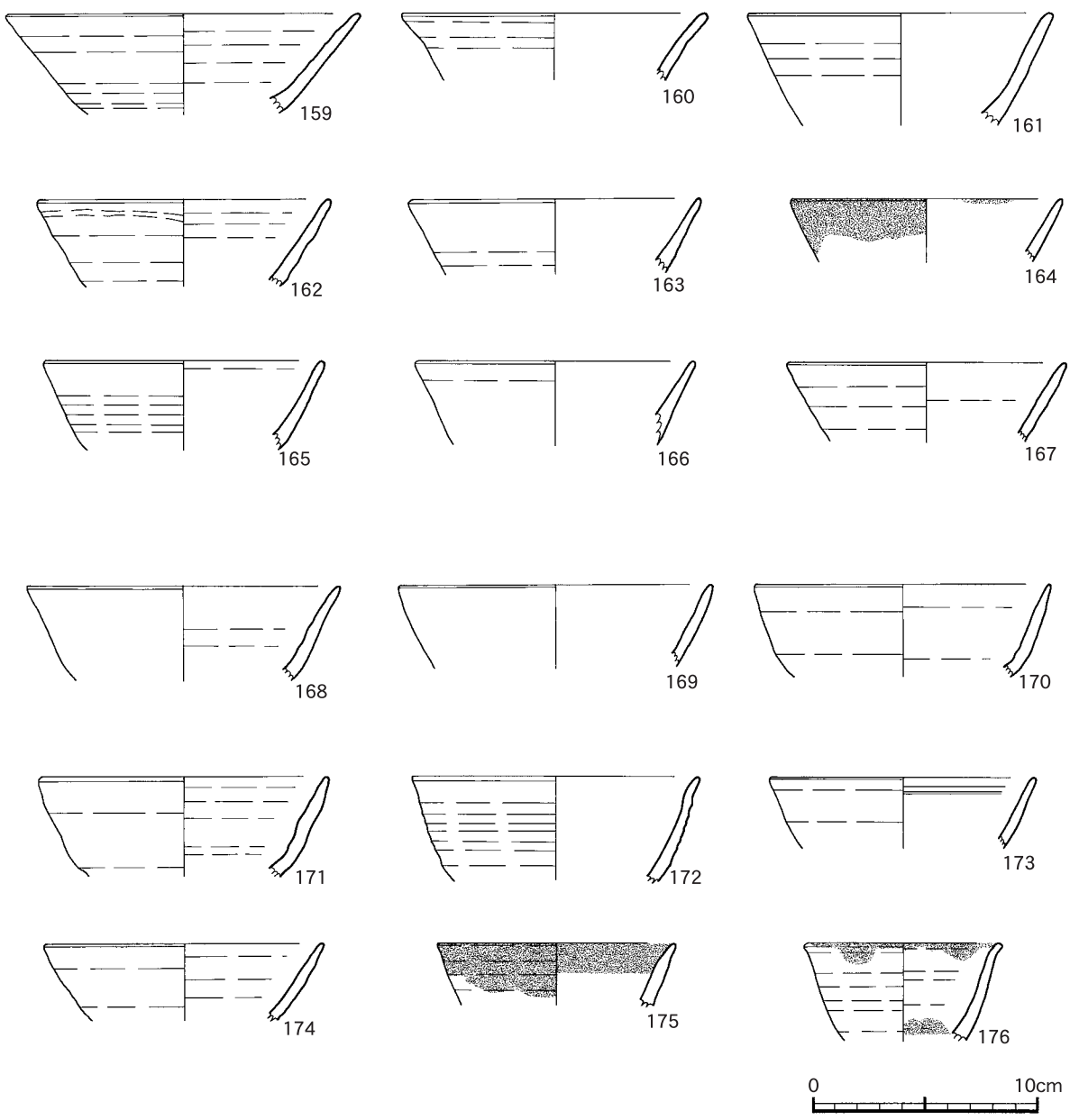
③　坏・**埦**の口縁部（第26図）

口縁部から体部しか残存しておらず，底部の形状が不明であるため，坏か埦の区別ができなかったものである。体部の形状により大きく２種類に分けることができ，体部の傾きや口径などによってさらに細分した。

159～160は底部から体部の立ち上がりが大きく外傾しながら直線的に伸びるものである。159は口径が15㎝を超える大型のものと推定される。残存している体部の形状から，下部が屈曲しているため，すぐ底部になると思われ，口径の大きさの割には器高は低いものであると推定される。160は口縁部が外反するものである。

161～167は底部から体部の立ち上がりが外傾しながら直線的に立ち上がるものである。161～163は口径が13㎝以上14㎝未満のものである。161・162は内外面とも丁寧なナデ調整が施され，焼成も良好である。163は口縁部が若干外反している。調整は丁寧に施されているが，焼成は今ひとつである。164～167は口径が12㎝以上13㎝未満のものである。164は口縁部から体部にかけての外面に煤が付着しており，灯明の可能性が考えられる。165・166は体部下部の形状及び器壁の厚さから，すぐ底部へつながっていくと推定され，器高は低いと考えられる。165・167はヨコナデ痕が段々に残っている。

168～176は体部が丸みをもつものである。168・169は口径が14㎝のものである。168は口縁



第26図　土師器（坏・**埦**の口縁部）

部が若干外反している。ともに摩滅が激しい。170・171は口径が13.0㎝以上13.5㎝未満のものである。ともに摩滅を受けているが，170は特にひどく，外面の調整痕がほとんど残っていない。172～174は口径が12㎝以上13㎝未満のものである。172・173は口縁部が若干外反するものである。172は丁寧なナデ調整が施され，外面には横位のナデ調整痕が段々に残っている。焼成も良好である。174は他と比較して底部から体部にかけての立ち上がりが大きく外傾するものである。175・176は口径が小さいものである。175は10.6㎝，176は8.8㎝で，口縁部が若干外反する。ただし，176は復元径で残存部が１／12しかないため，誤差が大きいと思われる。ともに口縁部の内外面に煤が付着しており，灯明の可能性が考えられる。

④　皿（第27図）

口径と比べて器高の低いものや底部から体部にかけての立ち上がりが大きく外傾するものを皿とした。177は高台付皿である。体部が大きく外傾しながら直線的に伸び，口縁部で若干外反する。口縁部は歪みがあり，楕円形に近い形になっている。内外面とも横位のナデ調整痕が段々に残る。底部外面は高台貼り付け後，丁寧にナデ調整が施され，平坦に整えられている。178・179は底部が残存していないため，高台の有無は不明である。ともに体部が直線的に伸び，回転台を使った横位のナデ調整痕が明瞭に残る。178は焼成も良好である。

⑤　鉢（第27図）

180～183は器壁が厚いもので，頸部内面の稜線が明瞭に残り，甕に近いタイプのものである。180・181は口縁部が外反し，胴部が膨らむものである。外面はともにナデ調整が施され，内面は口縁部がナデ，頸部の稜線から胴部は，180は斜位及び横位のケズリ，181は横位のケズリが施されている。182・183は口縁部が僅かに外反するもので，胴部は膨らまないものである。ともに外面はナデ調整を，内面はナデ及び斜位のケズリが施されている。180・182は胴部の器壁が口縁部と比較して若干薄くなっている。

184は器壁が薄く，胴部が直線的に伸びるものである。内外面とも横位のナデ調整が施されている。口縁部は若干外反し，口唇部は丸まっている。

⑥　甕（第28～30図）

甕は底部まで復元できたものがないため，口縁部及び胴部の形態により７種類に分類した。

Ⅰ類（185～187）

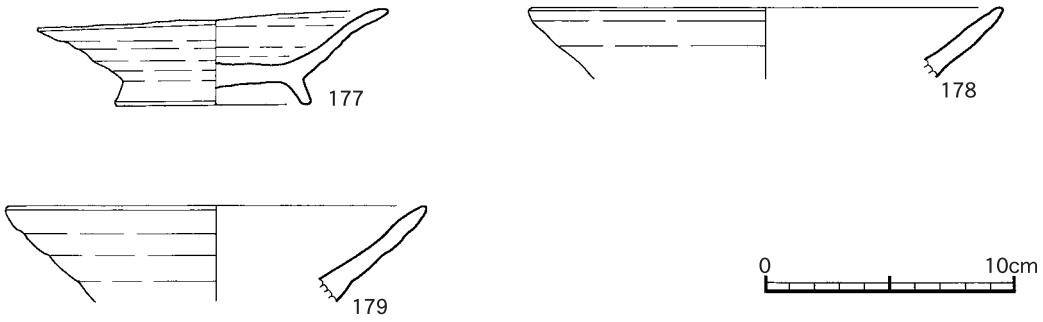
胴部が丸みを帯びながら膨らみ，頸部で内湾し，口縁部が逆Ｌ字状に大きく外反するものであり，頸部内面には明瞭な稜線が残っているものである。いずれも器壁が口縁部では厚く，胴部では薄くなるものである。185は外面に横位のナデ調整の他，縦位のハケ目による調整痕もみられ，内面は口縁部は横位のナデ調整，稜線より下部では斜位のケズリが施されている。胴部上位から口縁部にかけて煤が付着している。186・187は外面が横位のナデ調整，内面が口縁部が横位のナデ調整，稜線より下部では斜位のケズリが施されている。口唇部は185・186は丸まるのに対し，187は平たくなっている。

Ⅱ類（188・189）

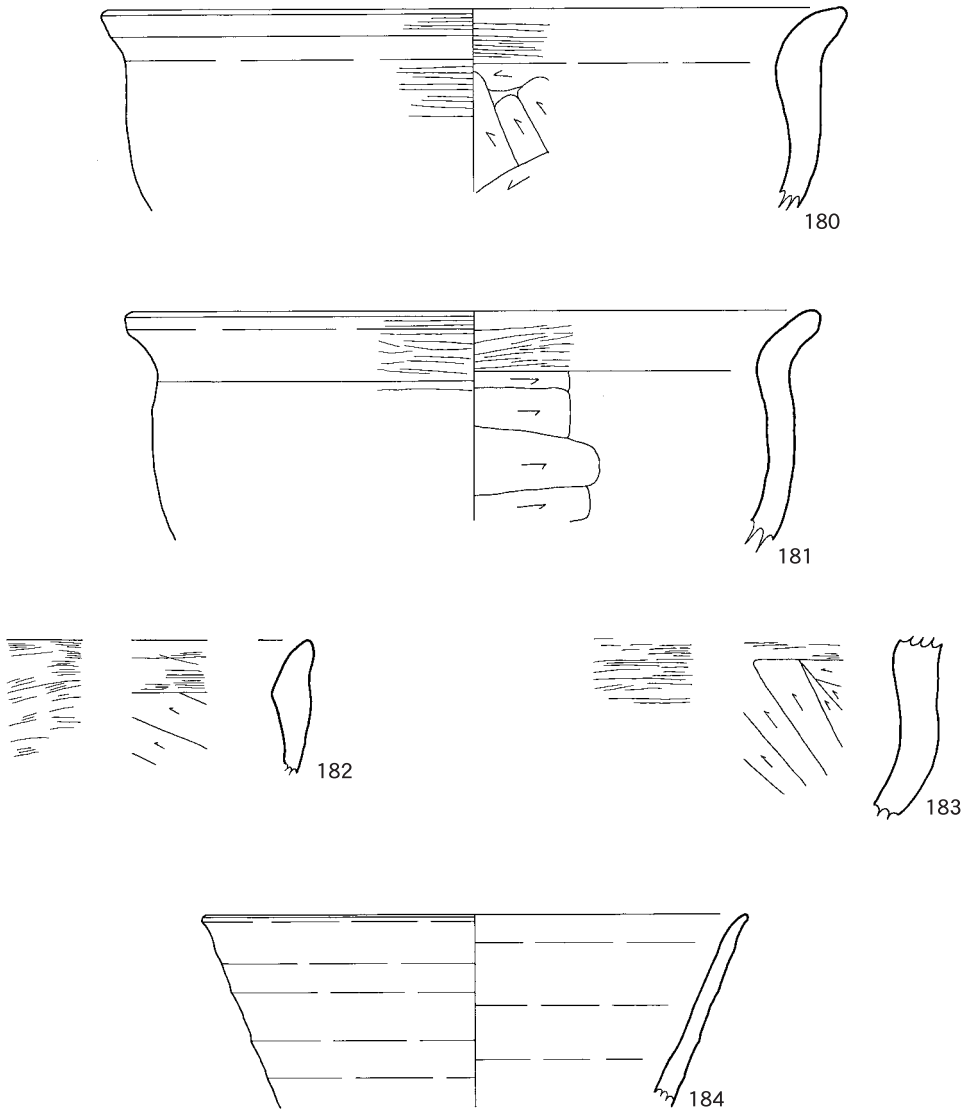
胴部が丸みを帯びながら膨らみ，頸部で内湾し，口縁部が「く」の字に外反するものである。頸部内面には明瞭な稜線が残っており，器壁は口縁部から胴部までほぼ同じ厚さと推定される。口唇部はともに細く丸まっている。調整は外面が横位のナデ調整，内面は稜線より上部ではナデ調整，下部ではケズリが施されている。

Ⅲ類（190～192）

胴部が丸みを帯びながら膨らみ，頸部で内湾し，口縁部が「く」の字に外反するもので，頸部内面に明瞭な稜線がないものである。190は口唇部が三角状を呈し，外面が横位のナデ調整，内面が口縁部から頸部にかけてナデ調整，胴部は縦位のケズリが施されている。内外面とも丁寧な調整が施されており，焼成も良好である。191は口唇部が平たくなっており，192は丸まっ

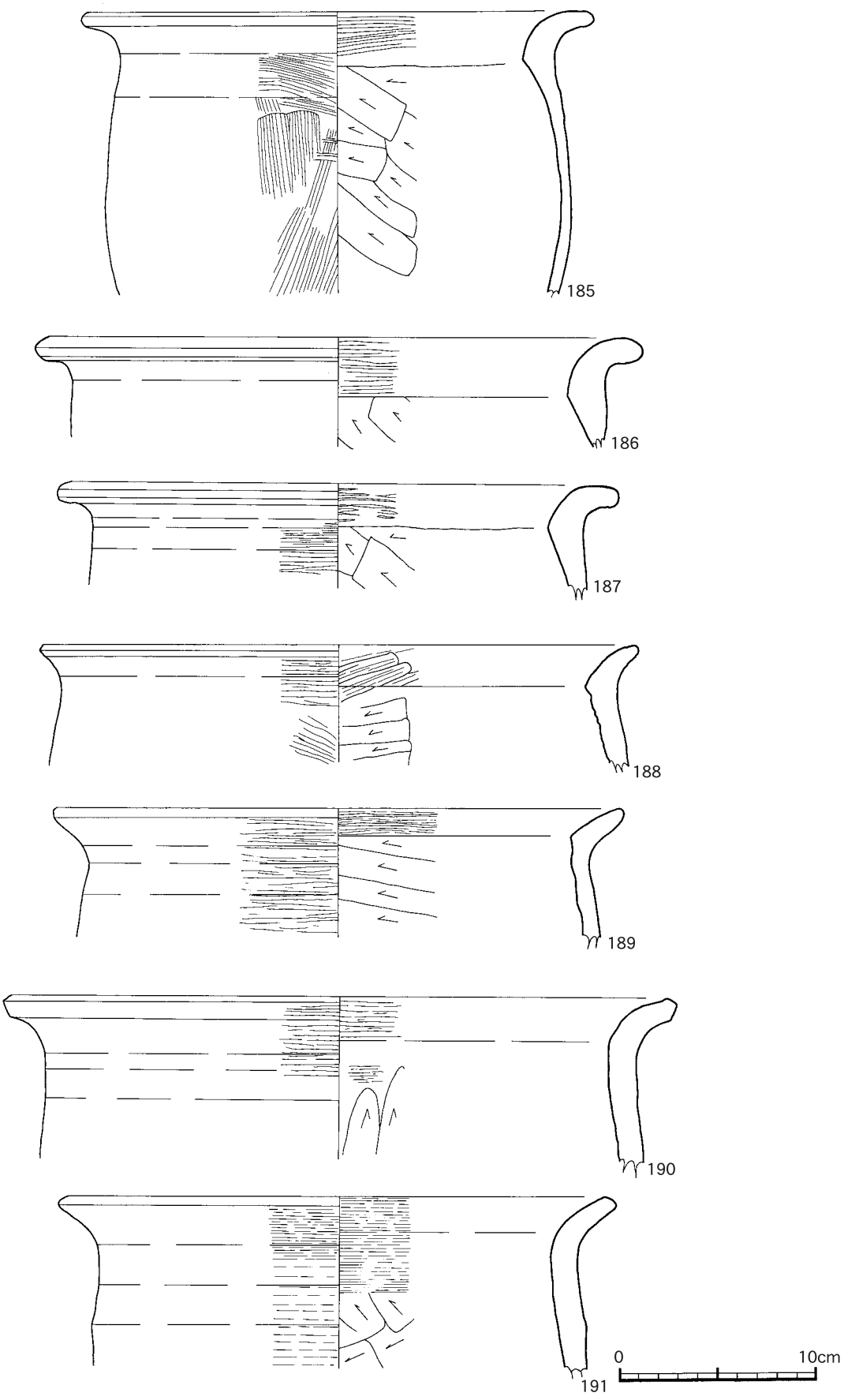


土師器（皿）



土師器（鉢）

第27図　土師器（皿・鉢）



第28図　土師器（甕Ⅰ）

ている。ともに調整は外面がナデ，内面は口縁部から頸部までナデ調整，胴部は斜位のケズリが施されている。

Ⅳ類（193～197）

胴部が頸部まで直線的に伸び，口縁部で外反するものである。比較的胴部が長くなると推定される。193は口縁部が逆Ｌ字状に外反するもので，口唇部が丸まるものである。器壁が胴部中位で若干薄くなると推定される。調整は外面がナデ調整，内面が胴部上位にある稜線より上がナデ調整，下が斜位のケズリを施している。194～196は口縁部が「く」の字に外反するものである。いずれも頸部内面に明瞭な稜線がないものである。器壁は口縁部から胴部までほぼ同じ厚さであり，口唇部は194は丸まっており，195・196は三角状を呈している。調整は外面がナデ調整，内面がケズリが施されているが，196の内面はケズリの後，ナデ調整が施されている。197は口縁部が逆Ｌ字に外反するものである。胴径が小さく，比較的胴部が短いものと推定される。そのため，Ⅶ類に分類される可能性も考えられる。調整は外面がナデ調整，内面は胴部上位から口縁部にかけてナデ調整が施され，胴部は斜位のケズリが施されている。口唇端部もナデ調整が施され，平坦面が作り出されている。

Ⅴ類（198・199）

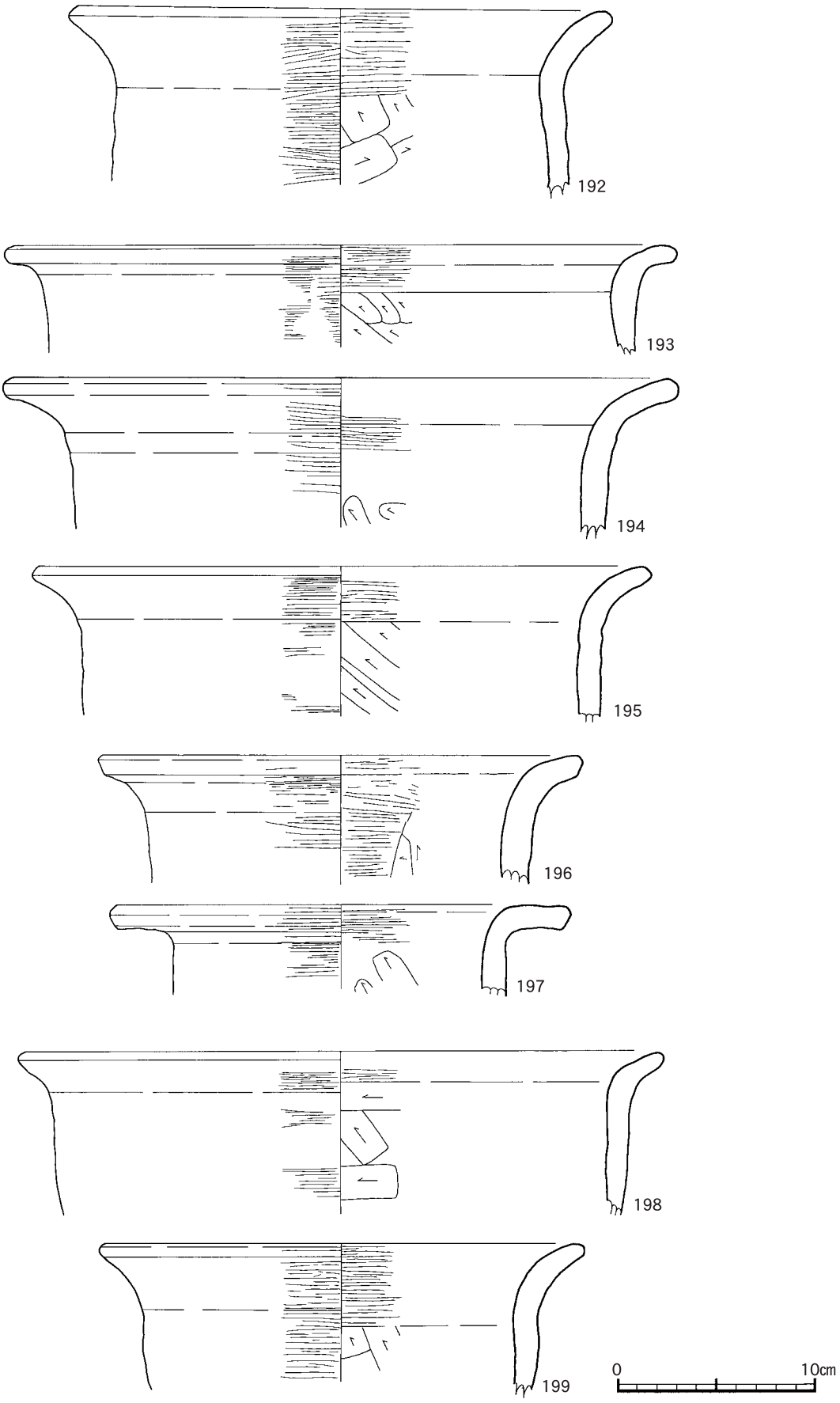
胴部が僅かに開きながら伸び，胴部上位で開きが止まり頸部まで真っ直ぐに伸び，口縁部で外反するものである。いずれも口唇部は丸まっており，調整は外面が横位のナデ調整，内面は口縁部がナデ調整，胴部はケズリが施されている。198は摩滅が激しい。

Ⅵ類（200～203）

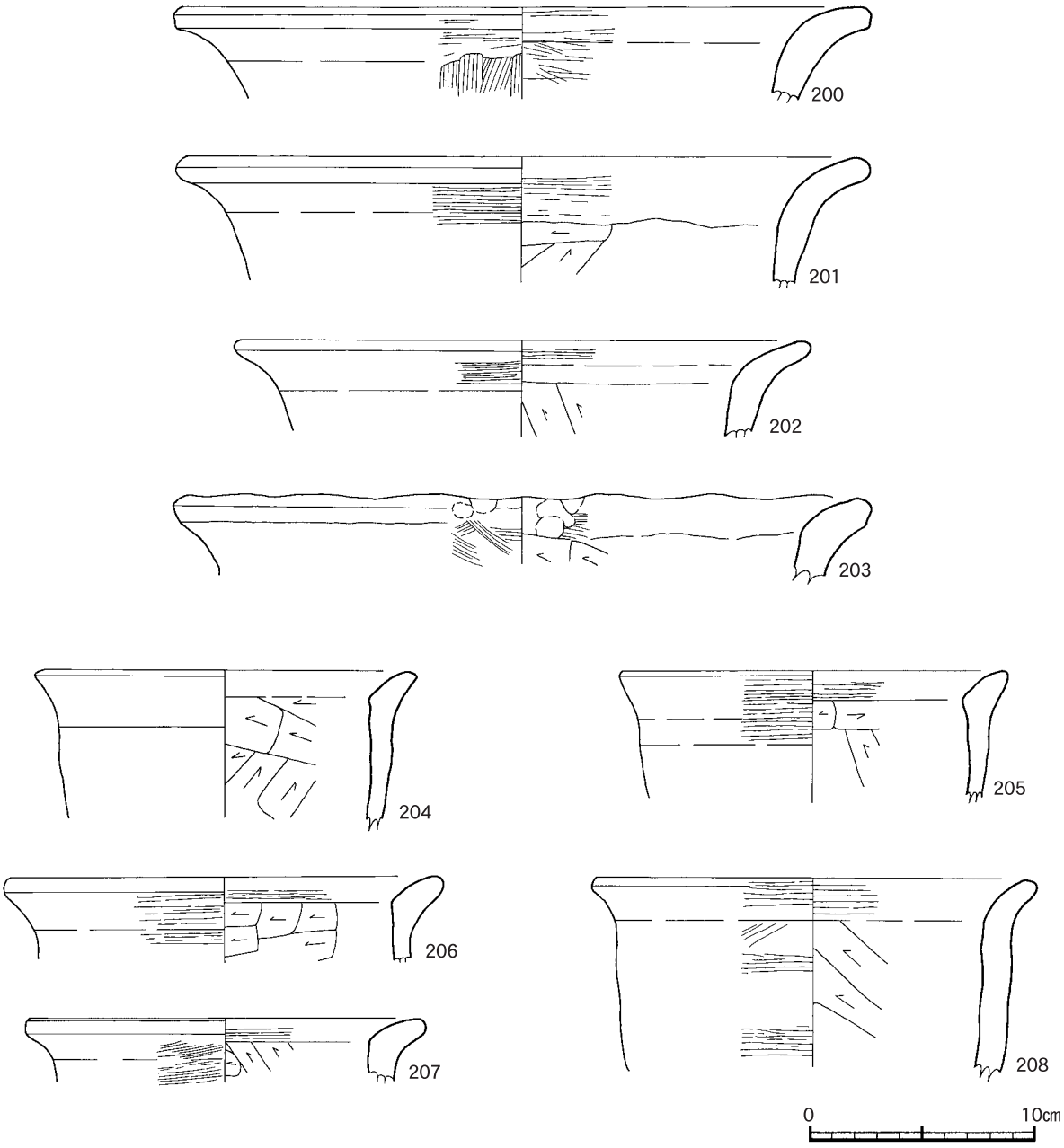
胴部が開きながら伸び，口縁部で外反するものである。口縁部が短く，また胴部も比較的短くなるものと推定される。200は頸部外面にハケ目が残り，内面にはケズリを施した後，ナデによる調整が施されている。口唇端部はナデ調整が施され，平坦面が作り出されている。201・202は口唇部が丸まるものである。ともに頸部内面に明瞭な稜線がみられ，外面は横位のナデ調整，内面は稜線より上部はナデ調整，下部はケズリが施されている。203は口縁部をナデによる調整を施した後，指頭によって再度調整されたと思われ，口縁部から口唇部にかけて凸凹している。調整は粗雑であるが，焼成は良好である。

Ⅶ類（204～208）

口径が20㎝以下で，比較的小型の甕と推定されるものである。204～207は口縁部が短く，若干外反するもので，頸部内面の稜線が明瞭に残るものである。器壁は胴部が薄くなると推定される。いずれも外面はナデ調整，内面は稜線より上部はナデ調整，下部はケズリが施されている。204・205は口唇端部が薄く尖っている。206・207は口唇端部が丸まっているものである。208は頸部内面の稜線が明確ではなく，器壁も口縁部から胴部までほぼ同じ厚さのものである。調整は外面がナデ調整，内面はケズリが施されている。外面全体に煤が付着している。



第29図　土師器（甕Ⅱ）



第30図　土師器（甕Ⅲ）

第６表　古代遺物（土師器）観察表Ⅰ

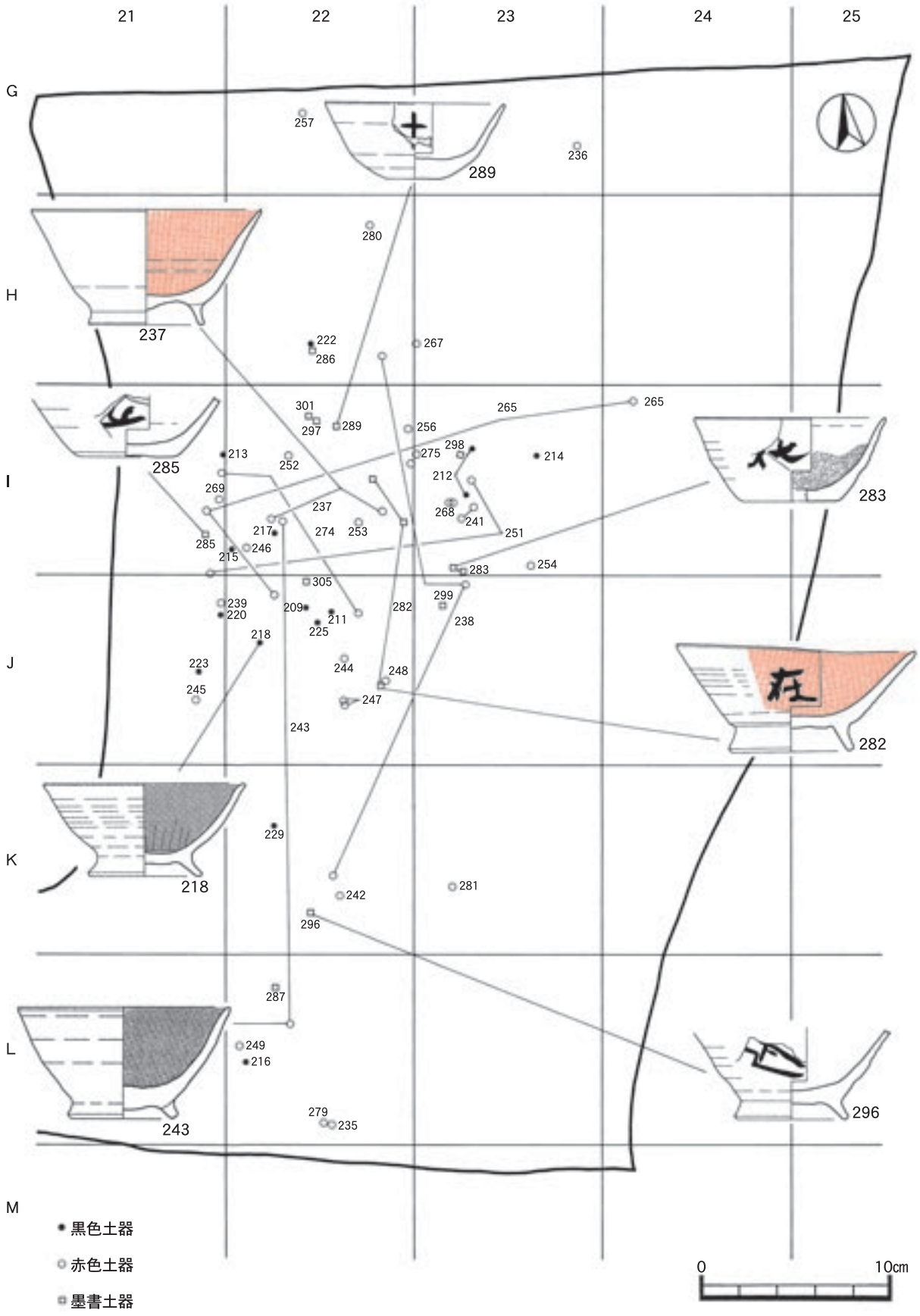
番号	区	層	標高(m)	注記番号	器種	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎　土	口径	器高	底径	高台高	備考	挿図
83	I22	Ⅲa	107.780	499	坏	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	長石，輝石	14.6	5.8	6.6	－		23
84	J22	Ⅲa	107.040	79	坏	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石	14.6	5.4	6.5	－		23
85	I22	Ⅲa	107.650	527他	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(4.3)	6.6	－		23
86	－	表	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(3.3)	6.8	－		23
87	I23	Ⅲa	107.390	492	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(2.5)	7.0	－		23
88	J23	Ⅲa	107.340	635	坏	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石	12.2	5.2	6.0	－		23
89	H23	Ⅱ	106.839	22	坏	黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	12.4	5.0	6.2	－		23
90	H23	Ⅲa	106.730	64	坏	橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	輝石，茶粒	12.6	5.2	6.0	－		23

第７表　古代遺物（土師器）観察表Ⅱ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	器種	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎　土	口径	器高	底径	高台高	備考	挿図
91	I22	Ⅲa	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英，角閃石	－	(4.6)	5.5	－		23
92	I23	Ⅲa	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	石英	－	(3.6)	6.0	－		23
93	I23	Ⅲa	107.225	613	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英，輝石	－	(2.8)	6.2	－		23
94	I23	Ⅲa	107.270	614	坏	橙色	橙色	ナデ	ナデ	長石	12.2	4.8	6.7	－		23
95	I23	Ⅲa	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	石英，茶粒	－	(3.2)	7.2	－		23
96	J23	Ⅲa	－	－	坏	明黄褐色	明黄褐色	ナデ，ケズリ	ナデ	輝石	－	(3.8)	5.7	－		23
97	J22他	Ⅱ	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(4.0)	6.0	－		23
98	H22	Ⅲa	106.857	48	坏	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	輝石	－	(3.2)	6.2	－		23
99	K23他	Ⅲa	109.670	221他	坏	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	12.2	4.9	5.3	－		23
100	－	－	－	－	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(3.1)	7.0	－		23
101	J22	Ⅱ	108.335	487	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(2.6)	5.0	－	外面煤付着	23
102	I22	Ⅱ	107.400	430	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.4)	7.0	－		23
103	H22他	Ⅱ	106.770	75他	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英，茶粒	12.6	4.9	6.3	－		23
104	I22他	Ⅲa	107.175	592他	坏	浅黄橙色	橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	茶粒	13.0	4.9	6.4	－		23
105	I23他	Ⅲa	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	石英，輝石	－	(4.7)	5.4	－		23
106	H22	Ⅱ	107.279	42	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	石英	－	(3.6)	6.6	－		23
107	I23	Ⅲa	－	－	坏	浅黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	石英	－	(2.3)	7.0	－		24
108	K22	Ⅱ	108.505	488	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	長石	－	(1.9)	7.0	－		24
109	I23	Ⅱ	107.407	398	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(1.7)	6.8	－		24
110	I22	Ⅱ	－	－	坏	浅黄橙色	褐灰色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.1)	6.8	－		24
111	H23	Ⅲa	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(1.7)	6.2	－		24
112	I23	Ⅱ	107.164	20	坏	浅黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	長石	－	(1.9)	6.2	－		24
113	I22	Ⅲa	107.120	603	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	長石	－	(2.6)	6.4	－		24
114	H23	Ⅲa	106.865	72	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	茶粒	－	(2.1)	6.0	－		24
115	I23	Ⅲa	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(1.8)	5.8	－		24
116	J22	Ⅲa	107.490	555	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英，角閃石	－	(1.2)	5.0	－		24
117	I23	Ⅲa	107.235	568	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(1.6)	5.6	－		24
118	H22	Ⅱ	106.964	40	坏	浅黄橙色	褐灰色	ナデ	ナデ	輝石	－	(2.5)	7.0	－		24
119	J22	Ⅱ	107.910	451	坏	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	石英，輝石	－	(1.9)	7.0	－		24
120	J23	Ⅲa	107.655	474他	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石	－	(2.2)	6.4	－		24
121	－	Ⅲa	－	－	坏	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	－	(1.6)	6.4	－		24
122	J23	Ⅲa	107.860	486	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	－	(2.1)	5.7	－		24
123	I22	Ⅱ	－	－	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英，角閃石	－	(1.8)	5.4	－		24
124	I22	Ⅲa	106.985	71	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ，ケズリ	ナデ	輝石	－	(2.3)	6.0	－		24
125	I22	Ⅱ	－	－	坏	浅黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(1.5)	5.7	－		24
126	I22	Ⅲa	107.190	579	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.1)	5.4	－		24
127	I22	Ⅱ	107.877	302	坏	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	長石	－	(1.8)	5.2	－		24
128	H22	Ⅲa	107.015	59	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(1.5)	4.1	－		24
129	I23	Ⅲa	107.080	607	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.3)	5.4	－		24
130	I23	Ⅲa	107.410	493	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.0)	6.0	－		24
131	I22	Ⅱ	－	－	坏	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	石英	－	(1.8)	4.8	－		24
132	H･I22	Ⅲa	107.100	605他	椀	橙色	橙色	ナデ	ナデ	茶粒	14.7	6.6	8.0	0.9		25
133	J23	Ⅲa	107.560	542	椀	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ	赤色粒	－	(3.3)	7.6	1.1		25
134	L22	Ⅲa	109.570	165	椀	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	－	(5.0)	6.6	1.2		25
135	G23	Ⅱ	106.456	9	椀	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ	茶粒	－	(3.2)	6.4	0.9		25
136	J23	Ⅲa	107.630	478	椀	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	茶粒	12.5	5.9	6.9	1.2	外面煤付着	25
137	J23	Ⅱ	107.565	476他	椀	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	石英	12.4	5.5	6.2	0.9		25
138	I23	Ⅲa	－	－	椀	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ	ナデ	石英，輝石	18.2	(6.1)	－	－		25
139	J22	Ⅱ	－	－	椀	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(4.2)	6.8	1.0		25
140	H22	Ⅱ	106.954	30	椀	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	長石	12.7	5.8	6.4	1.3		25
141	H23	Ⅱ	107.164	19	椀	淡橙色	淡橙色	ナデ	ナデ	茶粒	13.3	5.7	7.2	1.1		25
142	G22	Ⅲa	106.251	4	椀	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	石英，輝石	13.2	6.1	7.8	1.0	完形	25
143	J22	Ⅱ	107.790	450	椀	橙色	橙色	ナデ	ナデ	石英	13.2	5.6	6.4	1.1		25
144	I･L21	Ⅱ	109.885	104	椀	橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ	長石	－	(3.6)	6.8	1.3		25
145	－	Ⅱ	－	－	椀	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	輝石	－	(2.5)	－	－		25
146	K22	Ⅲa	108.110	536	椀	赤褐色	黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.8)	6.4	1.3		25
147	－	Ⅱ	－	－	椀	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	角閃石	－	(1.8)	7.8	0.9		25
148	J21	Ⅱ	108.377	391	椀	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.2)	6.4	1.2		25

第８表　古代遺物（土師器）観察表Ⅲ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	器種	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎　土	口径	器高	底径	高台高	備考	挿図
149	I22	Ⅱ	107.550	429	埦	橙色	橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.0)	6.2	1.0		25
150	H22	Ⅱ	106.994	29	埦	橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ	石英	－	(1.9)	7.4	1.1		25
151	G22	Ⅱ	106.381	10	埦	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	輝石	－	(2.4)	6.6	1.0		25
152	J22	Ⅲa	－	－	埦	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	－	(2.4)	7.6	0.9		25
153	－	Ⅱ	－	－	埦	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	輝石	－	(1.8)	7.4	1.0		25
154	H23	Ⅱ	106.771	7	埦	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	石英	－	(2.0)	7.6	1.2		25
155	J21	Ⅱ	108.397	392	埦	褐灰色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	石英	－	(3.2)	6.2	0.6	充実高台	25
156	J21	Ⅱ	108.667	344他	埦	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	長石	－	(2.0)	5.8	0.8	充実高台	25
157	J22	Ⅱ	108.317	390	埦	淡灰色	淡黄褐色	ナデ	ナデ	輝石	－	(1.7)	6.8	0.6	充実高台	25
158	I22	Ⅱ	107.320	432	埦	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	長石	－	(2.0)	5.8	0.8	充実高台	25
159	L23	Ⅲa	109.240	177他	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石	15.8	(4.4)	－	－		26
160	I22	Ⅲa	107.540	521	坏か埦	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	茶粒	13.6	(3.0)	－	－		26
161	J22	Ⅲa	107.725	512	坏か埦	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	長石	13.6	(5.0)	－	－		26
162	K22	Ⅲa	－	－	坏か埦	淡橙色	淡橙色	ナデ	ナデ	長石	13.2	(3.9)	－	－		26
163	J22	Ⅲa	107.780	503	坏か埦	橙色	橙色	ナデ	ナデ	石英	13.0	(3.3)	－	－		26
164	H22	Ⅱ	106.932	53	坏か埦	橙色	橙色	ナデ	ナデ	輝石	12.2	(2.8)	－	－	口縁部煤付着	26
165	I22	Ⅲa	107.750	504	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	12.4	(4.0)	－	－		26
166	L22	Ⅲa	－	－	坏か埦	浅黄色	浅黄色	ナデ	ナデ	石英	12.4	(3.7)	－	－		26
167	K22	Ⅲa	－	－	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	12.4	(3.6)	－	－		26
168	K23	Ⅱ	108.950	175	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石	14.0	(4.2)	－	－		26
169	J22	Ⅱ	－	－	坏か埦	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	14.0	(3.7)	－	－		26
170	I22	Ⅲa	－	－	坏か埦	橙色	橙色	ナデ	ナデ	茶粒	13.2	(4.1)	－	－		26
171	I22	Ⅲa	107.200	601	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	13.0	(4.4)	－	－		26
172	J24	Ⅱ	108.077	320	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	12.8	(4.7)	－	－		26
173	I23	Ⅲa	－	－	坏か埦	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	12.1	(3.2)	－	－		26
174	J22	Ⅲa	－	－	坏か埦	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	12.6	(3.4)	－	－		26
175	I22	Ⅲa	－	－	坏か埦	明黄褐色	黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	10.6	(2.7)	－	－	口縁部煤付着	26
176	K22	Ⅲa	－	－	坏か埦	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ	石英	8.8	(4.4)	－	－	口縁部煤付着	26
177	I22･23	Ⅲa	107.100	591	Ⅲ	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	14.0	(3.4)	8.0	1.0		27
178	－	表	－	－	Ⅲ	灰黄色	灰黄色	ナデ	ナデ	角閃石	19.0	(3.3)	－	－		27
179	J22	Ⅲa	107.475	547	Ⅲ	淡橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	16.8	(3.8)	－	－		27
180	I22	Ⅲa	－	－	鉢	赤褐色	暗褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，角閃石	29.8	(8.0)	－	－		27
181	J22	Ⅲa	108.020	502	鉢	暗赤褐色	暗褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，角閃石	27.8	(9.2)	－	－		27
182	J23	Ⅱ	107.655	479	鉢	赤褐色	暗褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，長石	－	(5.3)	－	－		27
183	J23	Ⅲa	107.450	644	鉢	暗赤褐色	褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	輝石，茶粒	－	(7.0)	－	－		27
184	K22	Ⅲa	109.830	210	鉢	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	長石	21.8	(7.8)	－	－		27
185	G22	Ⅱ	106.476	2	甕	黒褐色	黒褐色	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	石英，輝石	25.9	(14.4)	－	－		28
186	H23	Ⅲa	－	－	甕	褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，輝石	30.6	(5.2)	－	－		28
187	－	Ⅱ	－	－	甕	赤褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，輝石	28.4	(5.4)	－	－	外面煤付着	28
188	J･K22	Ⅱ	109.020	174他	甕	橙色	灰褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，長石	30.2	(6.2)	－	－		28
189	I23	Ⅲa	－	－	甕	赤褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	輝石，長石	28.8	(6.6)	－	－		28
190	J21	Ⅱ	108.727	280他	甕	明褐色	灰黄褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	角閃石，石英	34.0	(8.3)	－	－		28
191	I22	Ⅱ	－	－	甕	灰褐色	にぶい橙色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，長石	28.4	(8.7)	－	－		28
192	K･J22	Ⅲa	108.350	578他	甕	明褐色	灰黄褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，角閃石	27.4	(8.9)	－	－		29
193	H22	Ⅱ	－	－	甕	黒褐色	黒褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，輝石	33.8	(5.5)	－	－	煤付着	29
194	J23	Ⅲa	107.450	632	甕	赤褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，輝石	34.0	(8.0)	－	－		29
195	K22他	Ⅲa	－	－	甕	橙色	橙色	ナデ	ケズリ・ナデ	角閃石，長石	31.2	(7.6)	－	－		29
196	I23	Ⅲa	107.367	341	甕	褐色	灰黄褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	角閃石，長石	24.4	(6.5)	－	－		29
197	I23	Ⅲa	107.070	646	甕	暗赤褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，輝石	21.6	(4.7)	－	－		29
198	J23	Ⅲa	106.625	639	甕	明黄褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英	32.4	(8.0)	－	－		29
199	I23	Ⅲa	107.455	559	甕	明赤褐色	明褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，茶粒	24.4	(7.5)	－	－		29
200	I23	Ⅲa	－	－	甕	赤褐色	赤褐色	ハケ・ナデ	ナデ	輝石	30.8	(4.1)	－	－		30
201	H22	Ⅲa	106.764	24	甕	黒褐色	灰褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，角閃石	30.8	(5.6)	－	－		30
202	I23	Ⅲa	107.545	541	甕	赤褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英，輝石	25.4	(4.3)	－	－		30
203	I23	Ⅲa	－	－	甕	赤褐色	黄褐色	ナデ・指頭	ケズリ・指頭	角閃石，輝石	31.0	(3.5)	－	－		30
204	J21	Ⅲa	108.552	394	小甕	暗褐色	赤褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	輝石，長石	16.8	(6.6)	－	－		30
205	I23	Ⅲa	107.297	374	小甕	赤褐色	黒褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	石英	17.3	(4.8)	－	－		30
206	－	Ⅱ	－	－	小甕	黒褐色	黒褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	角閃石，軽石	19.6	(3.8)	－	－		30
207	I22	Ⅱ	－	－	小甕	赤褐色	黒褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	輝石，長石	17.6	(2.8)	－	－		30
208	G22	Ⅱ	106.296	11	小甕	黒褐色	黒褐色	ナデ	ケズリ・ナデ	角閃石，輝石	19.6	(8.5)	－	－	外面煤付着	30



第31図　遺物出土状況（黒色・赤色・墨書土器）

⑦　黒色土器（第32図）

黒色土器は，坏，埦が出土したが，出土数は少ない。また，内外面黒色化した黒色土器Ｂ類はなく，内面のみ黒色化した黒色土器Ａ類のみ出土した。出土状況は，Ⅰ・Ｊ－22区に最も集中している。

黒色土器Ａ類　坏（209・210）

209は円盤状の底部を有するもので，体部が丸みをもつものである。底部の切り離しは回転ヘラ切りで，その後ナデ調整が施されている。内面には横位のミガキが施されている。210は平底の坏である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。内面には横位のミガキが施されているが，全体的に摩滅が激しく，明瞭には残っていない。

黒色土器Ａ類　**埦**（211～223）

Ⅰ類（211～217）

体部が直線的に伸びるものである。211～216は底部の器壁が薄いものである。211・212は体部下端に高台貼り付け後のナデ調整によって段がついている。211は内面に放射状のミガキと，上部に横位のミガキが施されている。212は内面に放射状のミガキと体部下部に横位のミガキが施されている。高台は短く，高台端部は丁寧に平坦面が作り出されている。213は内面のミガキの方向は不明であるが，体部の調整及び高台の貼り付け，高台の調整など丁寧に施されている。高台は長く，高台端部は平たくなっている。214・216は内面の色調が黄灰色を呈しており，完全に黒色燻焼したものではないと推定される。214は体部及び高台など丁寧に調整されており，高台は長く，高台端部は丁寧に平坦面を作り出している。215は内面に横位のミガキが施されている。高台はほとんど残存しておらず，形態は不明である。底部外面には，墨の付着があるが，文字ではない。筆置きあるいは筆先を整える際に使ったものとも推定されるが，詳細は不明である。217は底部の器壁が薄いものである。内面には放射状のミガキが施されている。高台は長く，ハの字状に大きく開いている。高台端部は丁寧に平坦面を作り出している。

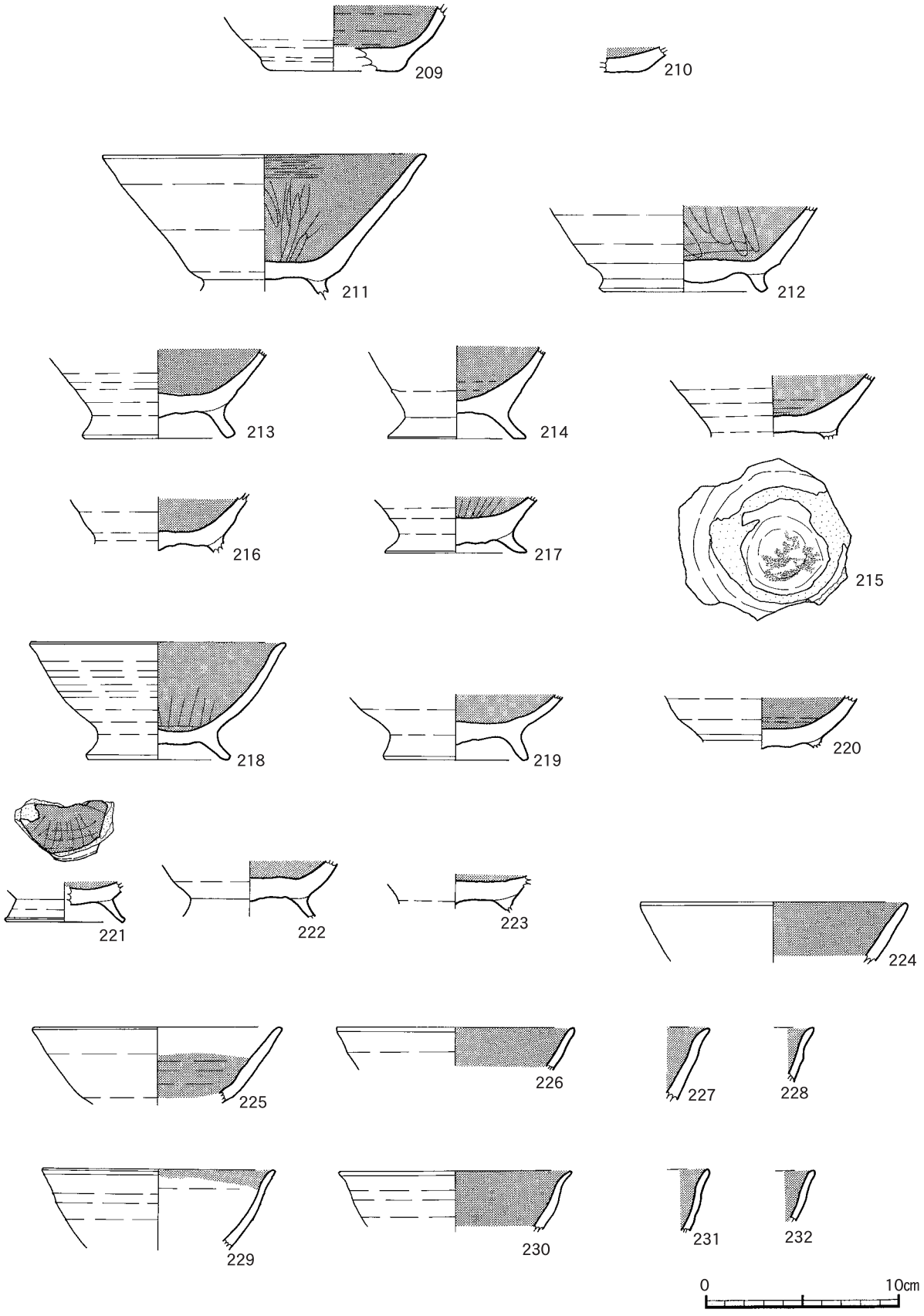
Ⅱ類（218～220）

体部が丸みをもつものである。218は体部が丸みをもち，口縁部が若干外反するものである。内面には放射状のミガキが施され，体部外面には回転台を使った横位のナデ調整痕が段々に残っている。高台はハの字状に開き，高台端部は丸まっている。219は内面に放射状のミガキが施されている。高台の貼り付け及び高台の調整はとても丁寧で，焼成も良好である。高台端部は丸まっている。220は内面に放射状のミガキと横位のミガキが施されている。とても丁寧に磨かれており，光沢がある。精選された粘土が使われており，焼成も良好で堅く締まっている。

底部（221～223）

Ⅰ類及びⅡ類の底部と考えられるが，体部が欠損しており，その形態は不明であるため，底部としてまとめた。

221は底部や高台の器壁が薄く，内面には放射状のミガキが施されている。222・223は残存部が少なく，体部及び高台の形状は不明である。ともに摩滅が激しい。


209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
0
10cm

第32図　黒色土器

黒色土器Ａ類　坏・**埦**の口縁部（224～232）

224～232は残存部が体部から口縁部のみであるため，器種は不明である。体部の形態から大きく２種類に分けることができる。

224～228は体部が直線的に伸びるものである。225は内面が体部上部及び口縁部は黒色に変色しておらず，外面と同じ淡黄色を呈している。黒色燻焼がここまで及ばなかったものと推定されるが，どのような焼成が行われたのかは不明である。227・228は口縁部が若干外反するものである。228は他と比較して，器壁が薄い。

229～232は体部が丸みをもつもので，口縁部が若干外反するものである。229は内面が口縁部のみ黒色を呈し，体部は黄灰色を呈している。口縁部は黒色燻焼が進んだものの，体部まではうまく進まなかったと推定される。230は内面にミガキが施されているが，その方向は調整痕が明瞭ではないため不明である。

⑧　赤色土器（第33・34図）

本遺跡で出土した古代の土師器（坏・埦・皿）のうち，約23％が赤色土器である。他の遺跡と比較して，赤色土器の割合が多いことが特徴として挙げられる。また，煤が付着しているものが７点あり，そのうち口縁部に付着し，灯明の可能性が考えられるものが４点あったことも特徴として挙げられる。器種としては坏・埦・鉢が出土した。出土状況は，他の土師器と同様にⅠ・Ｊ－22・23区に集中する傾向がみられた。内外面に赤色の顔料が塗布されているものが３点で，あとは全て内面のみ赤色の顔料が塗布されているいわゆる内赤土器であった。そのため，内外面赤色であるものを赤色土器，内面のみを内赤土器と分類し，さらにその中で細かく分類した。

赤色土器（233～235）

内外面に赤色の顔料が塗布されたものである。233・234は体部から口縁部しか残存しておらず，器種は不明である。ともに摩滅が激しく，234は内面の顔料がほとんど残っていない。235は埦であるが，残存部が少なく，体部や高台の形態は不明である。内面は割と鮮やかな赤褐色を呈しているが，外面は橙色を呈しており，内外面で色に差がある。

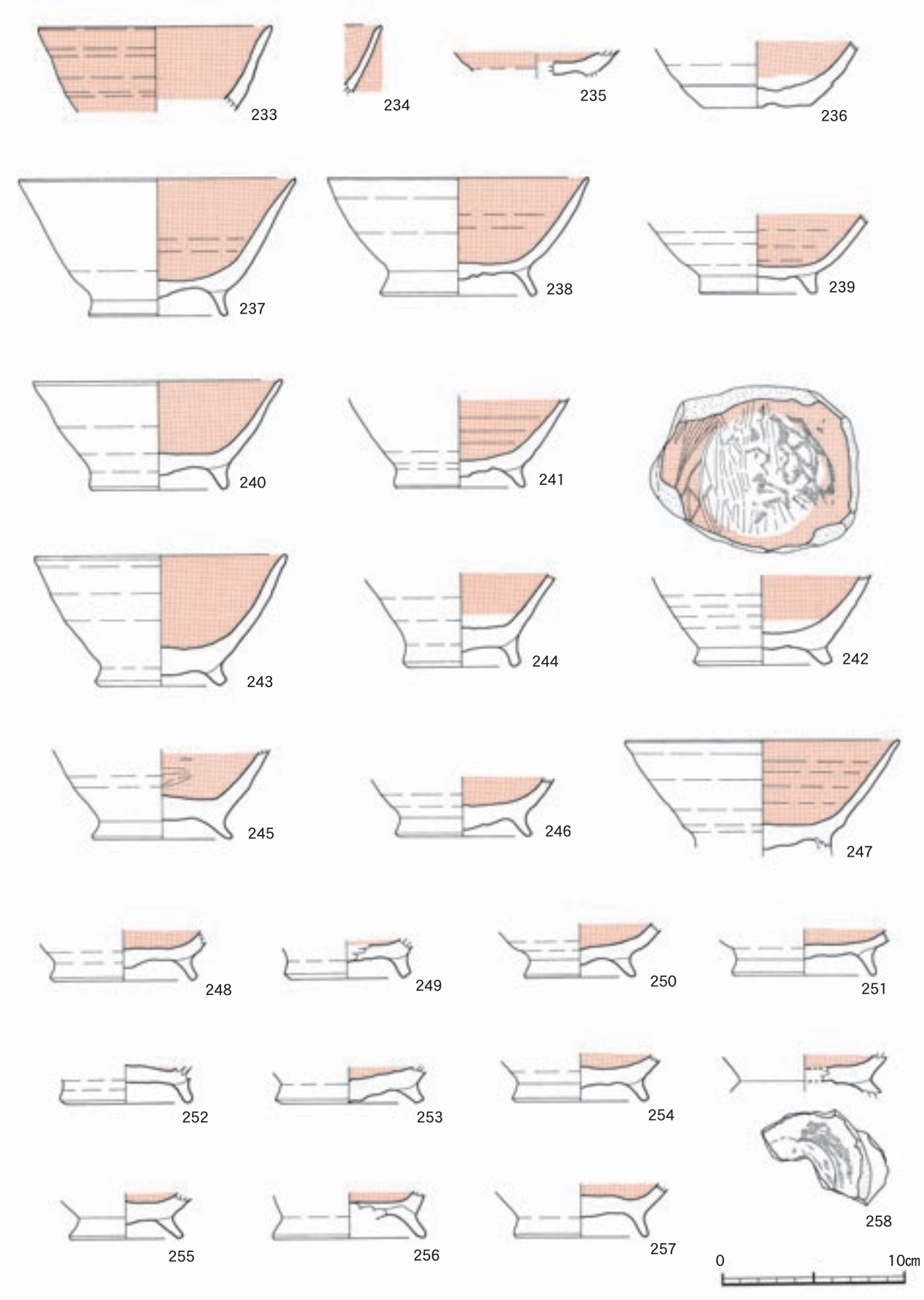
内赤土器　坏（236）

236は内赤土器の坏である。赤色の顔料は体部に塗布されており，底部に塗布されていない。回転ヘラ切りによる切り離しで，体部外面下部にはヘラケズリによって段が付けられている。

内赤土器　**埦**（237～257）

Ⅰ類（237～241）

体部が直線的に伸び，底部の器壁が薄いものである。237は体部が直線的に伸び，口縁部で若干外反する。高台の貼り付けが丁寧で高台と体部の境には明瞭な稜線が残る。高台端部は平たくなっている。238は体部が直線的に伸びるものの，外面は丸みをもつ。高台はハの字に開き，高台端部は平たくなっている。内面は鮮やかな赤褐色を呈している。239は高台があまり開かず，真っ直ぐ下に伸びる。高台端部は丁寧に平坦面を作り出している。242は底部内面には煤が付着しており，それを削り取るかのようにヘラ状工具によって削られた痕が残っている。


233
234
235
236
237
238
239
240
241
243
244
242
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
0
10cm

第33図　赤色土器Ⅰ

体部内面に顔料が塗布されているが，底部にはみられないため，煤を削り取る際に顔料も削られた可能性も考えられる。体部外面には回転台を使った横位のナデ調整痕が残り，高台と体部の境には明瞭な稜線が残る。高台は短く，高台端部は丁寧に平坦面を作り出している。240・241は高台端部が丸まっているものである。240は内面が赤色というよりもむしろ暗褐色に近い暗赤褐色を呈している。241は内面に回転台を使った横位のナデ調整痕が明瞭に残っているが，外面は摩滅が激しく，調整痕はほとんど残っていない。

Ⅱ類（243～247）

体部が直線的に伸び，底部の器壁が厚いものである。243・244は高台端部が平坦になっているものである。243は体部が若干丸みをもち，口縁部で多少外反するものである。高台は短く，ハの字状に開いている。244は体部が直線的に伸び，高台もあまり開かず，真っ直ぐに伸びるものである。高台と体部の貼り付けは丁寧なナデ調整が施されている。内面は摩滅が激しく，特に底部内面は摩滅のため顔料が残っていない。245・246は高台がハの字状に開き，高台端部が丸まるものである。245は内面に横位のミガキが施されており，色調は赤色というよりむしろ橙色に近い赤褐色である。外面は丁寧なナデ調整が施され，焼成も良好である。246は高台貼り付けの際のナデ調整によって段が付いている。全体的に摩滅が激しく，内面の顔料が削られている。247は体部が直線的に伸び，口縁部で若干外反するものである。高台貼り付けの際のナデ調整によって体部下端には段が付いている。高台は残存していないため，形状は不明である。

底部（248～258）

248～258は埦の底部である。Ⅰ類及びⅡ類の底部と推定されるが，体部が欠損しているため，形態は不明である。高台や底部の形態によって大きく２種類に分けることができる。

248～252は底部の器壁が薄いものである。248・249は高台端部に平坦面があるものである。248は高台貼り付けの際のナデ調整によって体部下端に段が付いている。249は若干高台が短いものである。摩滅が激しく，内面の顔料が所々剥がれ落ちている。250～252は高台端部が丸まるものである。250・251は高台貼り付けの際のナデ調整によって体部下端に段が付いている。252は高台が若干短いものである。

253～258は底部の器壁が厚いものである。253～255は高台端部に平坦面があるものである。253は高台が短く，厚いものである。内面の色調は褐色に近い明赤褐色を呈している。254・255は高台が長いものである。253の内面は，摩滅が激しく，顔料が剥がれ落ちているところが多い。254の内面は，鮮やかな赤褐色を呈している。256・257は高台端部が丸まるものである。ともに高台貼り付けの際のナデ調整が丁寧に施されており，高台から体部にかけての立ち上がりがなだらかになっている。258は高台残存部が少なく，その形状は不明である。体部と高台との境には明瞭な稜線が残る。内面はミガキが施されており，鮮やかな赤褐色を呈している。底部外面には黒色土器の215と同様に墨が付着しており，筆置きあるいは筆先を整えることに使った可能性も考えられるが，詳細は不明である。

内赤土器　坏・埦の口縁部（259～279）

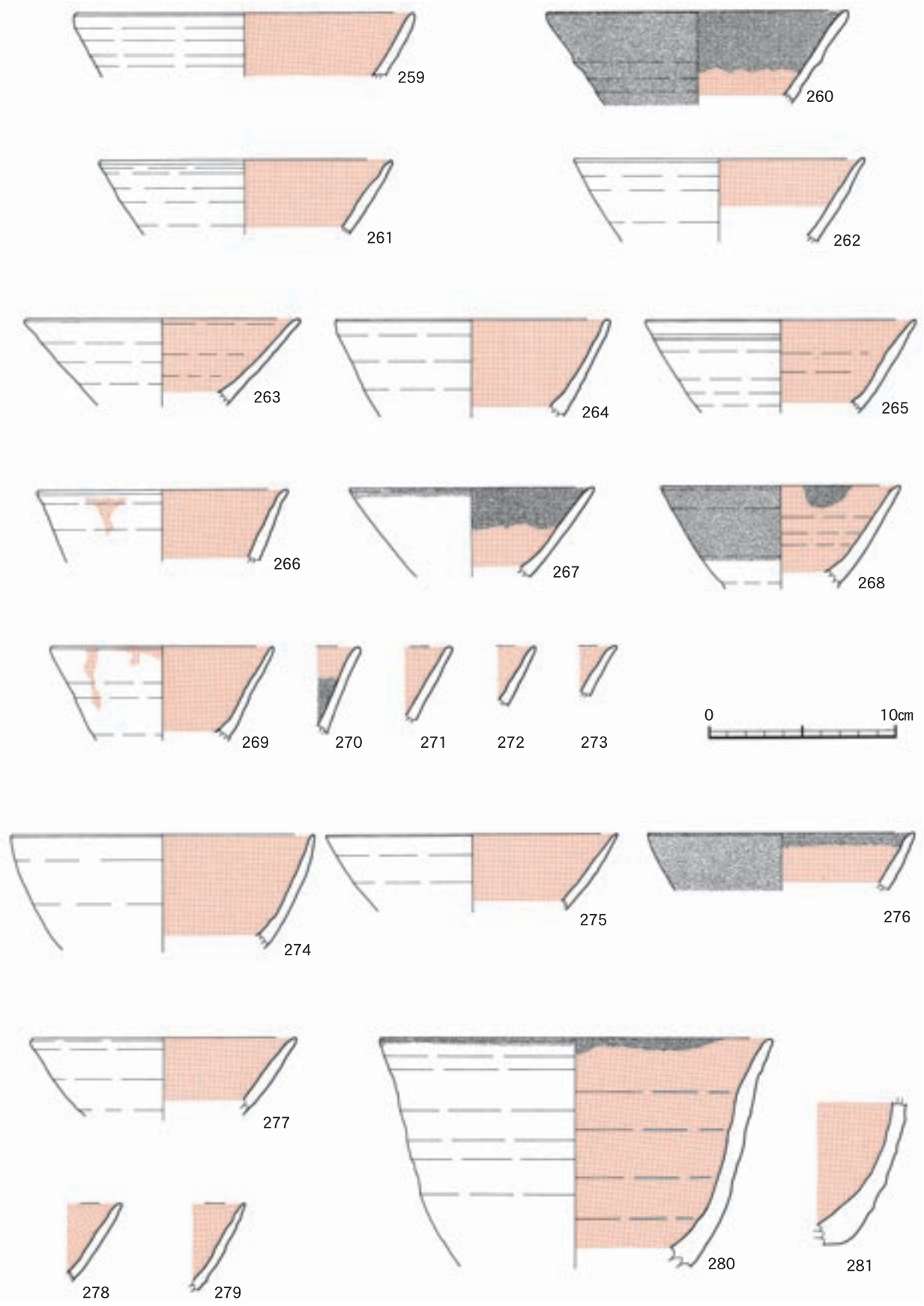
底部が残存していないため，坏あるいは埦といった器種の区別ができず，口縁部でまとめた。体部の形態などで大きく２種類に分けることができる。

259～273は体部が直線的に伸びるものである。259は口径が18.0㎝あり，本遺跡の坏・埦類の中では最も大きい部類に入る。体部の傾きなどから器高も高いものと推定される。260～262は口径が15.0㎝以上16.0㎝以下のものである。260は外面及び口縁部内面に煤が付着しており，灯明の可能性が考えられる。261・262は口径が15.4㎝のものである。ともに摩滅が激しく，特に262は体部内面下部は顔料が剥がれ落ちているものと思われる。263～265は口径が14.0㎝以上15.0㎝未満のものである。263は他と比較して体部が大きく外傾するものである。264は体部が直線的に伸び，口縁部が若干内湾するものである。丁寧にナデ調整が施されており，焼成も良好である。266・267は口径が13.0㎝以上14.0㎝未満のものである。266は体部が直線的に伸び，口縁部が若干外反するものである。摩滅が激しく，内面の顔料が剥がれ落ちているところが多い。267は体部が大きく外傾しながら直線的に伸びるものである。口縁部内外面に煤が付着しており，灯明の可能性が考えられる。268・269は口径が12.0㎝以上13.0㎝未満のものである。268は外面に口縁部から体部にかけて煤の付着があり，また口縁部内面にも煤の付着が見られることから，灯明の可能性が考えられる。内面の色調は赤色というよりは暗褐色に近い暗赤褐色を呈している。270・271は口唇部が丸まり厚みがあるものである。270の体部内面下部には煤が付着している。272・273は口唇部が薄く，三角状になっているものである。

274～279は体部が丸みをもつものである。274・275は口径が15.0㎝以上16.0㎝以下のものである。ともに口唇部が薄くなっており，内面は摩滅が激しく，顔料が剥がれ落ちている部分が多い。274は口縁部が若干内湾する。276・277は口径が14.0㎝以上15.0㎝未満のものである。ともに口唇部に厚みがある。276は口縁部の内外面に煤が付着しており，灯明の可能性が考えられる。278は口唇部に厚みがあるものであり，279は薄いものである。278は摩滅が激しく，外面の調整痕がほとんど残っていない。

内赤土器　鉢（280・281）

280は体部が直線的に伸び，口縁部で外反するものである。口縁部の内外面に煤が付着している。体部の内外面に横位のナデ調整痕が段々に残っている。焼成も良好である。281は体部が直線的に伸びるものである。体部内面には横位のミガキが施されている。


259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
0
10cm
274
275
276
277
278
279
280
281

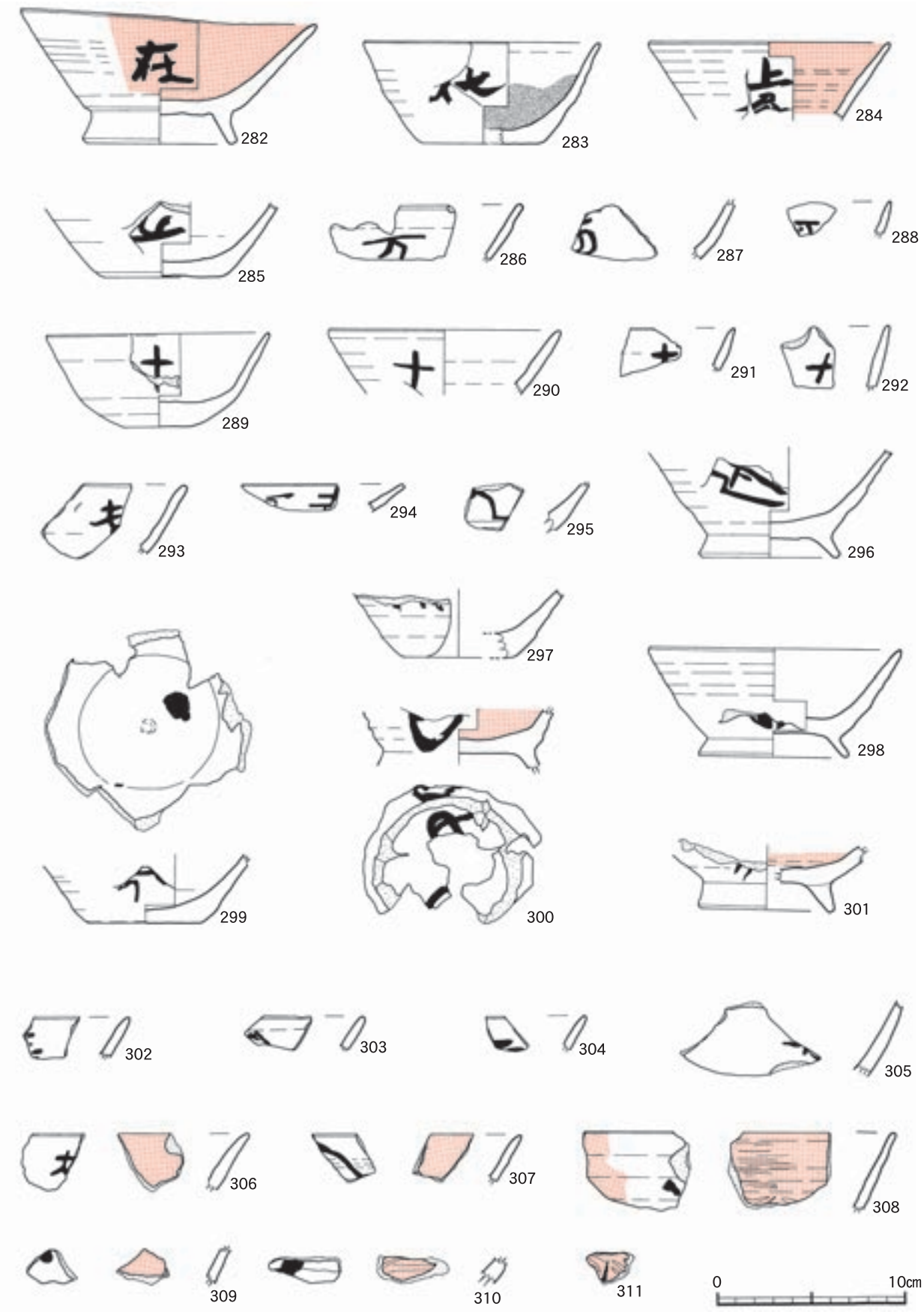
第34図　赤色土器Ⅱ

⑨　墨書土器（第35図）

墨書土器は全部で30点出土した。そのうち判読可能なものはあるが，ほぼ半数がとめ・はらいなど文字の一部であった。器種は坏・埦・皿等であった。文字・記載位置・記載方向など次の表でまとめた。判読については確実と言い切れないものに関しては「か」を付けている。

第９表　墨書土器一覧表

遺物番号	文　　字	記載位置	記載方向	器　　種
282	「在」	体部外面	正位置	赤色土器　埦
283	「在」か「代」か	体部外面	正位置	坏
284	「上□」「上屋」か	体部外面	正位置	内赤土器　坏か埦
285	「万」	体部外面	倒位置	坏
286	「万」	体部外面	正位置	坏か埦
287	「万」	体部外面	正位置	坏か埦
288	「万」か	体部外面	正位置	坏か埦
289	「十」	体部外面	正位置	坏
290	「十」	体部外面	正位置	坏か埦
291	「十」か	体部外面	正位置	坏か埦
292	「十」か「×」か	体部外面	倒位置？	坏か埦
293	「十万」か	体部外面	正位置	坏か埦
294	「万」か「十万」か	体部外面	正位置	皿
295	「乙」か	体部外面	倒位置	坏か埦
296	「込」か	体部外面	正位置	埦
297	不明	体部外面	不明	坏
298	不明	体部外面	不明	埦
299	不明	体部外面・底部内面	不明	坏
300	不明	体部外面・底部外面	不明	内赤土器　埦
301	不明	体部外面	不明	内赤土器　埦
302	不明	体部外面	不明	坏か埦
303	不明	体部外面	不明	坏か埦
304	不明	体部外面	不明	坏か埦
305	不明	体部外面	不明	坏か埦
306	「大」か「在」か	体部外面	正位置？	内赤土器　坏か埦
307	不明	体部外面	不明	内赤土器　坏か埦
308	不明	体部外面	不明	内赤土器　坏か埦
309	不明	体部外面	不明	内赤土器
310	不明	体部外面	不明	内赤土器
311	不明	体部内面	不明	内赤土器


282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
0
10cm

第35図　墨書土器

282は埦Ⅰa類である。「在」字は本遺跡の出土墨書の中では最も整った字形をしている。赤色土器で顔料の上に墨書されている。「在」の字は，鹿児島市西別府町の山ノ中遺跡から出土した土師器の坏の体部外面に正位置で「在」と書かれている例があり，本県では２例目となる。また，宮崎県宮崎市余り田遺跡でも土師器の底部外面に「在」とそれを囲む円が書かれている例がある。283は坏Ⅱa類である。「代」かあるいは「在」が出土しているため，「在」の可能性が考えられる。

284は「上」は判読できるものの，下部が欠損しているため，完全に判読できないが，「上屋」の可能性は考えられる。285は倒位置に「万」が墨書されている。「万」と判読できるもの，あるいは「万」の可能性が考えられるものに286・287・288があるが，いずれも正位置に墨書されている。285・286の字は横棒を長くしており，287・288は横棒が短い。「十」と判読できるもの，あるいは可能性が考えられるものは289・290・291・292がある。289・290はともに横棒が短く，縦棒が長い整った字形をしている。289は坏Ⅰa類である。292は「十」の可能性が考えられるが，下部が欠損しているため，明確ではない。205は「十」の可能性もあるが「×」の可能性も考えられる。293・294は「十」や「万」の字が出土しているため，「十万」の合わせ文字の可能性が考えられる。しかしながら，残存部が少なく，明確には判読できない。295は倒位置で「乙」の可能性が考えられるが，これも残存部が少ないため，明確には判読できない。296は埦Ⅰa類である。「込」の可能性が考えられるが，中に点があるため，明確ではない。記載方向については正位置だと思われる。306は内赤土器である。「大」の可能性や「在」の字が出土しているため，「在」の左半分の可能性も考えられるが，残存部が少ないため，明確に判読できない。

297～311は判読できなかったものである。297は坏Ⅰａ類である。文字の部分がほとんど欠損しているため，不明である。298は埦Ⅰa類である。297と同様不明である。299は坏Ⅰa類である。底部内面に墨が付着しているが，墨書ではなく，液だれによるものと思われる。300は体部外面及び底部外面にも墨書があるが，明確に判読できない。300・301及び307～311は内赤土器である。311は内面に墨書があり，顔料の上に墨書されている。302～311は小破片のため詳細は不明である。

記載位置について，ほとんどが体部外面に記載しており，内面は１点，底部外面も１点であった。記載方向については，不明なものを除くとほとんどが正位置であった。このことからほとんどが手に持って文字を記載したと推定される。また，器種ごとにみると，本遺跡では赤色土器の出土数が多いことが特徴であるが，全墨書土器のうち，約３割が赤色土器であることも特徴の一つであるといえる。

最後に文字の判読にあたって，ラ・サール学園の永山修一氏，国立歴史民俗博物館の平川南氏，宮崎産業経営大学の柴田博子氏に御教示いただいたことを付記しておく。

⑵　須恵器（第36～38図）

須恵器では，坏身・甕・壺が出土している。坏身は１点のみで，あとは甕・壺であった。古代の遺物で須恵器の割合は総出土数の僅か0.08％であった。

①　坏身（312）

312は円盤状の底部をもつ坏身である。体部は欠損しているため，形状は不明である。灰青色を呈し，硬質に焼成されている。

②　甕（313～327）

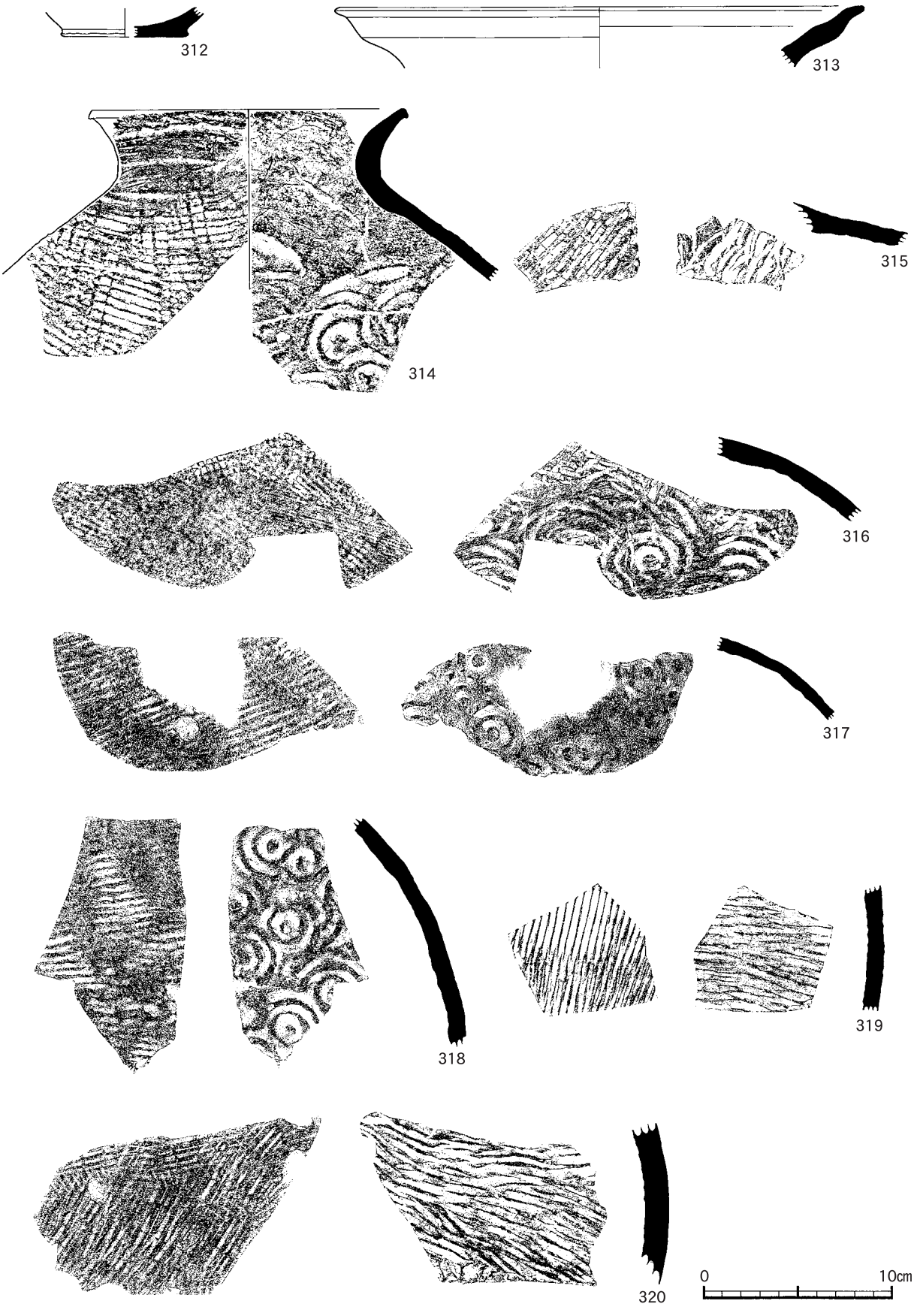
313は甕の口縁部である。頸部で大きく締まり，口縁部にかけて大きく外反するものである。口縁下部で若干屈曲した後，短く立ち上がるため，二重口縁のようになっている。314は肩部から頸部にかけて大きく締まり，口縁部で大きく外反するものである。外面は屈曲部より下部は格子状叩き，上部はナデ調整痕が残る。内面は屈曲部より下部は同心円状当て具痕，上部はナデ調整痕が残る。灰白色を呈し，軟質な焼成である。315～317は甕の肩部である。315は外面は格子状叩き，内面は平行状当て具痕がみられる。316は外面が格子状叩き，内面は同心円状当て具痕がみられる。外面に緑灰色の自然釉が掛かっている。317は外面が平行状叩き，内面は同心円状当て具痕がみられる。色調は内外面とも赤みを帯び，外面は暗赤褐色を呈している。318～327は甕の胴部である。318は外面が平行状叩き，内面は同心円状当て具痕がみられる。外面上部では暗赤褐色を呈し，下部では黒褐色を呈している。319～325は外面が平行状叩き，内面は平行状当て具痕がみられるものである。319・322は青灰色～暗青灰色を呈し，硬質な焼成である。320・321・324は浅黄褐色～淡灰黄色を呈し，軟質な焼成である。323・325は外面が暗赤褐色～褐色を呈しているが，焼成は極めて良好である。326・327は外面が格子状叩き，内面は平行状当て具痕がみられるものである。ともに外面には自然釉が掛かっており，黒褐色～暗赤褐色を呈している。内面は灰青色を呈し，硬質な焼成である。

③　壺（328～330）

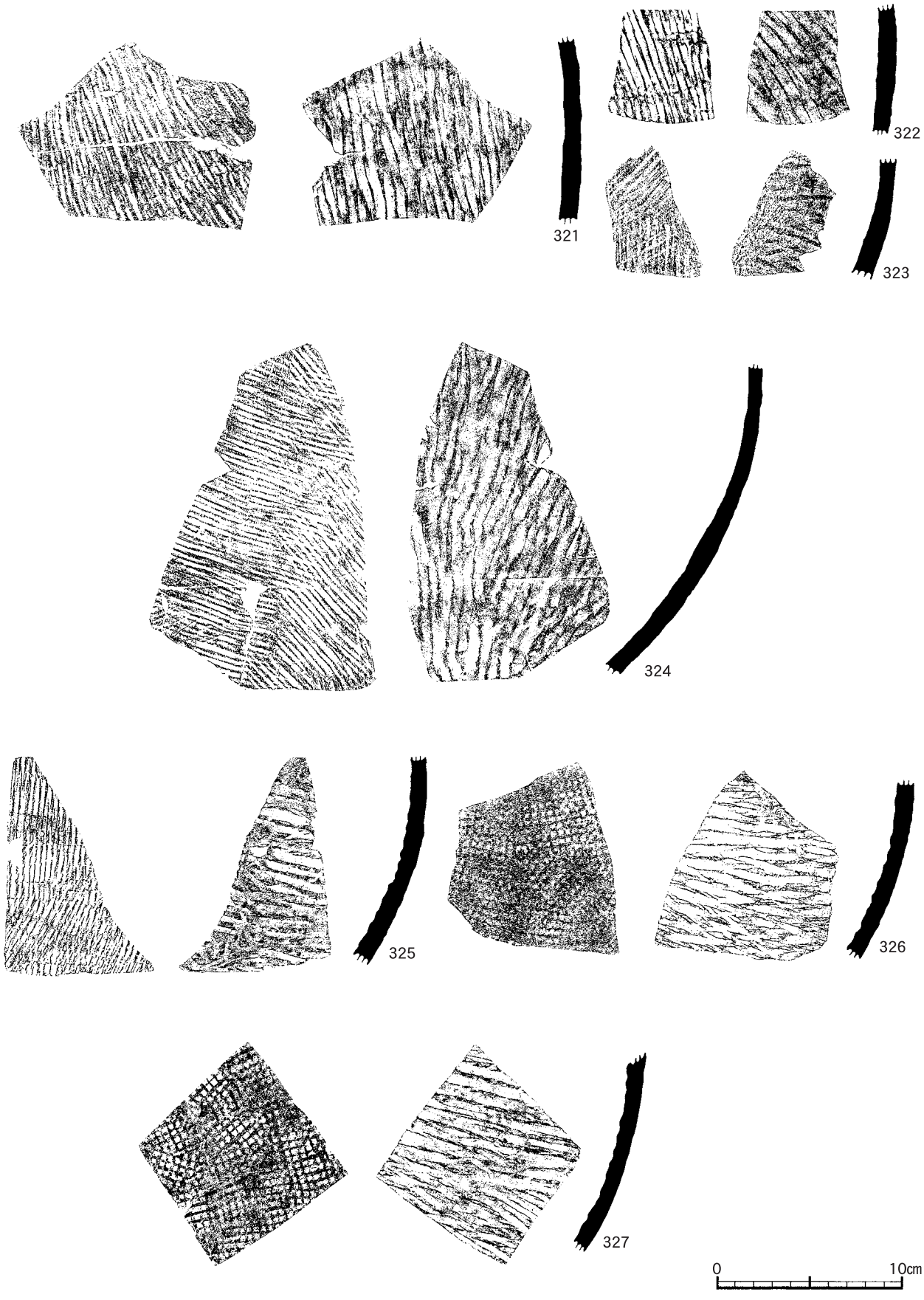
328は壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて大きく外反し，口縁部下位で屈曲し，短く立ち上がるものである。内外面とも自然釉が掛かっており，内面には焼成の際に付着したと思われる灰がまだらに付着している。329は体部が外傾しながら立ち上がっている。内外面ともナデ調整が施されている。外面は淡灰緑色を呈し，硬質な焼成である。330は体部が若干外傾しながら立ち上がっている。外面の調整は，底部から体部への立ち上がりはヘラによって丁寧に整えられ，体部は平行状叩きが残る。内面は，ナデ調整で仕上げているが，同心円状の当て具痕が僅かに残る。体部外面の一部に自然釉が掛かっている。

⑶　砥石（第38図）

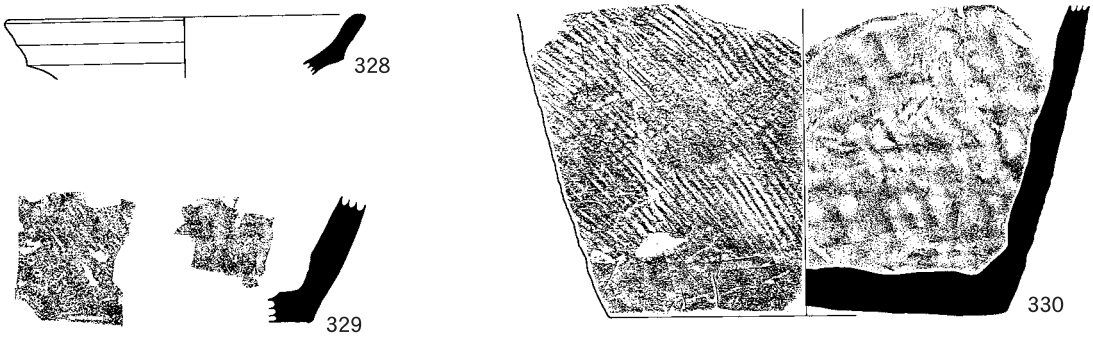
砥石はⅢa層から３点出土した。331・332は砂岩の砥石である。331は３面に研磨痕が認められる。裏面に金属の刃物による切痕が認められる。332は２面に研磨痕が認められる。333は頁岩の砥石である。灰白色に明黄褐色の縞模様が入るいわゆる天草砥石と呼ばれるものである。かなり使い込まれており，表裏面だけでなく側面にも研磨痕が認められ，全部で６面に研磨痕が認められる。至る所に金属の刃物による切痕が認められる。３点ともいずれも金属砥と推定される。



第36図　須恵器Ⅰ



第37図　須恵器Ⅱ



第38図　須恵器Ⅲ，砥石

第10表　古代遺物（土師器）観察表Ⅳ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	種別	器種	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	口径	器高	底径	高台高	備考	挿図
209	J22	Ⅲa	107.600	507	黒色土器	坏	淡黄色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英	—	(3.4)	6.6	—		32
210	J22	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏	黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	長石	—	(1.4)	—	—		32
211	I23	Ⅱ	107.590	554	黒色土器	埦	浅黄橙色	黒褐色	ナデ	ミガキ	石英	16.6	(7.3)	—	—		32
212	H23他	Ⅲa	107.287	375他	黒色土器	埦	赤褐色	黒褐色	ナデ	ミガキ	輝石	—	(4.4)	8.8	0.7		32
213	I21	Ⅱ	107.785	440	黒色土器	埦	橙色	黒褐色	ナデ	ミガキ	長石	—	(4.7)	7.8	1.2		32
214	I23	Ⅱ	107.279	44	黒色土器	埦	浅黄橙色	黄灰色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英	—	(4.8)	7.0	1.1		32
215	I22	Ⅲa	107.940	497	黒色土器	埦	浅黄色	黒褐色	ナデ	ミガキ	長石	—	(3.3)	—	—	底部墨付着	32
216	L22	Ⅱ	109.800	102	黒色土器	埦	灰黄色	黄灰色	ナデ	ナデ	輝石	—	(2.8)	—	—		32
217	I22	Ⅱ	107.640	411	黒色土器	埦	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	茶粒	—	(2.9)	7.4	1.0		32
218	J22	Ⅱ	107.050	452	黒色土器	埦	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英	13.2	6.1	6.4	1.3		32
219	L21	Ⅱ	—	—	黒色土器	埦	明褐色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	茶粒	—	(3.4)	7.4	1.3		32
220	J21	Ⅱ	108.227	389	黒色土器	埦	橙色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	輝石	—	(2.8)	—	—		32
221	J22	Ⅱ	—	—	黒色土器	埦	黄褐色	黒褐色	ナデ	ミガキ	長石	—	(2.1)	6.2	1.2		32
222	H22	Ⅱ	107.029	39	黒色土器	埦	淡黄色	褐灰色	ナデ	ナデ	長石	—	(2.9)	—	—		32
223	J21	Ⅱ	108.637	282	黒色土器	埦	淡黄色	黒褐色	ナデ	ナデ	長石	—	(1.8)	—	—		32
224	I22	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏か埦	黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	長石	13.6	(3.1)	—	—		32
225	J22	Ⅲa	107.660	553	黒色土器	坏か埦	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英	12.8	(4.0)	—	—		32
226	I21	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏か埦	明黄褐色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英	12.2	(2.2)	—	—		32
227	I23	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏か埦	淡黄色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英，角閃石	—	(3.7)	—	—		32
228	K22	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏か埦	明黄褐色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	長石	—	(2.8)	—	—		32
229	K22	Ⅲa	108.627	306	黒色土器	坏か埦	浅黄色	黄灰色	ナデ	ナデ	輝石	12.0	(4.2)	—	—	口縁部煤付着	32
230	J22	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏か埦	にぶい黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英，輝石	11.8	(3.0)	—	—		32
231	K22	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏か埦	黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	長石	—	(3.2)	—	—		32
232	J22	Ⅱ	—	—	黒色土器	坏か埦	黄橙色	黒褐色	ナデ	ナデ	石英	—	(2.6)	—	—		32
233	J22	Ⅲa	—	—	赤色土器	坏か埦	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	長石	12.8	(4.7)	—	—		33
234	I22	Ⅱ	—	—	赤色土器	坏か埦	赤褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	長石	—	(3.6)	—	—		33
235	L22	Ⅱ	109.832	133	赤色土器	埦	橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	茶粒	—	(1.4)	—	—		33
236	G23	Ⅱ	106.741	12	内赤土器	坏	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	茶粒	—	(3.5)	5.8	—		33
237	I22他	Ⅱ	107.640	413他	内赤土器	埦	浅黄橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	石英	15.0	7.6	7.6	1.3		33
238	H22	Ⅲa	106.874	34他	内赤土器	埦	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	輝石	14.2	6.5	8.6	1.4		33
239	J21	Ⅱ	108.297	350	内赤土器	埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	長石，輝石	—	(4.3)	6.4	1.0		33
240	H22	Ⅱ	—	—	内赤土器	埦	明黄褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英	13.6	6.0	7.6	1.0		33
241	I23	Ⅲa	107.382	384他	内赤土器	埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	茶粒	—	(4.8)	7.2	1.0		33
242	K22	Ⅱ	108.650	204	内赤土器	埦	黄灰色	橙色	ナデ	ミガキ	長石	—	(4.9)	7.6	1.0	内面煤付着	33
243	I22他	Ⅱ	107.580	412他	内赤土器	埦	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	13.8	7.2	7.2	1.0		33
244	J22	Ⅱ	107.705	484	内赤土器	埦	明黄褐色	橙色	ナデ	ナデ	石英	—	(5.1)	6.4	1.2		33
245	J21	Ⅲa	108.395	483	内赤土器	埦	橙色	赤褐色	ナデ	ミガキ	石英，輝石	—	(5.0)	7.8	1.0		33
246	I22	Ⅱ	107.795	408	内赤土器	埦	黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	長石	—	(3.2)	7.4	1.1		33
247	J22	Ⅲa	107.835	481	内赤土器	埦	黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	茶粒	15.0	5.9	—	—		33
248	J22	Ⅲa	107.685	544	内赤土器	埦	淡黄橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	茶粒	—	(2.3)	8.0	1.0		33
249	L22	Ⅱ	109.702	131	内赤土器	埦	明赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	石英，長石	—	(2.1)	6.8	1.0		33
250	—	—	—	—	内赤土器	埦	黄灰色	赤褐色	ナデ	ナデ	石英	—	(2.9)	6.2	1.0		33
251	I21他	Ⅲa	108.200	442他	内赤土器	埦	橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(2.5)	7.8	1.5		33
252	I22	Ⅱ	107.410	469	内赤土器	埦	黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	石英，輝石	—	(2.2)	7.2	1.2		33
253	I22	Ⅱ	107.495	456	内赤土器	埦	淡黄色	明赤褐色	ナデ	ナデ	角閃石，輝石	—	(2.0)	8.0	—		33
254	K23	Ⅱ	107.607	382	内赤土器	埦	灰黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石	—	(2.5)	7.4	1.0		33
255	I23	Ⅲa	—	—	内赤土器	埦	浅黄橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(2.5)	6.2	1.2		33
256	I22	Ⅲa	107.155	583	内赤土器	埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(2.5)	8.2	1.2		33
257	G22	Ⅱ	106.491	3	内赤土器	埦	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	茶粒	—	(2.9)	7.4	1.1		33
258	J22	Ⅱ	—	—	内赤土器	埦	黄灰色	赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	長石	—	(2.1)	—	—	底部墨付着	33
259	I22	Ⅱ	—	—	内赤土器	坏か埦	淡黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	石英	18.0	(3.5)	—	—		34
260	I23	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	黒褐色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	16.0	(5.0)	—	—	口縁部煤付着	34
261	J22	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	明黄褐色	橙色	ナデ	ナデ	石英，角閃石	15.4	(4.0)	—	—		34
262	J23	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	黄褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	長石	15.4	(4.5)	—	—		34
263	J23	Ⅱ	—	—	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	茶粒	14.8	(4.7)	—	—		34
264	H23	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	角閃石	14.6	(5.1)	—	—		34
265	I22他	Ⅲa	108.020	498他	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	14.4	(5.0)	—	—		34
266	I23	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	長石，輝石	13.4	(3.8)	—	—		34
267	H23	Ⅲa	106.820	73	内赤土器	坏か埦	橙色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	13.0	(5.3)	—	—	口縁部煤付着	34
268	I23	Ⅲa	107.182	402	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	暗赤褐色	ナデ	ナデ	長石	12.8	(5.6)	—	—	口縁部煤付着	34
269	I21	Ⅱ	107.920	441	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	12.0	(5.0)	—	—		34
270	—	Ⅱ	—	—	内赤土器	坏か埦	淡黄色	明赤褐色	ナデ	ナデ	長石	—	(4.9)	—	—	体部煤付着	34
271	I21	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	橙色	橙色	ナデ	ナデ	石英	—	(4.0)	—	—		34
272	I22	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	長石	—	(3.2)	—	—		34
273	I23	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	長石，輝石	—	(2.7)	—	—		34

第11表　古代遺物（土師器）観察表Ⅴ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	種別	器種	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	口径	器高	底径	高台高	備考	挿図
274	I21他	Ⅲa	107.825	500他	内赤土器	坏か埦	暗黄灰色	明赤褐色	ナデ	ナデ	角閃石	16.0	(6.1)	—	—		34
275	I23	Ⅲa	107.100	612	内赤土器	坏か埦	淡黄色	明赤褐色	ナデ	ナデ	長石	15.6	(4.2)	—	—		34
276	H22	Ⅱ	—	—	内赤土器	坏か埦	灰黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英	14.2	(3.1)	—	—	口縁部煤付着	34
277	J22	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	角閃石	14.0	(4.4)	—	—		34
278	J23	Ⅲa	—	—	内赤土器	坏か埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(4.2)	—	—		34
279	L22	Ⅱ	109.822	132	内赤土器	坏か埦	明黄褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	石英	—	(4.7)	—	—		34
280	H22	Ⅲa	106.540	62	内赤土器	鉢	黄橙色	橙色	ナデ	ナデ	茶粒	21.0	(12.3)	—	—	口縁部煤付着	34
281	K23	Ⅱ	108.815	491	内赤土器	鉢	黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	角閃石	—	(7.5)	—	—		34
282	I22他	Ⅲa	107.235	562他	墨書土器	埦	浅黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	長石	15.8	7.2	8.2	1.7	赤色土器	35
283	J23他	Ⅲa	107.360	638他	墨書土器	坏	淡黄色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	茶粒	15.4	5.5	6.4	—	内面煤付着	35
284	H23	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏か埦	浅黄橙色	赤褐色	ナデ	ナデ	石英	6.7	(4.2)	—	—	内赤土器	35
285	I21	Ⅲa	108.145	496	墨書土器	坏	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	—	(4.0)	6.4	—		35
286	H22	Ⅱ	107.002	52	墨書土器	坏か埦	淡黄色	灰黄色	ナデ	ナデ	長石	—	(2.9)	—	—		35
287	L22	Ⅲa	109.290	161	墨書土器	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	—	(3.0)	—	—		35
288	I23	Ⅱ	—	—	墨書土器	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	—	(1.8)	—	—		35
289	I22	Ⅲa	107.010	80	墨書土器	坏	淡黄色	淡黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	11.8	5.0	3.5	—		35
290	—	—	—	—	墨書土器	坏か埦	橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	石英	12.4	(3.5)	—	—		35
291	I23	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏か埦	橙色	橙色	ナデ	ナデ	茶粒	—	(2.3)	—	—		35
292	I23	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石, 輝石	—	(3.3)	—	—		35
293	I23	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏か埦	淡黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	石英, 輝石	—	(3.8)	—	—		35
294	J23	Ⅲa	—	—	墨書土器	Ⅲ	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	石英	—	(1.5)	—	—		35
295	I22	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏か埦	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	長石	—	(2.5)	—	—		35
296	K22	Ⅲa	109.740	209	墨書土器	埦	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ	石英, 角閃石	—	(5.8)	7.6	1.2		35
297	I22	Ⅱ	107.240	433	墨書土器	坏	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	長石	—	(3.6)	5.8	—		35
298	I22	Ⅱ	107.115	69	墨書土器	埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英	13.5	5.8	8.0	0.95		35
299	I22	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	角閃石	—	(3.7)	6.0	—		35
300	I23	Ⅲa	—	—	墨書土器	埦	明褐色	赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	角閃石, 輝石	—	(3.1)	—	—	内赤土器	35
301	I22	Ⅱ	107.184	37	墨書土器	埦	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	石英, 角閃石	—	(3.5)	7.2	1.4	内赤土器	35
302	J22	Ⅱ	—	—	墨書土器	坏か埦	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	石英	—	(2.2)	—	—		35
303	J22	Ⅱ	—	—	墨書土器	坏か埦	黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(2.0)	—	—		35
304	I23	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	石英, 輝石	—	(1.8)	—	—		35
305	I22	Ⅲa	107.540	515	墨書土器	坏か埦	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ	ナデ	輝石	—	(4.0)	—	—		35
306	—	Ⅲa	—	—	墨書土器	坏か埦	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(3.1)	—	—	内赤土器	35
307	I23	—	—	—	墨書土器	坏か埦	橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(2.6)	—	—	内赤土器	35
308	—	Ⅱ	—	—	墨書土器	坏か埦	浅黄橙色	赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	石英	—	(4.2)	—	—	内赤土器	35
309	I22	Ⅲa	—	—	墨書土器	—	黄橙色	明赤褐色	ナデ	ナデ	輝石	—	(1.9)	—	—	内赤土器	35
310	J21	Ⅱ	—	—	墨書土器	—	橙色	赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	輝石	—	(0.9)	—	—	内赤土器	35
311	J22	Ⅱ	—	—	墨書土器	—	明褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ・ミガキ	輝石	—	(1.5)	—	—	内赤土器	35

第12表　古代遺物（土師器）観察表Ⅵ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	種別	器種	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	口径	器高	底径	高台高	備考	挿図
312	L22	Ⅱ	109.940	137	須恵器	坏	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	長石	—	(1.5)	6.6	—	円盤状底部	36
313	I23	Ⅲa	107.840	480	須恵器	甕	灰青色	灰青色	ナデ	ナデ	輝石	28.2	(3.3)	—	—		36
314	G22	Ⅲa	106.426	1	須恵器	甕	灰白色	灰白色	格子状叩き	同心円文	—	17.0	(9.3)	—	—		36
315	L22	Ⅱ	110.250	88	須恵器	甕	暗灰黄色	暗灰青色	格子状叩き	平行文	—	—	(2.1)	—	—		36
316	J23	Ⅱ	107.760	461	須恵器	甕	緑灰色	淡灰青色	格子状叩き	同心円文	長石	—	(4.5)	—	—		36
317	I22	Ⅲa	107.575	532他	須恵器	甕	暗赤褐色	暗褐色	平行状叩き	同心円文	—	—	(4.3)	—	—		36
318	I22	Ⅲa	107.097	51他	須恵器	甕	暗赤褐色	灰褐色	平行状叩き	同心円文	—	—	(11.7)	—	—		36
319	K22	Ⅱ	108.890	191	須恵器	甕	青灰色	青灰色	平行状叩き	平行文	—	—	(6.7)	—	—		36
320	H22	Ⅲa	106.991	14	須恵器	甕	橙色	浅黄橙色	平行状叩き	平行文	—	—	(8.0)	—	—		36
321	L22	Ⅲa	109.965	214他	須恵器	甕	灰黄色	浅黄褐色	平行状叩き	平行文	輝石	—	(9.7)	—	—		37
322	I22	Ⅲa	107.500	520	須恵器	甕	暗青灰色	淡灰青色	平行状叩き	平行文	—	—	(7.0)	—	—		37
323	K22	Ⅱ	109.260	107	須恵器	甕	暗赤褐色	灰青色	平行状叩き	平行文	—	—	(6.5)	—	—		37
324	J22他	Ⅲa	107.570	490他	須恵器	甕	暗褐色	浅黄橙色	平行状叩き	平行文	—	—	(16.6)	—	—		37
325	I22他	Ⅲa	107.520	558	須恵器	甕	褐色	灰黄褐色	平行状叩き	平行文	—	—	(11.2)	—	—		37
326	I23	Ⅲa	107.032	57	須恵器	甕	暗赤褐色	灰青色	格子状叩き	平行文	—	—	(9.5)	—	—		37
327	I22	Ⅲa	107.365	526他	須恵器	甕	黒褐色	灰青色	格子状叩き	平行文	—	—	(11.3)	—	—		37
328	I22	Ⅲa	107.070	604	須恵器	壺	暗灰褐色	緑灰色	ナデ	ナデ	—	14.4	(2.4)	—	—		38
329	J23	Ⅱ	109.017	313	須恵器	壺	青灰色	青灰色	ナデ	ナデ	—	—	(5.0)	—	—		38
330	J22	Ⅲa	107.325	563他	須恵器	壺	淡灰青色	淡灰青色	平行状叩き	ナデ	—	—	(12.3)	16.0	—		38

第13表　古代遺物（土師器）観察表Ⅶ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	器種	石材	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図
331	J23	Ⅲa	107.360	633	砥石	砂岩	10.40	11.50	3.70	502.10		38
332	K22	Ⅲa	108.310	577	砥石	砂岩	11.15	8.10	4.00	445.20		38
333	G22	Ⅲa	106.439	47	砥石	頁岩	13.10	6.50	6.00	660.40	天草砥石	38

第６節　中世の調査

Ⅱ層を中心に中世の遺物が出土した。遺構は検出されなかった。出土遺物数は少ないが，土師器（坏・皿・小皿），青磁，染付，陶器などが出土している。

1　土師器（第39図）

土師器は，坏・皿・小皿が出土した。全て底部の切り離しが糸切りである。

⑴　坏（334～352）

体部から口縁部にかけて欠損しているため，全体の形態は不明である。そのため，底径によって大きく３種類に分類した。

334～339は底径が8.5㎝以上9.5㎝以下のものである。334～337は器壁が厚いものである。334は円盤状の底部を有するものである。体部外面端部にはヘラ状工具で底部との境を作り出しており，はみ出した粘土塊を上へナデ上げている。335の内面は赤色の顔料が塗布され，外面は体部から底部まで煤が付着している。336は底部切り離し後，底部と体部との境が未調整ではみ出した粘土塊が付着したままである。337は底部と体部との境の調整が丁寧に行われており，角張っている。338・339は器壁が薄いものである。339は内外面ともに黒色である。赤外線投射による映像では全体が黒色に写り出ており，墨を全体に塗布したものと考えられるが，煤が付着した可能性も考えられる。

340～345は底径が7.5㎝以上8.0㎝以下のものである。340～343は器壁が厚いものである。341・343は摩滅が激しい。342は底部外面の糸切り痕を板状の施文具でナデ消している。344・345は器壁が薄いものである。ともに焼成は良好である。

346～352は底径が6.5㎝以上7.0㎝以下のものである。347～349は底部外面の糸切り痕を板状の施文具でナデ消している。底部切り離しの際にはみ出た粘土塊を横位のナデ調整によって丁寧に調整している。

⑵　皿（353～355）

底部から体部への立ち上がりが大きく外傾するものを皿とした。ただし，体部は欠損しているために，その形状は不明であるため，坏に分類される可能性も考えられる。353は体部の器壁が薄く，底径が10.0㎝を超えるものである。丁寧にナデ調整が施され，焼成も良好である。354・355は底径が10.0㎝未満のものである。底部外面の糸切り痕を板状の施文具でナデ消している。

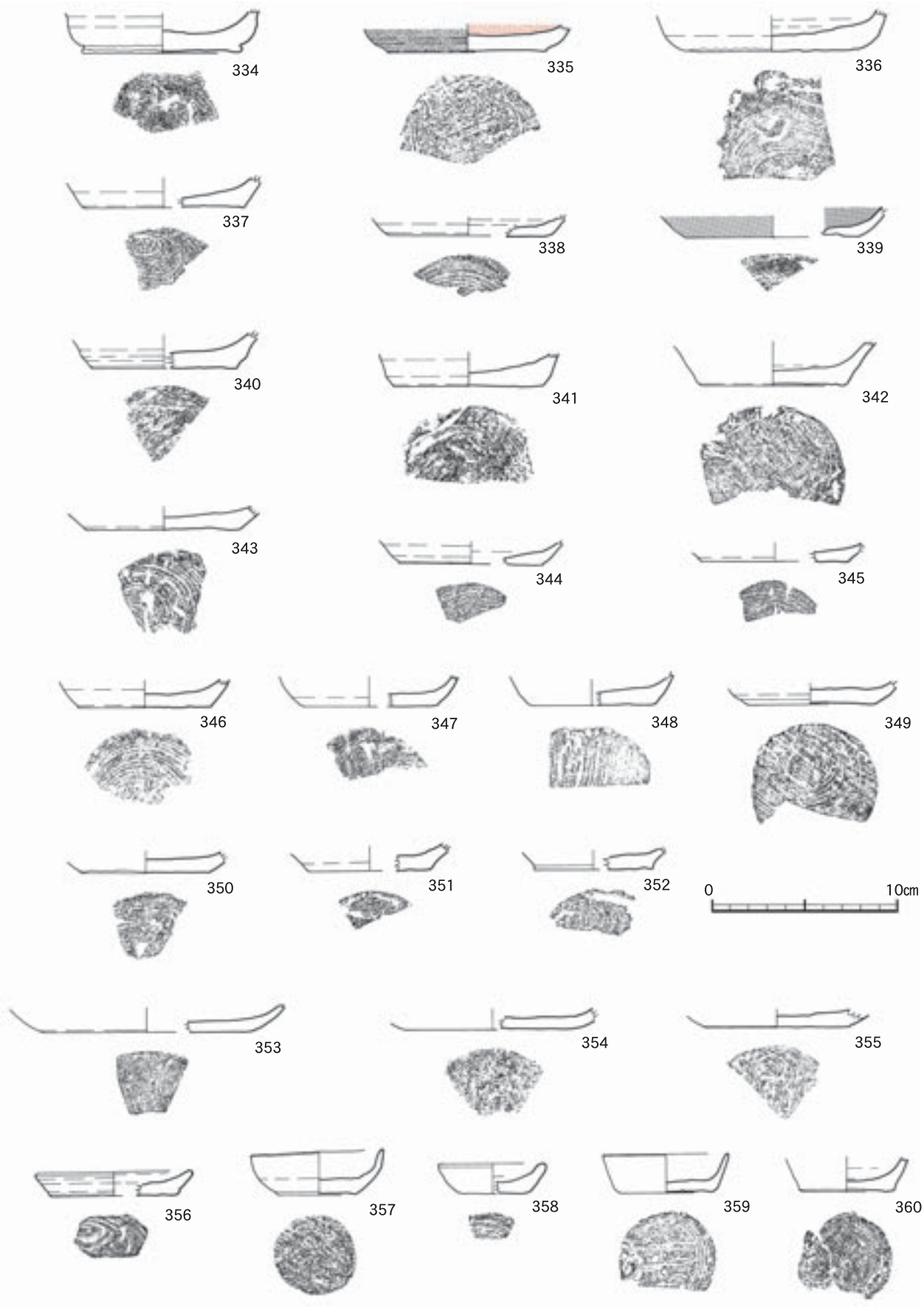
⑶　小皿（356～360）

口径が10.0㎝以下で器高の低いものを小皿とした。356は体部が大きく外傾し，口径に対し器高が低いものである。357・358は体部が丸みをもつものである。358は体部の器壁が厚いものである。359・360は体部が直線的に伸びるものである。359は底部中央の糸切り痕を板状の施文具でナデ消している。

2　青磁（第40図）

青磁は碗・皿・盤が出土した。いずれも龍泉窯系青磁である。

361～364は文様を有するものである。361～363は体部外面に連弁文を有する碗である。361は口縁部が外反するもので内外面に貫入がある。釉がやや厚めにかかり，暗緑褐色を呈している。


334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
0
10cm
353
354
355
356
357
358
359
360

第39図　中世の遺物Ⅰ

362・363は口縁部が真っ直ぐ伸びるものである。釉がやや薄目にかかり，緑灰色を呈している。貫入はみられない。364は皿である。底部内面には印花文と思われる文様が施されている。

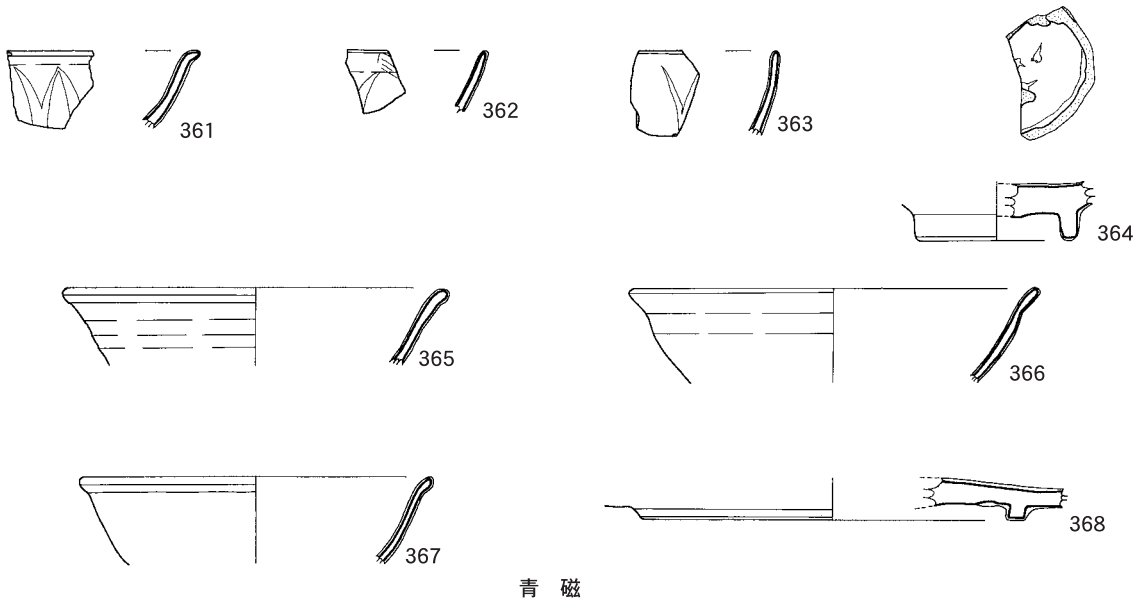
365～368は無文の青磁である。365～367は碗である。365は体部が直線的に伸びるもので，口唇部が膨らみ，丸まるものである。366・367は体部が丸みをもち，口縁部で外反するものである。366は薄目に釉がかかり，淡灰青色を呈している。368は無文の盤である。

3　染付（第40図）

染付は碗・皿が出土した。いずれも中国陶磁の嘉靖様式のものと思われる。

369～371は碗である。370は口縁部内面には四方襷の文様帯があり，外面には一条の圏線を巡らしている。371は口縁部内面に一条の圏線を巡らし，外面には二条の圏線を巡らしている。体部外面には簡略化したような唐草文が描かれている。

372～375は皿である。372は口縁部が外反するものである。内面に二条の圏線を巡らし，外面には一条の圏線と蔓草文が描かれている。373は碁笥底の皿である。体部外面には芭蕉文が描かれ，



第40図　中世の遺物Ⅱ

内面には捻花文が描かれている。374は口縁部内面に一条の圏線を巡らし，外面には波涛文や列点文の文様帯があり，体部には芭蕉文があったと推定される。375は内面に二条の圏線と，体部外面に牡丹文が描かれている。

4　陶器（第40図）

376は国内産の陶器の小皿である。内面には釉がかかり，淡緑色を呈している。釉のかかり方にむらがあり，口縁部や底部に釉溜まりがみられる。外面は釉がかかっておらず，底部は糸切り底である。瀬戸系のものと推定される。

第14表　中世遺物観察表Ⅰ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	種別	器種	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	胎土	口径	器高	底径	備考	挿図
334	I22	—	—	—	土師器	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石	—	(2.3)	8.6	円盤状底部	39
335	—	—	—	—	土師器	坏	黒褐色	赤褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	—	(1.5)	8.6	内赤土器,外面煤付着	39
336	J22	—	—	—	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石	—	(2.2)	9.4		39
337	—	—	—	—	土師器	坏	赤褐色	黄褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石	—	(2.1)	8.8		39
338	—	—	—	—	土師器	坏	黄褐色	黄褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	茶粒	—	(1.0)	8.6		39
339	—	—	—	—	土師器	坏	黒褐色	黒褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	—	(1.6)	9.2	墨付着？	39
340	—	—	—	—	土師器	坏	赤褐色	赤褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	—	(1.9)	7.8		39
341	—	—	—	—	土師器	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	茶粒	—	(1.7)	8.0		39
342	G24	Ⅱ	107.319	15	土師器	坏	浅黄橙色	橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	—	(2.4)	7.8		39
343	L22	Ⅱ	—	—	土師器	坏	灰黄褐色	橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	茶粒	—	(1.3)	8.2		39
344	—	—	—	—	土師器	坏	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	長石	—	(1.2)	7.8		39
345	H24	Ⅱ	—	—	土師器	坏	明黄褐色	明黄褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	長石	—	(1.0)	8.0		39
346	—	—	—	—	土師器	坏	にぶい橙色	橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	—	(1.5)	7.0		39
347	—	—	—	—	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石	—	(1.6)	7.0		39
348	—	Ⅱ	—	—	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	茶粒	—	(1.7)	6.8		39
349	—	—	—	—	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石	—	(1.2)	6.8		39
350	—	—	—	—	土師器	坏	黄褐色	黄褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	茶粒	—	(1.1)	7.0		39
351	I22	—	—	—	土師器	坏	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	—	(1.4)	6.7		39
352	I23	Ⅱ	—	—	土師器	坏	明黄褐色	明黄褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石	—	(1.1)	6.4		39
353	I23	Ⅱ	—	—	土師器	皿	淡褐色	橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石，石英	—	(1.4)	11.2		39
354	—	Ⅱ	—	—	土師器	皿	黒褐色	灰褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	長石	—	(1.0)	7.8		39
355	—	—	—	—	土師器	皿	黒褐色	灰黄色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	長石	—	(1.2)	9.0		39
356	I24	Ⅱ	—	—	土師器	小皿	淡黄橙色	淡黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	8.4	1.3	6.8		39
357	I22	Ⅱ	107.599	43	土師器	小皿	浅黄橙色	浅黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	輝石	7.2	2.3	4.3		39
358	—	—	—	—	土師器	小皿	暗灰黄色	褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	5.8	1.6	3.8		39
359	—	—	—	—	土師器	小皿	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	茶粒	6.8	2.1	5.0		39
360	J22	—	—	—	土師器	小皿	黒褐色	暗赤褐色	ナデ, 回転糸切り	ナデ	石英	—	(1.9)	4.6		39

第15表　中世遺物観察表Ⅱ

番号	区	層	標高(m)	注記番号	種別	器種	器面色調	胎土色調	口径	器高	底径	高台高	備考	挿図
361	—	—	—	—	青磁	碗	暗緑褐色	淡灰青色	—	(3.1)	—	—	蓮弁，貫入	40
362	—	—	—	—	青磁	碗	緑灰色	灰青色	—	(2.5)	—	—	蓮弁	40
363	L22	Ⅱ	—	—	青磁	碗	淡緑灰色	淡灰青色	—	(3.4)	—	—	蓮弁	40
364	—	—	—	—	青磁	皿	緑灰色	淡青灰色	—	(2.4)	6.4	1.1	印花文	40
365	K22	Ⅱ	109.505	108	青磁	碗	明緑灰色	灰白色	15.4	(3.3)	—	—	貫入	40
366	L21	Ⅱ	—	—	青磁	碗	淡灰青色	灰白色	16.4	(3.8)	—	—		40
367	—	—	—	—	青磁	碗	暗緑褐色	灰白色	14.2	(3.5)	—	—	貫入	40
368	—	—	—	—	青磁	盤	浅緑灰色	淡灰青色	—	(1.7)	15.4	0.6		40
369	—	—	—	—	染付	碗	灰白色	灰白色	—	(3.3)	—	—		40
370	—	—	—	—	染付	碗	灰白色	灰白色	—	(3.3)	—	—	四方襷文	40
371	—	—	—	—	染付	碗	浅青灰色	灰白色	—	(3.0)	—	—	唐草文	40
372	—	—	—	—	染付	皿	淡青灰色	灰白色	—	(2.5)	—	—	蔓草文	40
373	—	—	—	—	染付	皿	灰白色	灰白色	—	(1.8)	4.0	—	碁笥底，芭蕉文	40
374	—	—	—	—	染付	皿	灰白色	乳白色	—	(1.5)	—	—	波涛文，列点文	40
375	J22	Ⅱ	—	—	染付	皿	明青灰色	灰白色	—	(2.0)	—	—	牡丹文	40
376	—	—	—	—	陶器	小皿	淡緑色	灰白色	6.6	1.4	3.4	—	回転糸切り底，瀬戸系	40

第５章　まとめ

下永迫Ａ遺跡は日置郡伊集院町下谷口字下永迫に所在し，平成９年度に確認調査，平成10年度に本調査が行われた。調査により，縄文時代，古墳時代，古代，中世の遺構・遺物が確認された。

１　縄文時代

縄文時代は遺物が出土しただけで，遺構は検出されなかった。遺物は調査区域の南側中央部のⅡ層からⅢa層にかけて集中的に出土した。層位的，あるいはレベル的にもばらつきがあり，また，地形の状況から考えても流れ込みの可能性が高いと考えられる。

土器は，早期の吉田式土器，晩期の黒川式と思われる精製浅鉢が出土したが，主体は後期の土器であった。後期の土器としては，指宿式土器・松山式土器・市来式土器・草野式土器など多様な土器が出土したが，いずれも破損しており，口縁部，胴部，底部といった断片的な出土の状態であった。

石器は，石鏃・スクレイパー・磨石が出土した。石材としては，黒曜石・頁岩・玉髄・安山岩がみられた。石鏃は後期のものが中心と考えられるが，石材・形態とも多様であるため，時期差を考える必要がある。磨石は側面や広い面のほぼ中央部に敲打痕があることから，敲石あるいは凹石として使用されたと考えられる。

２　古墳時代

古墳時代も遺構は検出されず，遺物のみの出土であった。遺物は散在した状況でⅡ層からⅢa層にかけて出土しており，完形のものはなく，いずれも破片であった。出土した遺物も摩滅を受けているものが多く，流れ込みの可能性が高いと考えられる。

土器は在地性の強い成川式土器が主体であり，器種は甕形土器・壺形土器・高坏形土器であった。甕形土器は口縁部が外反するものが主で，胴部は膨らむものと直線的なものとがあり，胴部には刻目突帯が付くものもみられる。底部は割合に高い脚台が付くものであった。壺形土器は口縁部は出土せず，胴部と底部のみであった。胴部には刻目突帯が付き，底部は丸底や乳房状のものであった。高坏形土器には，脚台に丹が塗布されているものもみられる。

３　古代

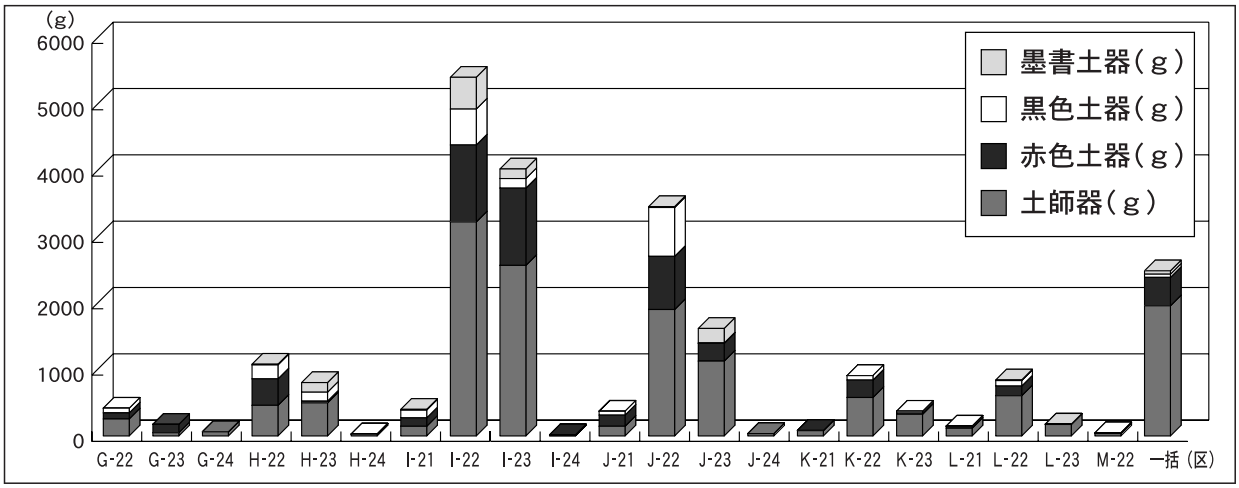
本遺跡の主体をなす時代である。遺構は土坑と集石が１基ずつ検出された。２つの遺構は隣接していることから，何らかの関係があるものと推定される。土坑は平面形が楕円形をしており，長径は144㎝ある。集石は軽石を中心とした45個の礫で構成されており，そのほとんどが火熱を受けている。これらの遺構は，どのような目的で使用されたのか，特に集石については，火を使用していることは間違いないものの，なぜ軽石を多数使用しなければならなかったのか，また，掘り込みをもたず，焼土や炭化物などが検出されなかったことから，別の場所で使用された後に持ち込まれたのかなどは今後の課題である。

遺物は土師器，須恵器，砥石が出土した。土師器には，坏・埦・皿・鉢・甕が出土しているほか，黒色土器・赤色土器・墨書土器なども多数出土している。土師器の坏・埦について，それぞれの形態ごとに分類したが，それぞれの器種について大きな差はみられず，当センター職員中村和美の所

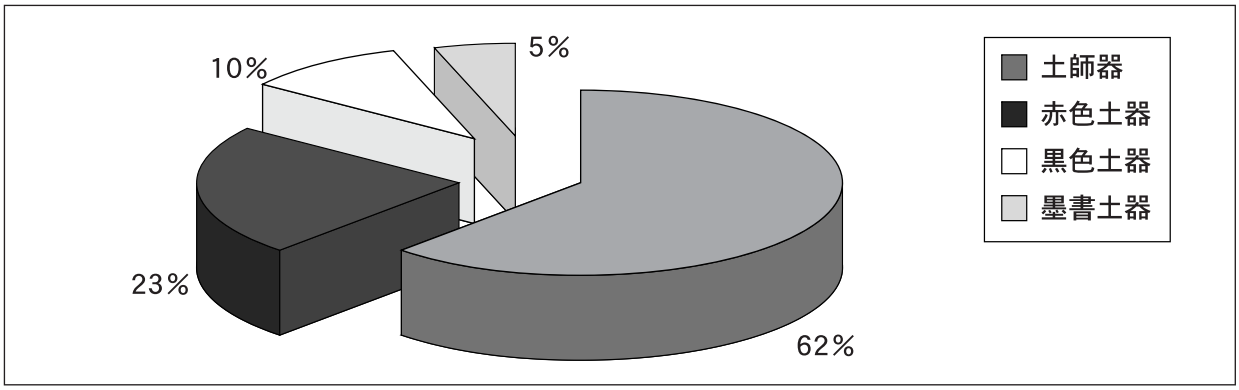
第16表　出土区ごとの土師器（坏・**埦**・皿）出土量（総重量）

出土区	土師器（g）	墨書土器(g)	赤色土器(g)	墨書土器(g)	黒色土器(g)	墨書土器(g)	総重量(g)	墨書土器総重量
G－22	255.91	0	91.42	0	71.10	0	418.43	0
G－23	48.69	0	125.42	0	0	0	174.11	0
G－24	62.66	0	0	0	0	0	62.66	0
H－22	461.60	0	398.97	0	209.58	11.61	1081.76	11.61
H－23	498.57	124.21	26.48	21.19	134.43	0	804.88	145.40
H－24	27.15	0	0	0	1.60	0	28.75	0
I －21	145.27	13.38	127.51	0	115.02	0	401.18	13.38
I －22	3226.55	206.97	1159.92	272.21	541.18	0	5406.83	479.18
I －23	2571.32	140.32	1164.45	4.32	144.56	0	4024.97	144.64
I －24	6.78	0	8.80	0	0	0	15.58	0
J －21	146.07	0	167.91	4.12	57.44	0	375.54	4.12
J －22	1906.25	13.69	801.39	0	736.21	0	3457.54	13.69
J －23	1128.51	220.47	268.12	0	3.75	0	1620.85	220.47
J －24	35.19	0	0	0	0	0	35.19	0
K －21	79.82	0	2.20	0	0	0	82.02	0
K －22	579.84	0	262.76	0	66.93	0	909.53	0
K －23	326.85	0	18.57	0	27.36	0	372.78	0
L －21	116.19	0	30.77	0	0.83	0	147.79	0
L －22	606.54	10.00	145.84	0	82.27	0	844.65	10.00
L －23	173.03	0	4.89	0	0	0	177.92	0
M－22	35.90	0	0	0	11.15	0	47.05	0
一括	1962.43	28.53	428.31	22.82	47.71	0	2489.80	51.35
合計（g）	14401.12	757.57	5233.73	324.66	2251.12	11.61	22979.81	1093.84
割合（%）	62.67	3.30	22.77	1.41	9.8	0.05	100	4.76

第17表　出土区ごとの出土量（総重量）



第18表　赤色・黒色・墨書土器の割合



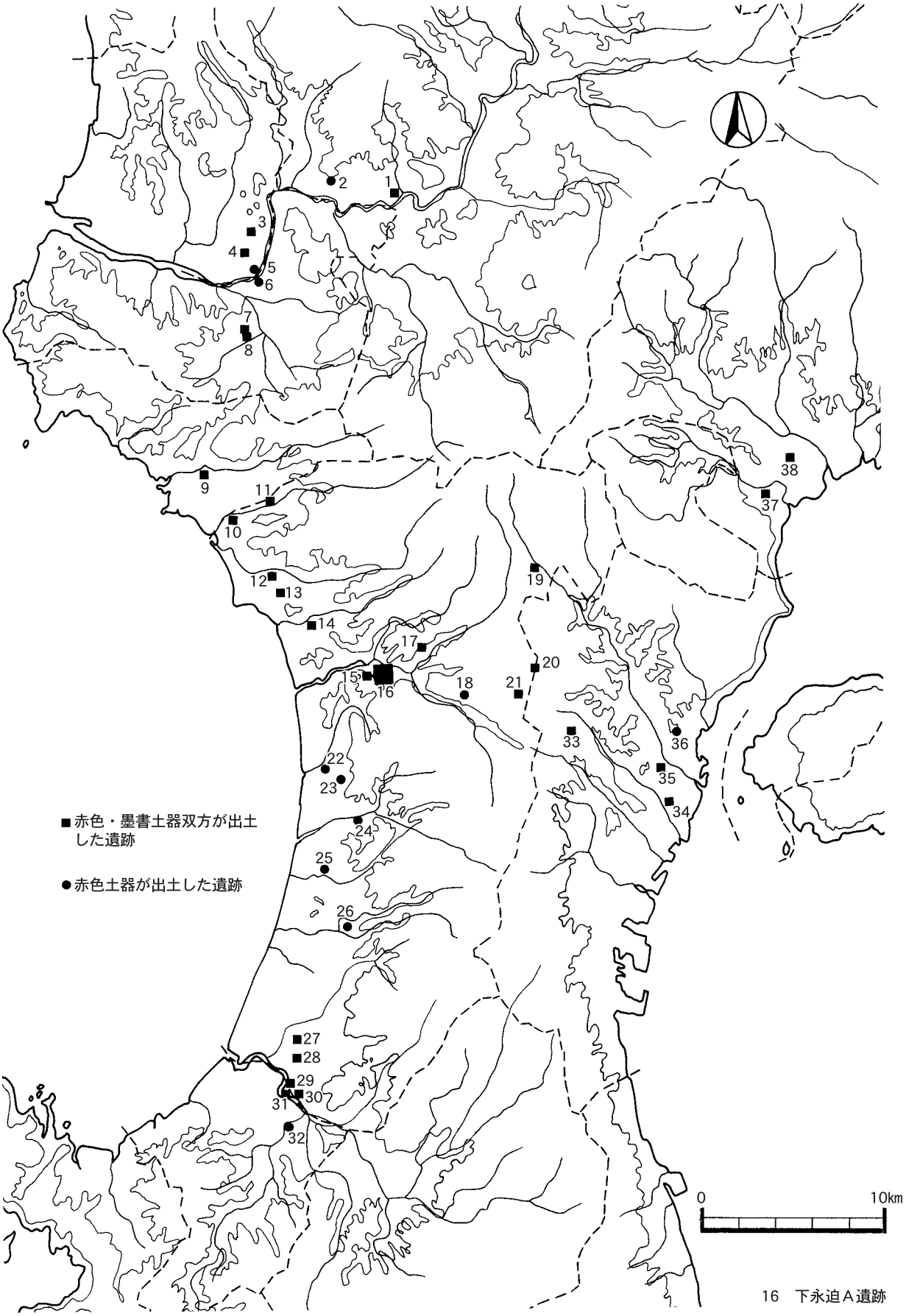
見によると，本遺跡で出土した土師器（坏・埦）は９世紀後半から10世紀中頃を中心とするもののようである。

第16表は各グリッドごとに出土した土師器（坏・埦・皿）の総重量を計測したものである。このデータは，調査担当者である栗林文夫が計測したものである。また，第17表は第16表をグラフ化したものである。これによって，遺跡の中央部であるＩ・Ｊ－22・23区に遺物が最も集中していることがわかる。赤色土器や墨書土器の出土もこれらの区に集中しており，「在」や「十」,「万」などと書かれた墨書土器もこれらの区から出土している。また，土師器（坏・埦・皿）の中には煤が付着しているものが多く，赤色土器や墨書土器の中にも煤の付着がみられた。Ｉ－22区からは先述した遺構が検出されており，それらとの関連も考えられる。土器の中には，口縁部だけに煤の付着したものが７点あり，灯明容器としての利用の可能性が考えられるが，そのうちの４点は赤色土器であった。本来，赤色土器のような特殊な土器を灯明に用いるものなのか，今後の課題である。第18表は土師器（坏・埦・皿）の総重量に対する赤色土器・黒色土器・墨書土器の重量の割合である。これによると赤色土器の割合は全重量の23％にもなり，黒色土器の割合は僅か10％である。他の遺跡では黒色土器の割合が多く，赤色土器は僅かしか出土しない傾向があるが，本遺跡では全く逆になっている。墨書土器については，総重量の５％という割合になった。整った字形で「在」と墨書されている土器が出土したが，県内では鹿児島市西別府町に所在する山ノ中遺跡に続き２例目の出土となる。山ノ中遺跡で出土した墨書土器の「在」の字は，本遺跡で出土した「在」の字と比較して字形がくずれており，簡略した墨書のようである。この他にも「万」「十」と判読できるものや「上□」「乙」「込」と推定されるものなどが出土しているがいずれも整った字形であり，日常的に文字の使用が必要とされる層の人々の存在が考えられる。また，埦の底部外面に墨が付着しているものがあり，筆置きや筆の穂先を整えるために使われた可能性が考えられ，墨書が現地で行われていた可能性が高いと推定される。

以上のことをもとに古代の下永迫Ａ遺跡の性格について考えてみたい。地形が谷地にあたり，建物跡など生活の痕跡となる遺構は検出されていないことから，生活根拠地と考えることには無理があるように思える。そのため，遺跡の主体は，北側の平坦部にあると推定され，本遺跡は北側に推定される遺跡主体部で使用された土器等を破棄した場所である可能性が高いと推定される。北側の遺跡主体部の性格について，本遺跡から出土した遺物から推定した場合，まず，赤色土器や墨書土器などは一般庶民が所持するものとは考えられないことと，赤色土器を多量に必要とすると同時に文字を正確に記することのできる人々の存在が伺えることから，寺院あるいは出先を含めた官衙のような地方の役所が考えられる。ただし，北側平坦部は調査範囲には含まれず，未調査であるため，本遺跡も含めてその性格は不明とせざるをえない。

４　中世

中世の遺物として，土師器，青磁，染付，陶器が出土した。出土した遺物から二時期に分けられるようである。一つは13世紀前半を中心とした時期，もう一つは16世紀中頃から後半にかけての時期である。遺物の中には，当時としては高価だったと考えられるものがみられるものの出土数は少なく，古代ほどには繁栄しなかったものと推定される。



第41図　赤色土器出土遺跡位置図

第19表　赤色土器出土遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	墨書土器の有無	文　　字	備　考	文献
1	坂ノ下	薩摩郡東郷町南瀬	○	不明		10
2	五社	薩摩郡東郷町五社久留巣	－		刻書土器出土	11
3	計志加里	川内市中郷町計志加里	○	「吾」「与」	刻書土器出土	12
4	薩摩国分寺跡	川内市国分寺町大都・下台	○	「刑」「金」「院」他		13
5	大島	川内市東大小路町	－		刻書土器出土	14
6	鍛冶屋馬場	川内市平佐町	－			15
7	西ノ平	川内市中福良町西ノ平	○	「作」「日」「子」他		16
8	成岡	川内市中福良町成岡	○	「上」		16
9	栫城跡	串木野市上名	○	「田」「虫？」他	刻書・刻印土器出土	36
10	安茶ヶ原	日置郡市来町川上	○	「日置厨」		37
11	針原	日置郡市来町川上針原	○	「子？」		17
12	上ノ原	日置郡市来町大里	○	不明		18
13	市ノ原	日置郡東市来町湯田　他	○	「春」「厨」「万」他	刻書土器出土	8
14	犬ヶ原	日置郡東市来町伊作田	○	不明		19
15	柳原	日置郡伊集院町下谷口	○	「三依」		38
16	下永迫Ａ	日置郡伊集院町下谷口	○	「在」「万」「十」他	本報告書	
17	西原	日置郡伊集院町郡	○	不明		9
18	フミカキ	日置郡松元町福山	－			20
19	常盤原	日置郡郡山町	○	不明		21
20	横井竹ノ山	鹿児島市犬迫町　他	○	「肥道里」「子？」		22
21	宮尾	日置郡松元町石谷	○	「八万」「作」		23
22	瀬戸口	日置郡日吉町吉利	－			24
23	原口	日置郡日吉町吉利	－		刻印土器出土	25
24	笑童子	日置郡吹上町永吉	－			26
25	赤井田	日置郡吹上町小永吉	－			27
26	藤ノ元	日置郡吹上町与倉	－			28
27	山野原	日置郡金峰町尾下	○	「井」「良」「山」他	刻書土器出土	29
28	小中原	日置郡金峰町宮崎	○	不明	刻書土器出土	30
29	持躰松	日置郡金峰町宮崎	○	「門」「凡」	刻書土器出土	40
30	渡畑	日置郡金峰町宮崎	－			41
31	芝原	日置郡金峰町宮崎	○	「宅」「福」	刻書土器出土	42
32	上加世田	加世田市川畑	○	「久米」		31
33	山ノ中	鹿児島市西別府町	○	「在」		39
34	一之宮Ｂ	鹿児島市郡元町	○	「厨」		32
35	共研公園	鹿児島市中央町	○	不明		33
36	鹿児島城二之丸跡	鹿児島市城山町	－			43
37	平松原	姶良郡姶良町	○	「中」	刻書土器出土	34
38	小倉畑	姶良郡姶良町西餅田	○	「田人」「吉」他		35

第41図は日置郡を中心とした薩摩半島における古代の赤色土器が出土した遺跡の位置図である。この図から赤色土器が出土した遺跡は主として薩摩半島西岸に沿って分布していることがわかる。古代，駅路は日置郡から阿多郡にかけては通っていなかったとされるが，この図からは国府から日置郡を経て阿多郡へ至る伝路（あるいは伝馬路）が延びていたことが想定できるのではないだろうか。また，薩摩半島を横断するように現在の日置郡から鹿児島市にかけても分布している。南九州西回り自動車道のルート上にあるフミカキ遺跡・宮尾遺跡・山ノ中遺跡では赤色土器が出土し，その中でも宮尾や山ノ中遺跡では墨書土器も出土している。特に山ノ中遺跡では本遺跡と同じ「在」と墨書された土器が出土している。このほかにも日置郡と鹿児島市との境に赤色土器・墨書土器双方が出土した遺跡が２遺跡分布しているが，常盤原遺跡が所在する郡山町は郡倉が分置された倉院のあった地と考えられており，横井竹ノ山遺跡では「肥道里」の墨書土器が出土し，近世の参勤交代路とも隣接している。これらのことから，これらの遺跡の近くを薩摩半島を横断する伝路が走っていた可能性が考えられる。

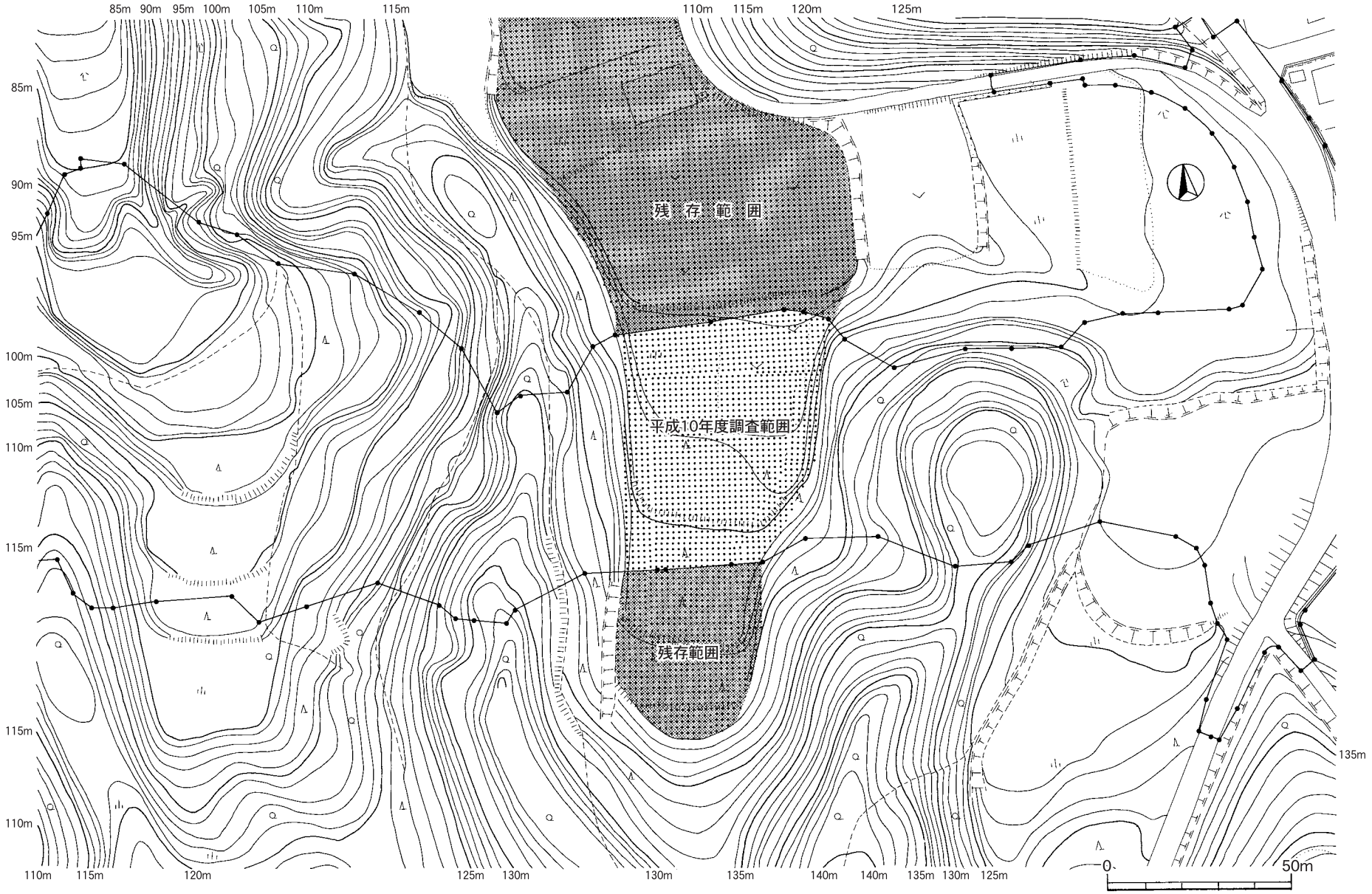
赤色土器・墨書土器の双方が出土した遺跡をみると，郡衙が置かれていたと考えられる地域や郡境に集中していることから，郡衙との関連や伝路との関連も考えられよう。また，日置郡では伊集院町のほかに，市来町にも集中している。ここにも郡山町と同じく倉院が置かれており，それとの関連も考えることが必要といえよう。

以上のように，下永迫Ａ遺跡は古代を中心とした遺物が殊に重要と考えられる遺跡である。特に赤色土器の多さについては，本遺跡の性格を解明していく上で極めて重要である。また，本遺跡と同じく赤色土器や墨書土器が出土した遺跡との関連や遺跡の位置等を検討していくことで，古代の日置郡あるいは薩摩半島の様相の解明につながっていくものと思われ，今後さらに検討を重ねていく必要がある。

【参考文献】

1　伊集院町誌編さん委員会編『伊集院町史』 2002
2　伊集院町1976『伊集院郷土史』
3　中村和美「鹿児島県（薩摩・大隅）における平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究』Ｘ　日本中世土器研究会　1994
4　中村和美「古代前期の煮炊具－肥後・日向・薩摩・大隅－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東４煮炊具』古代の土器研究会　1996
5　中村和美「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』31　鹿児島県考古学会　1997
6　中村和美「鹿児島県坊津と出土陶器」『貿易陶磁研究』18　貿易陶磁器研究会　1998
7　横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集』４　九州歴史資料館　1978
8　鹿児島県立埋蔵文化財センター「市ノ原遺跡第１地点」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(49) 2003
9　鹿児島県立埋蔵文化財センター「西原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(58) 2003
10　東郷町教育委員会「坂ノ下遺跡」『東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書』(６) 2002
11　東郷町教育委員会「五社遺跡」『東郷町埋蔵文化財発掘調査報告書』(１) 1986
12　鹿児島県立埋蔵文化財センター「計志加里遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(38) 2002
13　鹿児島県教育委員会「薩摩国府跡・国分寺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』 1975
14　鹿児島県立埋蔵文化財センター「大島遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(78) 2004
15　鹿児島県立埋蔵文化財センター「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(39) 2002
16　鹿児島県教育委員会「成岡・西ノ平遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(28) 1983
17　鹿児島県立埋蔵文化財センター「針原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(８) 1994

18　鹿児島県立埋蔵文化財センター「上ノ原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(62) 2003
19　鹿児島県立埋蔵文化財センター「犬ヶ原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(50) 2003
20　鹿児島県立埋蔵文化財センター「フミカキ遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(74) 2004
21　郡山町教育委員会「常盤原遺跡」『郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書』(３) 2003
22　鹿児島県立埋蔵文化財センター「横井竹ノ山遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(67) 2004
23　鹿児島県立埋蔵文化財センター「宮尾遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(73) 2004
24　日吉町教育委員会「瀬戸口遺跡」『日吉町埋蔵文化財発掘調査報告書』(１) 1993
25　日吉町教育委員会「原口遺跡」『日吉町埋蔵文化財発掘調査報告書』(４) 2002
26　吹上町教育委員会「笑童子遺跡」『吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書』(６) 1991
27　吹上町教育委員会「赤井田遺跡」『吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10) 1997
28　吹上町教育委員会「藤ノ元遺跡」『吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書』(12) 1998
29　金峰町教育委員会「山野原遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(７) 1995
30　鹿児島県教育委員会「小中原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(57) 1991
31　加世田市教育委員会「上加世田遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(４) 1987
32　鹿児島市教育委員会「一之宮Ｂ遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(26) 2000
33　鹿児島市教育委員会「共研公園遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(39) 2003
34　鹿児島県教育委員会「平松原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(58) 1991
35　鹿児島県立埋蔵文化財センター「小倉畑遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(34) 2002
36　鹿児島県立埋蔵文化財センター「栫城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査概要報告書』 2003
37　鹿児島県立埋蔵文化財センター「安茶ヶ原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査概要報告書』 2000　2001　2002
38　鹿児島県立埋蔵文化財センター「柳原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査事業報告書』 1999
39　鹿児島県立埋蔵文化財センター「山ノ中遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査事業報告書』 1996
40　鹿児島県立埋蔵文化財センター「持躰松遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査事業報告書』 2000
41　鹿児島県立埋蔵文化財センター「渡畑遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査事業報告書』 2001
42　鹿児島県立埋蔵文化財センター「芝原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査事業報告書』 2001
43　鹿児島県立埋蔵文化財センター「鹿児島城二之丸跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査概要報告書』 2004



第42図　下永迫Ａ遺跡残存範囲図

付編　科学分析報告

下永迫A遺跡出土土器に付着した赤色顔料分析

下永迫A遺跡出土の土器23点に付着した赤色顔料について実体顕微鏡，走査型電子顕微鏡による観察とエネルギー分散型X線分析装置（EDS）によるX線分析を行った。分析は鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の機器を使用し，測定は永濵功治（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。

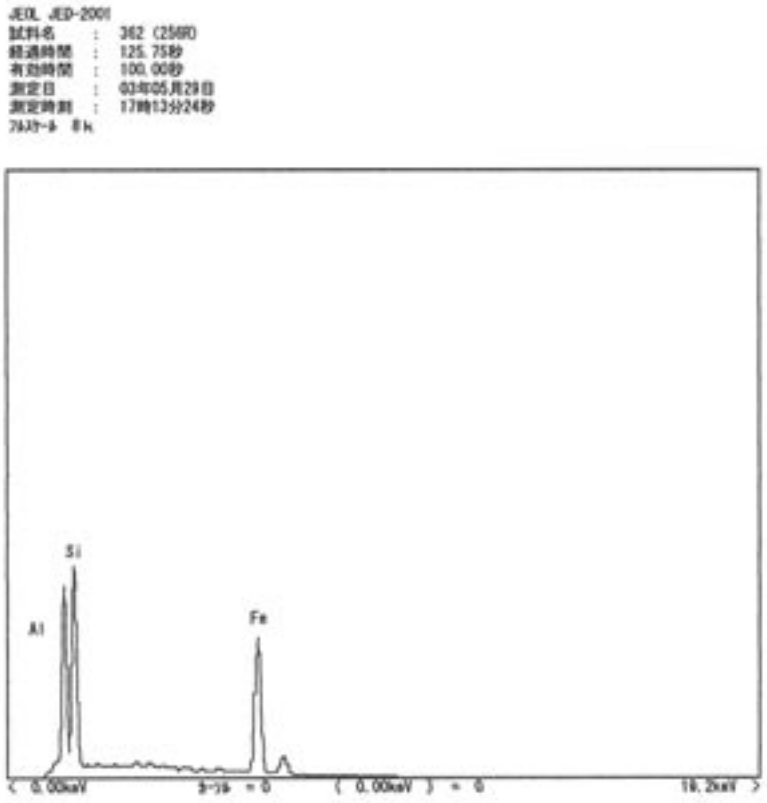
顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から大きく「ベンガラ」,「朱」,「鉛丹」の３種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），水銀朱は硫化水銀（HgS），鉛丹は四酸化三鉛（Pb_3O_4）を主成分とする。ベンガラはさらに原料，製法に多様性が認められ，細分化される。赤色顔料の歴史は，古いもので1.5～２万年前に北海道，東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり，朱は縄文時代後期から，鉛丹は古墳時代から使われてきた。

今回の資料は第Ⅱ，Ⅲa層（古代）出土の土師器に付着した赤色顔料で，肉眼及び実体顕微鏡で表面を観察したところ23点全ての土器の内面に顔料が塗布されており，そのうち３点は外面にも塗布されていた。しかし，土器は全て完形でないため偶然，顔料が塗布されていない部分を観察している可能性もある。また，断面の観察や付着状態から焼成による赤化とは異なり顔料が塗布されていると判断できるが，土器片が小さいため焼成による赤化との判別が難しいものもある。

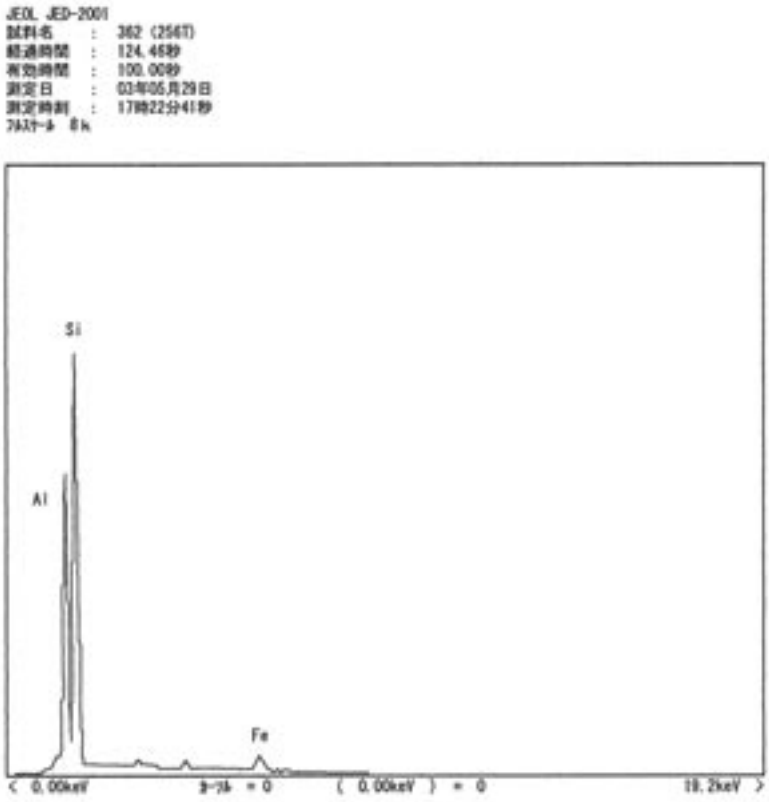
走査型電子顕微鏡（日本電子製低真空SEM・JSM－5300LV）で形状観察を行った結果，いずれの試料も特徴的な粒子は確認されなかった。さらにエネルギー分散型X線分析装置（日本電子製EDS・JED－2001）を用い，加速電圧15.00kV，取り出し角度29.05°，作動距離20.00㎜，有効時間100秒の条件で分析したところ，全ての顔料でFeのピークを得た。また，分析の条件を統一し，赤色が塗られていない部分に照射し，検出元素の強度比較を行ったところ，赤色部分の方が強いFeを検出した。Al，Siは土器の胎土成分や土などのコンタミネーションと考えられる。以上の結果から，これらの土器に付着した物質はベンガラなどの鉄を主成分とした赤色顔料である可能性が高いと言える。

顔料が観察された場所	土器の点数	SEM像	検出元素
内面のみ	20	特徴無し	Fe，Al，Si　※1
外面のみ	0	特徴無し	Fe，Al，Si　※2
両面	3	特徴無し	Fe，Al，Si　※3

※１　土器内面の赤色部分で検出された元素
※２　土器外面の赤色部分で検出された元素
※３　土器内・外面の赤色部分で検出された元素



赤色顔料のＸ線スペクトル図



赤色部分以外のＸ線スペクトル図

写　真　図　版

下永迫 A 遺跡近景

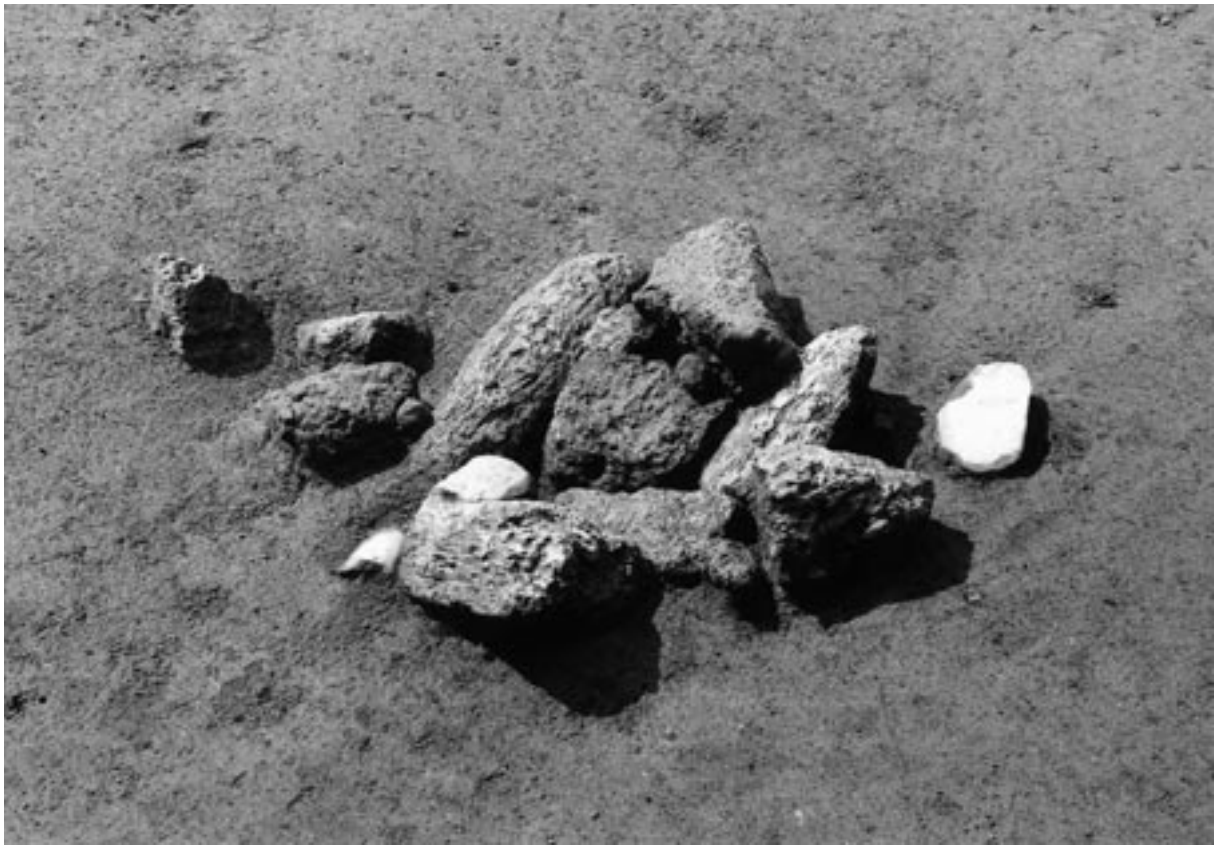
発掘作業風景

図版２

東西土層断面状況

南北土層断面状況

土　坑



集　石

図版４

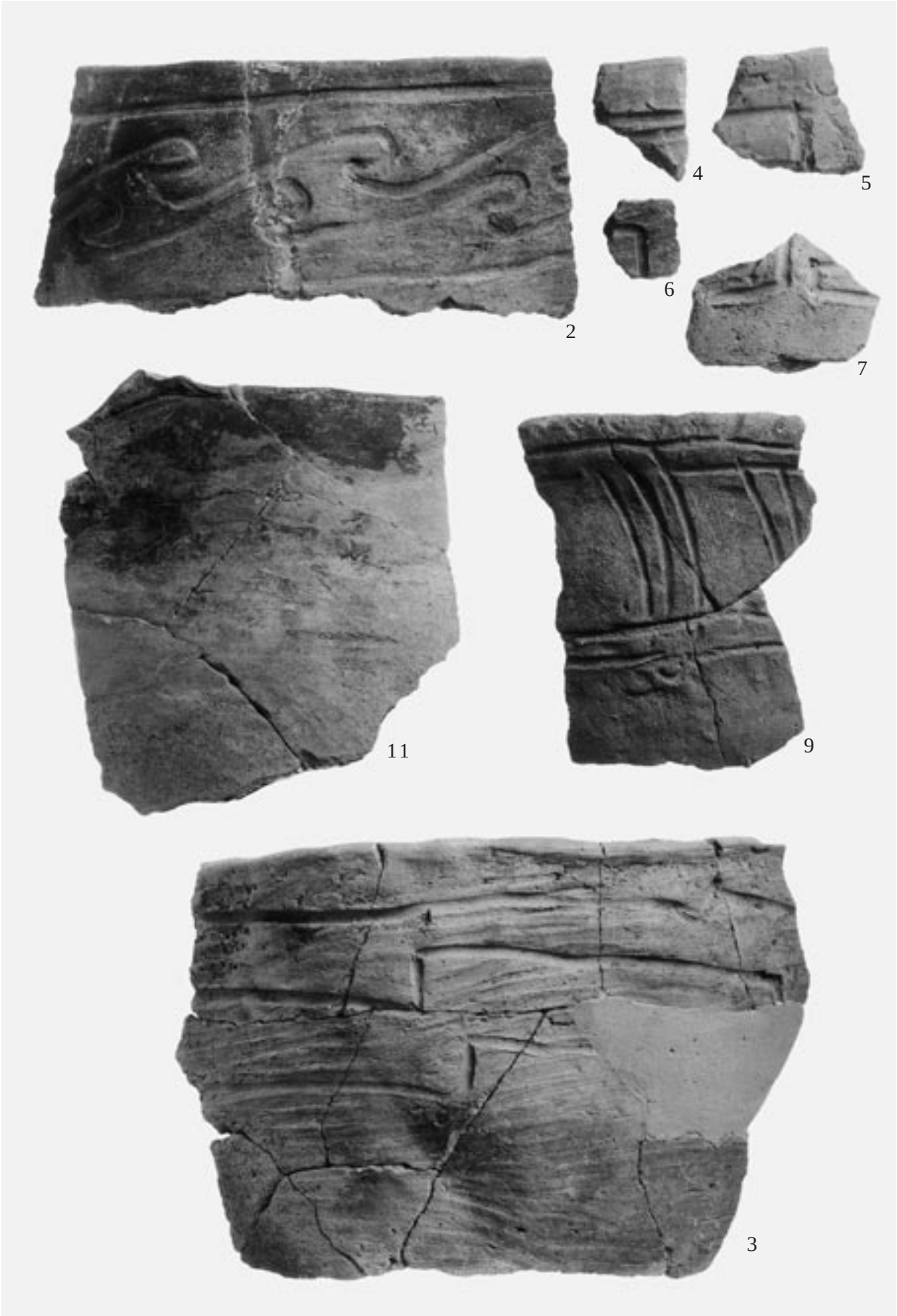
Ⅲａ層縄文土器出土状況（K－22，23区）

Ⅱ層土師器出土状況（K－22区）

Ⅱ層土師器出土状況（J－23区）

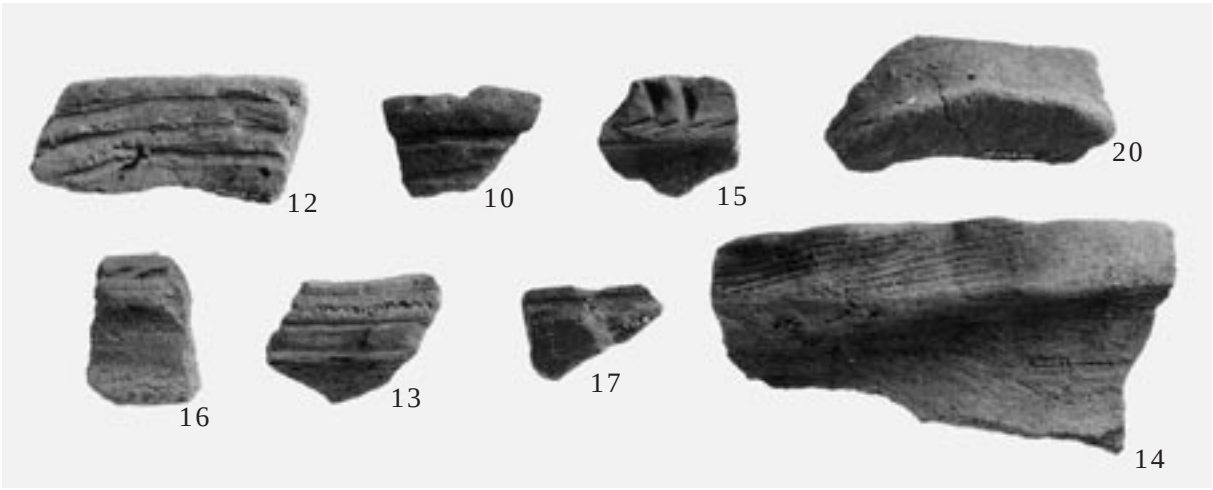
Ⅲａ層土師器出土状況（G－22区）

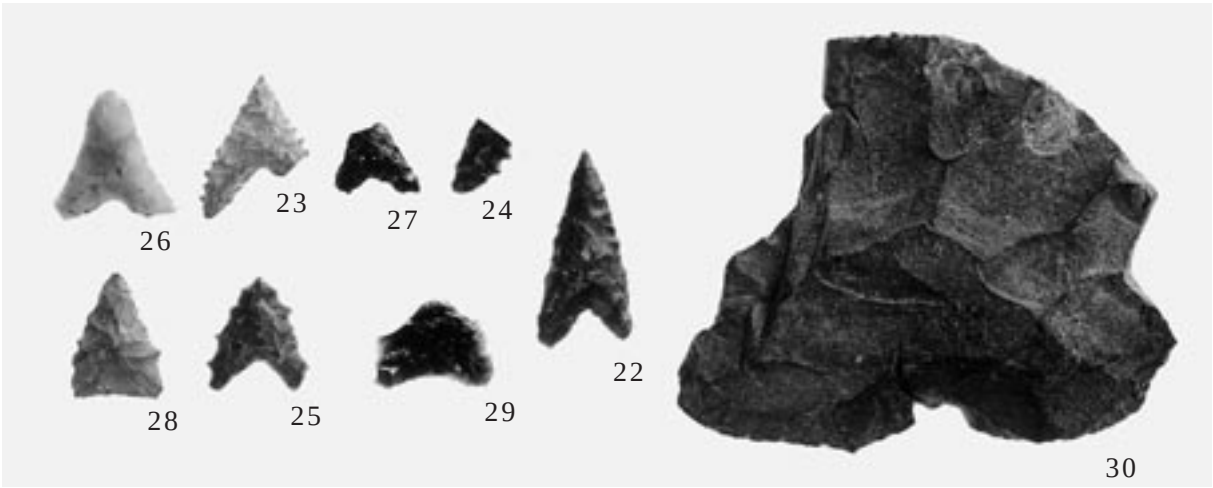
Ⅲａ層砥石出土状況（G－22区）



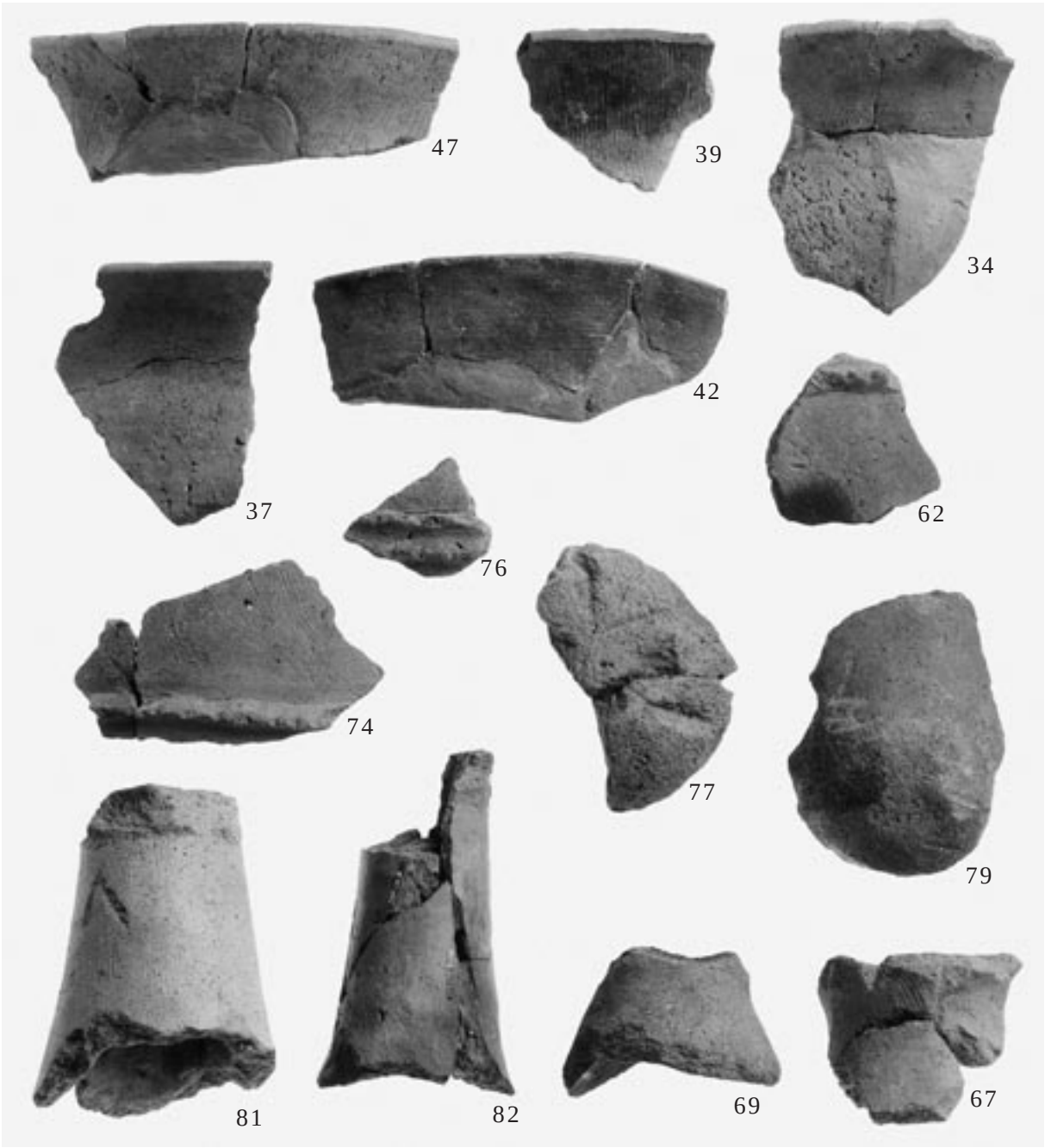
縄文時代の遺物(1)（土器）

図版６



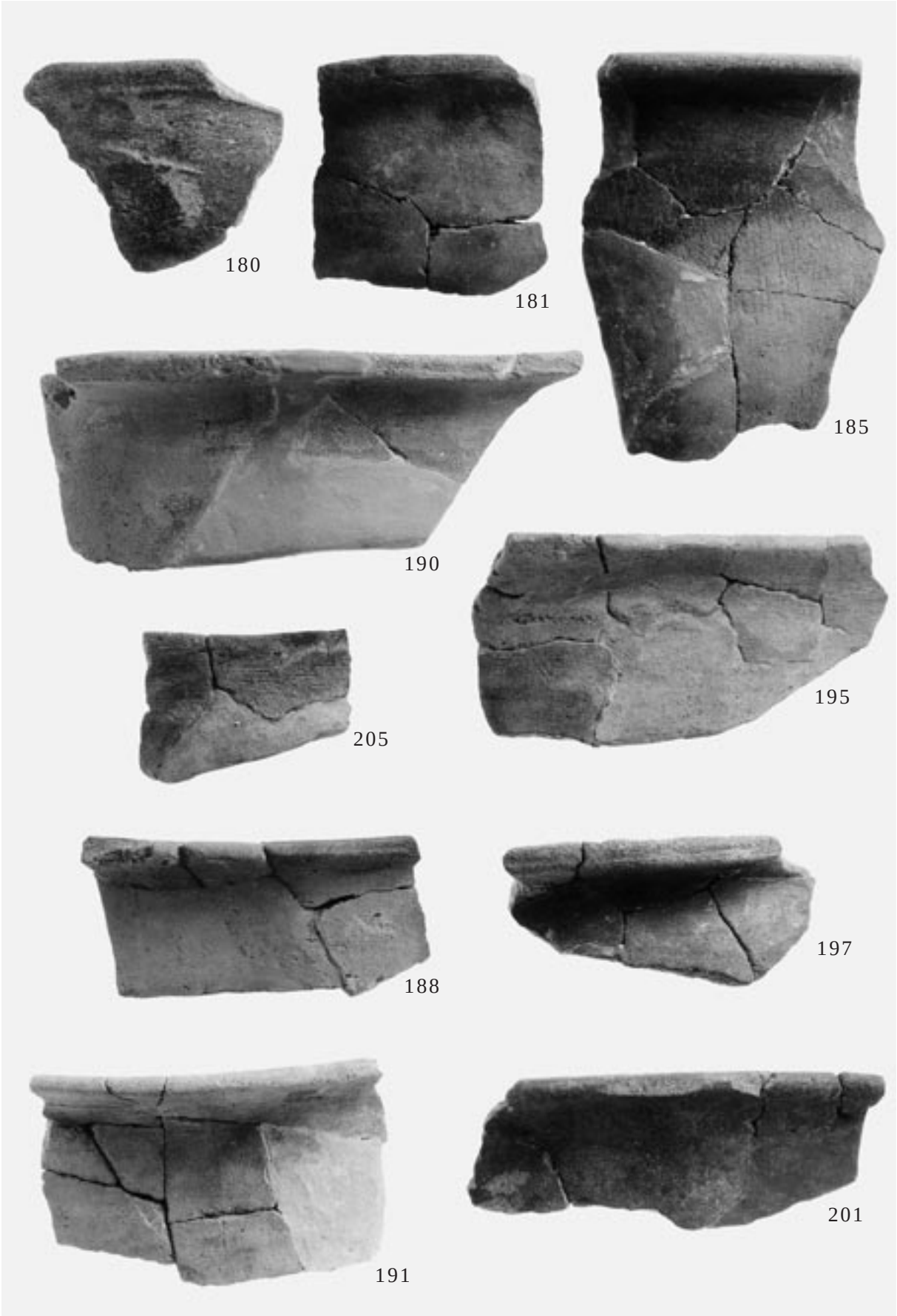


縄文時代の遺物⑵（土器・石器）



古墳時代の遺物

図版８



古代の遺物(1)（土師器：鉢・甕）

83

99

84

103

88

132

89

136

94

137

古代の遺物⑵（土師器：坏・**埦**）

図版10

140

141

142

143

177

211

218

237

238

古代の遺物⑶（土師器：**埦**・皿，黒色・赤色土器）

240

243

247

282

283

285

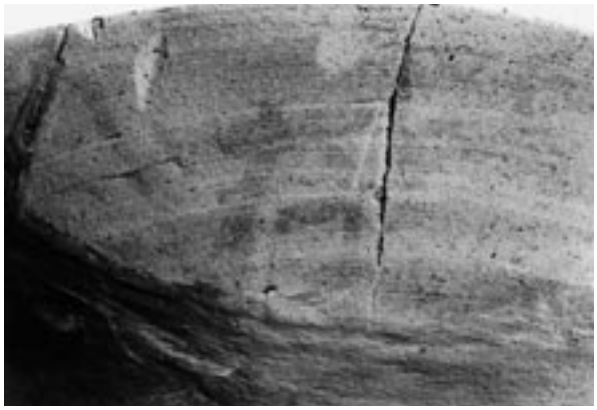
289

296

299

古代の遺物⑷（土師器：赤色土器・墨書土器）

図版12



282

283

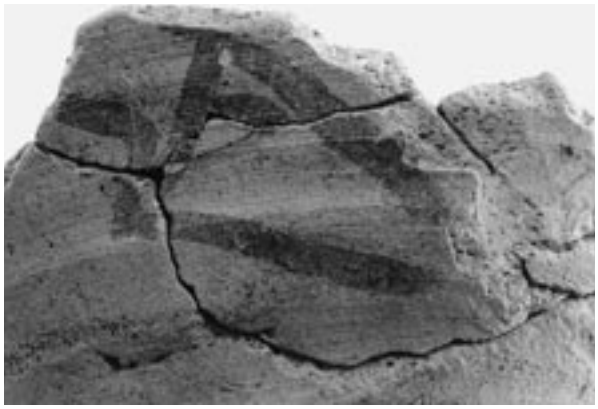
284

285

287

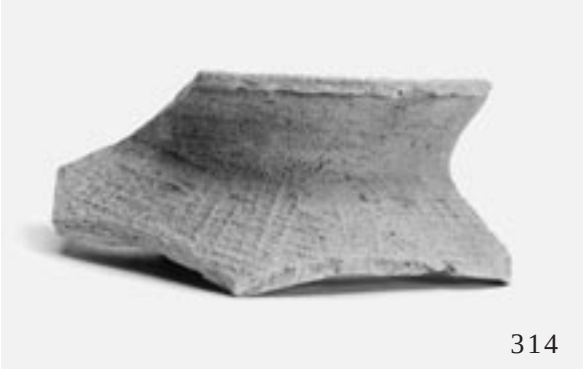
290

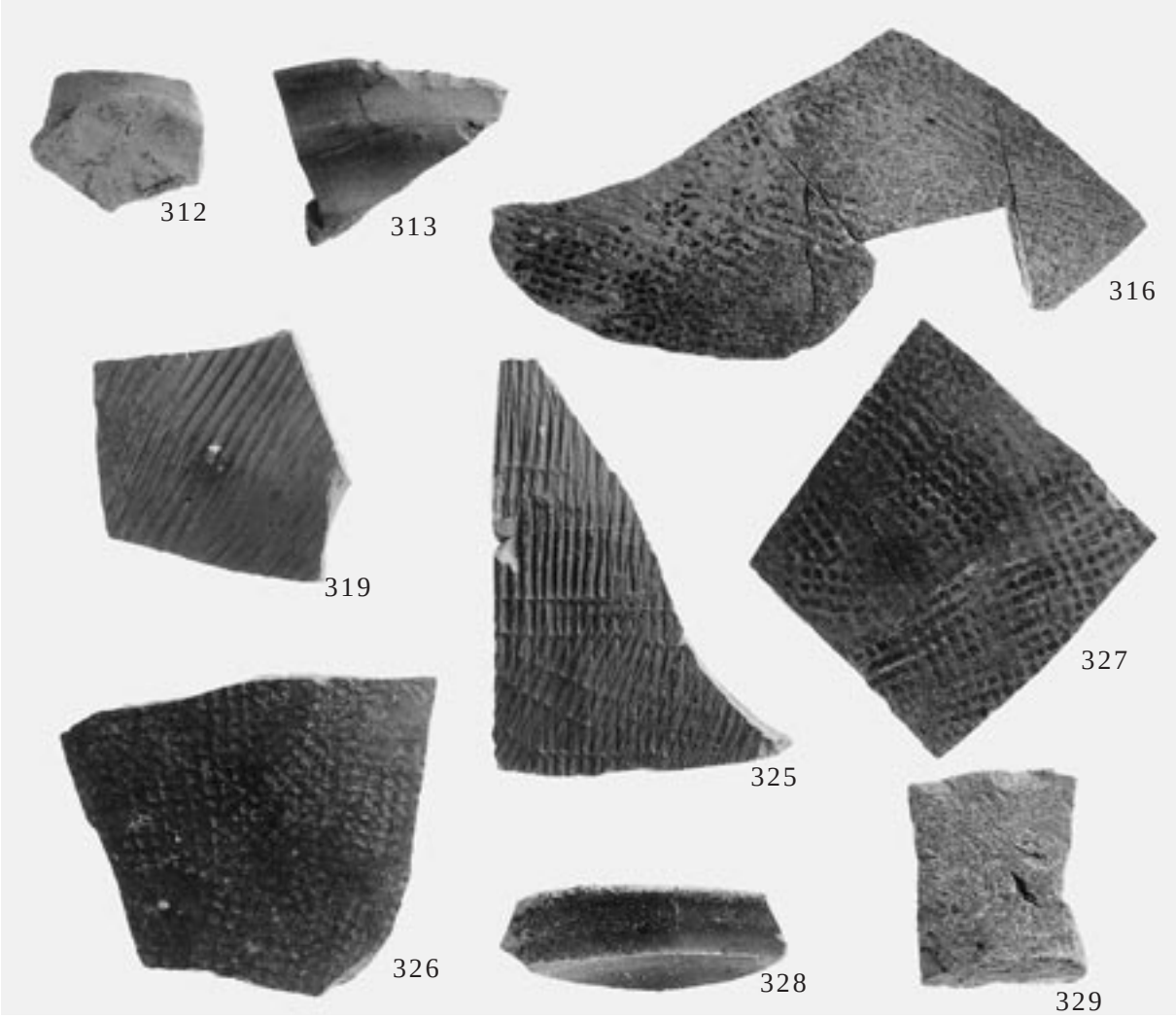
289



296

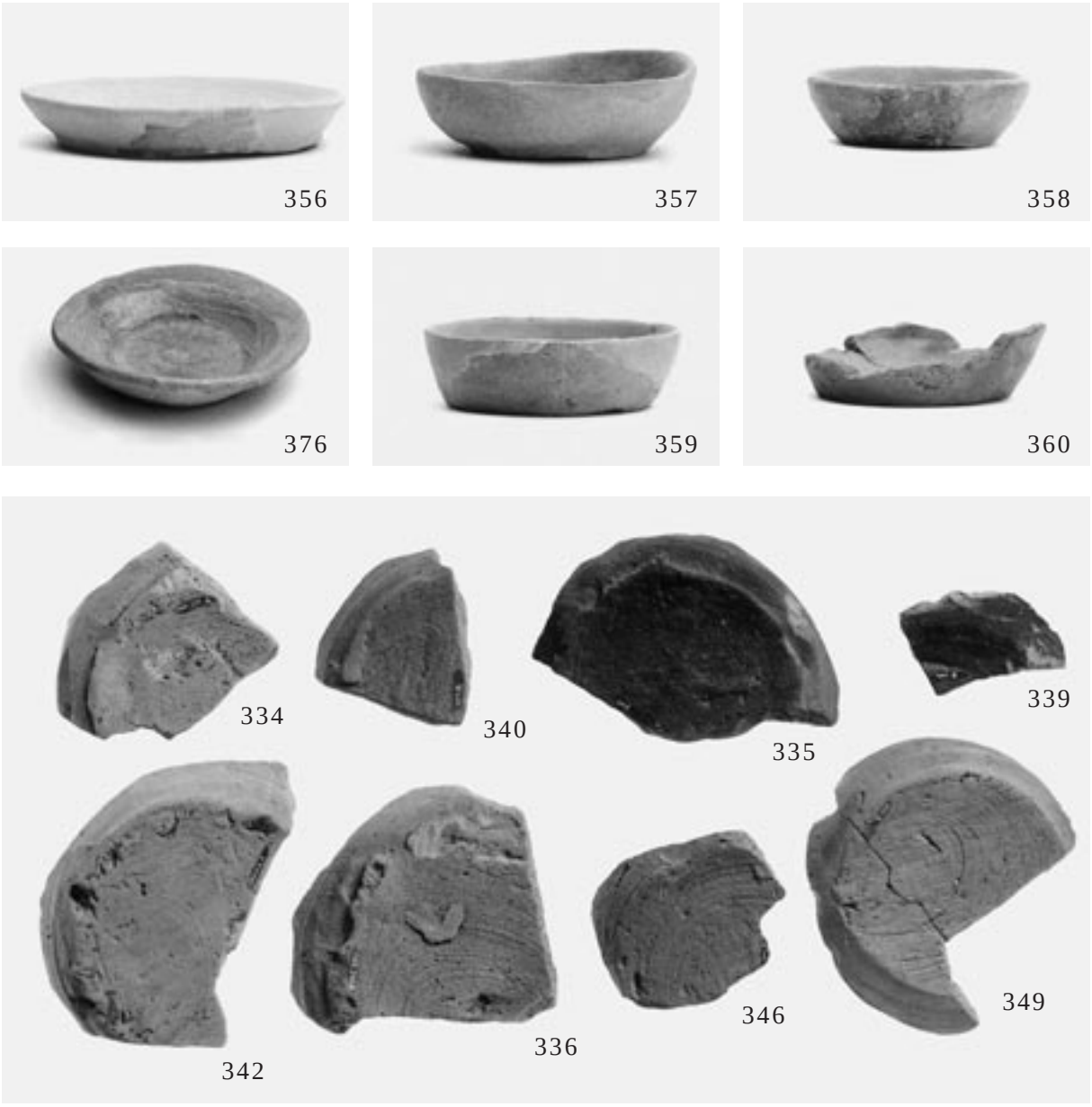
古代の遺物⑸（墨書土器）





古代の遺物(6)（須恵器・砥石）

図版14



中世の遺物（土師器・青磁・染付・陶器）

あ と が き

毎日，戸惑いながら報告書を作成する日々が続いた。遺跡の様子が全くつかめなかったため，現在では道路となっている遺跡を歩き，地形や景観を確かめ，何とか調査時の様子や古代の遺跡の様子をイメージしてみようとした。しかしながら，地形は大きく変貌し，当時の様子を思い描くことは難しかった。それではと，調査に携わった職員の記憶をもとに，諸先輩方のアドバイスを受けながら，残された記録や遺物を実測し，少しでもよい報告書を作成しようと努力する日々であった。

整理作業を始めた当初は，遺構はほとんどなく，遺物量も多くなかったため，それほど重要な遺跡ではないとの思いがあったが，整理作業を進めていくうちに，赤色土器の多さや鹿児島県では２例目の出土となる「在」と墨書された墨書土器など，重要な遺物が多数あり，改めて遺跡を見直すことになった。しかし，遺物はあるものの遺構はなく，いったいどんな施設があったのか，遺物を眺めながら頭を悩まし続けた。いろいろな可能性を思い描き，悩みに悩んだ末に完成したのが本報告書である。

さて，多くの方々の御協力・御指導により，ここに本報告書を刊行するに至ったが，本遺跡の歴史を多少は解明できたのではと思う。今後，検討を要するものが多いとは思うが，機会を見て不備を修正し，その責務を全うしたい。

最後に，発掘調査にあたり，多大な御理解と御協力いただいた伊集院町教育委員会をはじめ，発掘作業員として御協力いただいた地元の方々，整理作業に従事していただいた方々に心より感謝申し上げます。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）

下永迫Ａ遺跡

発行日　2004年２月27日

発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4461 鹿児島県国分市上之段1175番地１
ＴＥＬ（0995）48－5811

印刷所　株式会社あすなろ印刷
〒899－0041　鹿児島市城西2－2－36
ＴＥＬ（099）250－7033